
No.0 !

軽い雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

No. 0 !

【Nコード】

N0840X

【作者名】

軽い雪

【あらすじ】

一般学生村雨は、トラック事故に合い死亡。

それは「神の失敗」というテンプレで、転生させてもらえる事に。

彼が望んだのは、二つの能力だった。

——狭間に生きる者の力を。

オリ主による、悲劇崩し。

彼は、どのように原作メンバーを助けていくのか…？
今小説は作者の処女作です。完結まで連載出来るよう頑張るので、
生暖かい目で見守って頂ければ幸いです！

オリ主　ぷろふいーる！（前書き）

すっげー今更なプロフィールですw

（2011. 11. 25）

オリ主　ぷろふいーる！

【身体設定】

f i r s tネーム…村雨　陸兎　（むらさめ　りくと）

2 n dネーム…ヴェン

身長は全盛期で185cm辺り。

体重は平均で髪の毛は金髪、目は蒼。

趣味は読書、ノーバディーの観察、悪戯

好きな食べ物はお米、ソーめん、肉等。後、枝豆。嫌いな物はスイカ、メロン。

好きでも嫌いでもないのはゆで卵。

性格は基本的テンション高め…だが、一目を気にするタイプ。

血液型はO型。

暑さに弱く、寒さにそれなりに耐性がある。だが心が熱い奴は大好き。

駆け引きが苦手で、交渉事が特に苦手。

ある程度は目の上の人に対して敬語を使うが、
本人でも気づかない内にタメ口になってたりする。

分け隔てなく交流を持つよう心がけている。

お節介でもあり、大の驚かせ好き。

特に、『冷静、クール、イケメン等の顔が驚愕に浮かぶのを見ると』
達成感が浮かぶらしい。

ただ、時々加減を間違えて遣りすぎてしまう事もある。
遣りすぎた場合には、ちゃんと謝っているようだ。

テンションの上がり下がりで口調が変わる。

主に作者のせいだと言われているが本当のところは解らない。
(ネタに走ったり：等。)

【能力】

「13 organization mode (十三機関モード)
」

十三機関のメンバー全員の使用能力を使用する事出来る。
メンバーの能力を使うには、格メンバーの？称号？を唱える。

No. 1 「狭間の指導者(The leader of an

interval)」属性：無

タイプ：接近型

No. 2 「魔弾の射手(Freshooter)」属性：空間

タイプ：遠距離型

No. 3 「旋風の六槍(Whirlwind Lancer)」
属性：風

タイプ：近接&遠距離どちらとも可

No. 4 「いてつく学究(Chillly Academic)」
(今小説では凍てつく学究。)属性：氷

タイプ：援護、若しくは遠距離型

No. 5 「静かなる豪傑(Silent Hero)」属性：土

タイプ：接近型

No. 6 「影歩む策士(Cloaked Schemer)」属性：
幻

タイプ…特殊型

No. 7 「月に舞う魔人 (Luna Diviner)」属性…月

タイプ…接近型

No. 8 「踊る火の風 (Flurry of Dancing Flames)」属性…炎

タイプ…中距離orゲリラ型

No. 9 「夜想のしらべ (Melodious Nocturne)」属性…水

タイプ…遠距離型

No. 10 「運命を賭す者 (Gambler of Fate)」属性…時

タイプ…特殊

No. 11 「優雅なる凶刃 (Graceful Assassin)」属性…花

タイプ…接近型

No. 12 「非情の妖姫 (Savage Nymph)」 属性…雷

タイプ…ゲリラ型

No. 13 「めぐりあう鍵 (Key of Destiny)」 属性…光

タイプ…近接&遠距離可

基本的には、能力の無駄遣いになりそうではある。

能力についての制限は、重複不可ということ意外は特にない。

闇の回路については封印させてもらっています。…そのときになったら使えるかも。

あくまで、能力が使えるだけなので、基本スペックを鍛えなければならぬ。

因みに不老という大きいおまけ付き。流石に不死ではない。

つまりは、防御力は能力不発動状態の場合は一般人と変わらず、銃弾が頭に貫通すれば死ぬし、

運が悪ければ、食中毒でも死ぬ場合がある。

「ノーバディー創造」

ゲーム内の敵キャラ、「ノーバディ」のあらゆる種類を創り出せる。能力レポートの同じく詳細が記載されているので目を通してもらいたい。

合計含めて15種類近くが存在している。

一体一体が強力で、異能による攻撃以外（物理攻撃等）は攻撃が通用しない。

ノーバディ等の説明に関しては、[Wiki](#)や小説内で説明している巻があるので
そちらを参照してください。

「アーマー・テラ有能力」

通称、鎧の男。

長身の鎧の姿になり、キープレードを變形させて戦う。

『KH2FM』で間違はなく最強を誇る裏ボスで、キングダムハーツ史上で一番「戦って楽しかった」

と評判である。残念ながら、作者にはトラウマしか残っていない。

「ヴァニタスの能力」

ヴァニタスはラテン語で「空」という意味。

それが理由なのか、主人公「ソラ」と瓜二つの顔をしている。ラスボスの一人。

純粋な闇の心から生まれた存在で、闇の力を振るう事が出来る。

能力使用に至って、闇を自ら取り込む必要がある。
絶妙なバランスによって本当の力を振るう事が出来るが、少しでも
闇に押されれば、理性が薄くなる。

能力レポート（前書き）

2011／11／21

ランキング、No1～4までの能力詳細記載。

..／12／3

能力について少し追加記入

能力レポート

【簡易機関強メンバーTOP3】

一位 No. 1

二位 No. 3 / No. 5

三位 No. 13

(公式設定)

【機関メンバー能力／その他詳細】

No. 1 称号…狭間の指導者
属性…無 武器…エアリアルブレード 配下ノーバディ…ソーサラー

機関のボス。十三機関を束ねる人物である。

実力は機関内最強で、声優があのだ本さんである。(バルバトス、ドラゴンボールのセル等の声と同じ)

彼に逆らった者は容赦なく下級ノーバディにされてしまう。(主にダスク)

被害者が居るかどうかは解らない。でもなぜか機関メンバーはそれ

を信じる。

NO. 8もその一人で、「奴に逆らったら、ダスクにされちまうぞ！」と言っていた。

因みに、その時の反逆者はNO. 13だが、最終的にダスクにされる事はなかった。

武器「エリアルブレード」は、機関メンバーでも祐一、未来的な武器。

見た目スターウーズの「ライトセイバー」である。
剣などにある、柄はなく、手からそのまま赤い光が棒状に伸びている。二刀流。

原作では主人公にライトセイバーがあたっても切れるような事はなく、打撃に近いようだった。

（そこで切れれば確実に？Z？指定を受けるだろうが。少なくともグロ注意にはなる。）

いや、単純に主人公が堅いのか。

今小説では、『無のエネルギーで刀身を作っている』という設定でスッパリ切れる。

振ったらブンブン音がする。これは原作でもだが。

他にも、武器と同じ色の赤いビームを大量に乱射したりする事が出来る。

今小説ではこれも、武器と同等の威力を持つ事とする。なにやら軌道も変えられるらしい。

変幻自在の体術、おまけに分身最高二人。
分身については、偏在と同じ設定に。

KH2の覚醒技（必殺技）は、ドーム状に配置された無数の光弾を
相手めがけて一斉に降り注がせる「全方位ショット」。

そして、バグな主人公を苦しめた『闇へのいざない』『無へのいざ
ない』。

効果は「徐々に主人公の体力を奪う」という物。本作でも、徐々に
相手の生命力を奪う。

（『闇へのいざない』は少し違うが、効果はさほど変わらないので
同じとする。）

最終決戦の『鎧モード』であるが、

「No. 13を除く、全ての機関員の能力が使える」という物だが
…。

今小説では封印となる予定である。

他の状態変化は、『身体能力の向上』等が含まれる。

No. 11 称号…魔弾の射手 (Fresh shooter)

属性…空間 武器…ガンアロー 配下ノーバディ…スナイパー

武器である「ガンアロー」は、クロスボウという弓矢を射出する武
器と銃を融合させたような物。

射出するのは紫色のエネルギー弾で、補充をしている所、リロード

は必要らしい。

因みに、ノーバディーになる前：一般人の時から愛用しているようで、その頃から瞬間移動が出来た。

主人公といい、人間なのかと疑いたくなる。

（主人公もちゃっか瞬間移動が出来る。空も飛べる。正確には滑空だが。）

攻撃方法は、謎の重力逆さ状態からの射撃を含め、死角からの射撃、二丁のガンアローを合体させ、スナイパーライフル式にして狙撃したりが基本。

ちゃっかり、エネルギーを強く収縮させた一回り大きい弾を射撃してきたりもする。

因みにその弾は暫く地面や壁を跳ね返ったりしている。

移動は瞬間移動、そして主人公を接近させない為の空間変異等が出る。

リミットカード版（単純に言えば、強化された状態）では、無限バウンドでも付けた訳でも無いのに、段数無限だったり、弾速が早くなっていたりもする。

今小説では、殆どの力を使えるようにしている。

ガンアローの能力については、

『気絶打ち』：文字通り相手が気絶する程度の威力

『狙撃』：スナイパーライフル式にガンアローを合体させる。

『レイフォールガン型』：限られた時間ではあるが、弾がその場に

留まる。

時間が経つと再び停止前のスピードに戻る。

『ニキータ型』：追跡型の弾を一発のみ、発射する。威力の大小は変化させる事が出来、

大きさと威力は比例する。（デカければ威力も高くなる）

等、様々な打ち方が出来る。

自分も人間を止めているからなのだろうか、

主人公の事を「今までのキープレードの使い手に比べると随分とお粗末」と評している。

主人公が最強では無かったら：考えるだけで恐ろしい。

No. III 称号：旋風の六槍（Whirlwind Lance）

属性：風 武器：ランス 配下：ノーバディ・ドラグーン

武器は「ランス」、合計六本の槍による長いリーチを生かした連続攻撃をしてくる。

片手に一本、もう片方に二本持つ。他の三本はそれぞれ、風の力で身のそばに浮かせている。

攻撃の際に主人公に向けて、扇状に放ち、突く。それか、六本を同

時主人公へ放つ。

槍がそれぞれ襲いかかってくる事は無いものの、突如上空から表れ、奇襲する事も出来る。

そして厄介なのは、No.？自身が絶えず風のバリアが張られていて、主人公が接近して攻撃しようものなら、

逆にダメージを受けてしまう。おまけに、何故か魔法までも弾かれる。

バリアを一時的に消して、ダメージを与える為には、特殊コマンドを使わなければならない。

（リミットカット版のみ）

無論、風の刃を利用した攻撃も。

覚醒技は六本の槍を変形させ、竜のようにし、その口から暴風を放つ、「絶望の風」。

今小説では、上に書かれた物と殆ど変わらず。

「絶望の風」は変形して竜が完成するまで射出出来ない。故に隙だらけ。

その代わり広範囲撲滅兵器に分類され、威力はとんでもない事になる。ハイリスクハイリターン。

六本の槍がどうすれば竜の頭になるのか解らないが、体の大きいNo.？が割と余裕で乗れている所から、結構な大きさを誇る。

自らが「生み出した」風の性質を変化させる事が可能で、

刃のように切り裂く風にも、ただ、敵を吹き飛ばす風にしたり。

一瞬にして30マイル程の竜巻を発生させる事も可能。無論、30マイル以上も可能。

No. IV 称号…いてつく学究 (Chilly Academy
mic)

属性…氷 武器…シールド 配下ノーバディ…

武器は「シールド」文字通り、体を守る為の盾で、No. 4の前に
絶えず浮いている。

シールドによって前方からの攻撃をすべて無効化させる事が出来る。
耐久度が一応あり、破壊する事でNo. 4にダメージを与えられる
ようになっていたが、時間の経過と共に再生する。

氷を用いた攻撃は、氷結の刃を作り出し、地を滑るように対象を追
いかけ、切り裂く攻撃の他に、

覚醒技は二つ、全てを眠りへと誘う(?) 絶対零度(?) の吹雪を
起こす「ダイヤモンドダスト」

二つ目は氷塊で極限まで対象を凍りつかせ、氷山を突き上げ粉碎す
る「アンサンブル」。

学究の名に恥じない技もある。

展開した魔方阵(ノーバディーマークを円で囲ったような物)を主
人公の下に張り付かせ、

情報の解析を行い、吸収を終了、主人公のクローンを生み出し、放
つてくる。

他にも、戦闘では出てこないが、本人とソックリそのままのクロー
ンも生み出せる。

（といっても、アンチモードという主人公が稀になる変身状態のタイプが襲いかかってくる。）

今小説では、特定範囲内（それほど広くはない。自衛には困らない程度の範囲）を突如

凍りつかせる事が出来る事に加え、氷に対する？耐性？が出来る。

（寒さを感じない、凍りつかない等）

逆に、火など高温を誇る物には滅法弱い。盾も火による攻撃には直ぐに壊れる。

基本戦法はヒット&アウェイ。

氷結の刃で対象を追跡させ、接近してきた武器や攻撃を盾で身を守りつつ回避する。

そして魔方陣で対象のデータを解析、分身を作り出し、援護させる。

能力レポート（後書き）

これできんじゃない？

っていう能力応用法もある程度、考えています。

なにかアイディアがあれば、感想で書いていただければ助かります。

No. 1 「プロローグ」 (前書き)

どうも軽い雪です。

一度間違って短編で投稿してしまったプロローグですW
ご指摘してくれた方、ありがとうございます。

では、どうぞ。

No. 1 「プロローグ」

「知らない天井だぜ☆」

…ごほん、開始初っ端から弾けてしまった俺、村雨だ。

只の何処にでもいる高校生だ。…多分。

現状を報告するとすれば、死んだと思った知らない天井が見えた。
ってところだ。

『大丈夫ですか…？色々な意味で。』

「大丈夫だ、問題ない…ってかおまい誰や？」

神だ！目の前に神がおる！何か神秘的なオーラがスゲェ！

『一度何処かで会いましたか？心あたりは無いですけど…』

「いんや、違う。…というかモノローグもとい俺の思考読むなんて
お前神だろ、」

『そうですか、…まあそれは良いとして』

良いのかよ。

それは兎も角、この人、神であることを否定しなかったよ！
やっぱりテンプレか！『ごほん。』おっと。

『すいませんでしたあ！』

わーお、見事な土下座だね！そういえば、【土下座】ストラップとかあったな。

何気ストラップはやってんだよ。myフレンドの筆箱にジャラジャラ。シークレットもあったな。

ん、過去を思い出してたけど気にスナ。

それは兎も角、目の前で土下座しているのは割りと若い姿をしている自称神。

——って追い待て、なんで俺は土下座されてんだよ。

『私のミスで（省略）貴方は死んでしまったんです……。』

「はあ！？…要するにアンタの事務用インクが俺の生命を現す、紙に落としてしまったと？」

…さてよ、でも俺の死因、溺死じゃねーから。あ、別に死因とは関係ないのね。

トラックに吹き飛ばされてスプラッタな筈だから！

因みに人間って首ぎっちゃんしても、

血が流れている数秒——それこそほんの数秒だが、生きてんだぜ！？

あれはトラウマもんだわ。というか吐いたな俺。

まあ、バラってたから無理だけど。

『そこで私は…私の上司なんですけど、その上位の神様から貴方を侘びで転生させなさいとの志命を受けたんです。』

「なるほろ。で、俺は生き返られるのか？」

人間、二度目の生が得られるなら、泣いて藁にしがみつくぜ。

つまりは俺もその一人ってわけだ。まあ、特に未練もないからこん

な平常心でいられるんだろうけども。
人生何となく生きていただけだしなあ…。

『元の世界には無理です…すみませんが、それが掟となってるので…。』

「はあ、して、その掟ってなんぞ？」

——つまりは、俺をもといた世界に戻すと、輪廻の輪が崩れるらしい。

それってやばいのって、聞いてみたよ。そしたら、目の前の神様、顔青くしてたよ。

よっぽど酷いことが起きるんだな。すげー気になるぜ☆

正直、納得の？な？の字もたいして出来てないが、生き返られるなら結果おーらい。

「んで、なんなら俺を生き返らせることが出来るんだよ？」

『えっと…簡潔に言えば、ぱられるわーるど平行世界に転生してもらいます。』

「えっ、えうと…パラレルって何ですか？」

『想像の世界、もう一つの世界、まあ色々な呼び方がありますね。』

「えっと…じゃあ、本の世界とかも有りなのか？」

はい、と頷く神に俺のテンションはじわじわ上がり始めた。
どうせ楽しむなら、楽しもう。―そして一番気になる部分、お願い
をどれほど聞いてもらえるかは…。

『CAPCTYは4つまでですね。…私より上位の存在になれば、
まだ増やせますが…。』

「あー、それで十分な気がする。」

ひゃっはー！

お願いごとは4つまで。やったね！

ならばどんなお願いをするか。

あー、こういう時って、いざとなるとどんなチートにしようか迷う
な…。

というか、チートの基準がわからないし、それらしいバトル漫画も
少しも持ってねえ。

「うーん…なら一個目は…。」

一個目。

思いついたのは、ゲーム「キングダムハーツ2」からNO. 13,

N09の能力を得る、というものだった。

しかし、神様の『機関全員の能力を使えるようにしときますね』との一言により、全取得。

どうやら武器も使えるらしい。

二個目。

二つ目以降は悩んだ。

正直、一つ目で「僕、満足！」と草薙○君ボイスが響いたのだが、どうせなら何か追加することに。

ノーバディーを創り出す能力にすることにした。ーダスクからトライトゾーンまでなんでもござれた。：確かノーバディーの発生条件やらなんやらある気がしたが、まあ気にしたら負けか？

三個目。

とりあえず、不老にしてみようことに。

これで、好きな時まで生きられるし。さすがに不死は気がどうにかなりそうだからな。

四個目。

容姿をN0. 13の姿に。

なんだかんだで好きなんだよねN0. 13。

うん、僕、満足。

ついに旅立ち時が来たようだ。

『それじゃあ、貴方の行く世界ですが、【ゼロの使い魔】の世界です。』

「え、それって何処——うわえあああいい！」

何処ですか、と問おうとしたらいきなり視界がぶれ、気づくと謎の穴にまっさかさま。

どうやら世界は選ばせて貰えないらしい。畜生。

嫌な予感しかない俺だった。

『あら：そういえばノーバディーって不老だったはず…
：後でお詫びと訂正加えなくちゃなあ：。』

又もや神が失態を犯している事に気づかずに。

No. 1 「プロローグ」(後書き)

色々可笑しい部分も出てくるかもしれませんが、がんばります。

誤字や認識の間違いがある部分は報告していただけるとありがたいです。

それでは。

(2011. 11. 25 一部内容変更)

10/20 神様の最後の一言追加。

No. 2 「転生、そして能力詳細」 (上) (前書き)

どうも、軽い雪です。

今回は、転生と機関メンバーの能力について、です。

ノーバディー創造の部分はどうかと思ってるんだよね…。

あんま長い訳じゃないですけど、色々と整理したいと思ってるので
上下分けました。

名前については深く考えないでくださいw

No. 2 「転生、そして能力詳細」 (上)

ここはトリステイン王国内のある村。

その小さな村のひとつの家。

「生まれたぞ！」

「男の子ですって！」

「わー、すごい！」

その家で、一人の男の子が生まれた。

「おぎゃあああ、おぎゃあああ。」

その子供の名前は「ヴェン」。
産声を上げるその子は――。

「おぎゃあああ。（なんてこったい…）」

転生した村雨、その人だった。

俺だ。村雨だ。

意識が無くなったと思ったら、次、目を覚ました時はこうなったんだ。

——畜生、あの神、急に俺を急かしたのはこのせいか！

「リーナ、見ろよ、俺たちの子供は無事に生まれたぞ…！」

「え、ええ。私たちの子ね。…ふー…疲れたわ…」

どうやら声の主が俺の親らしい。

つまりは俺…村雨は赤ちゃんに転生したらしい。

——あれ？確か、お願いの中に、「不老」あったよな？大丈夫か？

（大丈夫ですよ。一応、見た目それなりの大人で止まるようにしておきました。）

あれ、答えてくれた。

まあ、とりあいずこれで一生赤ん坊、とかいう詰み状態は回避できた。

しかし、そろそろ赤ん坊の本能（？）で叫び続けたので疲れた。それに、眠くなってきた。

「おぎゃああう。（ねーむー。）」

そして俺も母となった女性の腕の中でこの世界初めての眠りについたのだった。

☆☆☆☆

キングクリムゾン。

——ぶっちゃけ、五年程時を飛ばさせて頂いたぜ！

赤ん坊の毎日は發揮しいって退屈だろうからね！

さて、現在五歳の俺は、周囲に愛されて育つ事が出来た。

直ぐに立って歩いたり、少しだが話せるという成長の早さに、両親と周囲を驚かせた。

正直、後から、これって異常な見せて良かったのか？と、不気味がられるかと内心ヒヤッとしたが、思いのほか抵抗がないらしく、いまでも変わらず普通の子供として扱ってくれていた。

この村はセンチエル公爵という貴族が治める領地のひとつで、他の北村、西村などとまとめて、「センチエル領」と呼ばれているようだ。どうやら、貴族や平民、そういう隔たりがあるところを見ると、割と昔な時代らしい。

そして、この世界には、御伽噺ともいえるような物が存在していた。

「魔法」だ。

会話で飛び交う「魔法」という単語に、俺は毎回聞き間違いかと思いい首を傾げていたのだが、実際に母が魔法で物を動かしているところ

ろを見て、信じざる終えなかった。

に、しても。

実際、魔法使いが出るような小説や漫画で【ゼロの使い魔】というタイトルは聞いたことが無いな。

ハリー・ポッターとかなら…まああれは有名だしな。

「まー、いいかあ。」

実際全然良くないのだが、まあ目的の一つ「平和に生きる」という目標は達成したい…と思うな。

あー、でも魔法使いの世界に來たのだから、無論、魔法は使いたいと思う。

魔法使いになれるのは最初から決まっているらしく、両親、または先祖に魔法使いの血を持つものがないと使えないそうだ。

平民にはその血が流れていないものがほとんどで、魔法が使えるのは貴族の者たちがほとんどだそうだ。

まあだから、貴族と平民という格差があるんだろうな。

この世界では魔法は圧倒的らしいし。

因みに、母はメイジであるのに、何故貴族でないのかというと、没落貴族なのだそうだ。

そこで平民である父と出会い、今があるらしい。

――で。

肝心の魔法適正といえば…。

「せんせー、杖契約ってどうするんでせう？」

「何いつてるのヴェン。…ほら、もう一度よ。」

母に契約の仕方を教わるも、それらしい反応すら見せない始末。

…おい、父ちゃんなんでホツとしてんだ！？

「良いじゃないか、リーナ。杖契約だって何週間もかかる奴もいるらしいじゃないか。」

ふーん、そうなのか。

でも、それっていつか使えるって事なんだよな。それじゃあ別にホツとすることでもないような。

「それに、『魔法が使える』ってだけで、仲間はずれにされるかもしれないだろ？」

さ、流石は我が父…そこまで考えてくださるとは…！

「それもそうねえ…、でも我が子がどれほど魔法が使えるかと思うと、わくわくしない？」

まあ、僕も気になる事は気になるけどね、と子供のように目を光らせる母を見ながら苦笑する父。

どっちかとゆーと、夫婦ってよりも、兄妹みたいだな。

さて、魔法のことは兎も角、与えられた能力のほうを試していたのだが、具体的に判らないことが多すぎる。

何故判らないのかというと、単純に人目を忍んで実験するタイミングと身体がこの5年間、無さすぎた。

「しっかあああつし！今こそ、実験の時が来たのだ！」

静寂。

所変わり、現在俺は村の近場にある森へと来ていた。

無論秘密の実験なのでギャラリーは居ない。…始めるか。

さて、今回始めに試したい事は決まっている。

『ノーバディーを創造できる』これをやってみようと思うんだ。

ただ、少し考える事があって、『創造する』事は出来るが『従わせる』事が出来なければ意味が無い。

ノーバディーに襲われて死ぬとか、ありそうで怖い。

「…やっぱ、機関メンバーの能力のほうがいいか…。」

という事でれつつとらい。

おっと。

その前に、ここで機関メンバー毎の武器を紹介。

No. 1…ライトセーバー二刀流。腕から直接赤いのが出ていた。
武器の正式名称は「エリアルブレード」。

他にも軌道が様々なビームや分身など。属性「無」

No. 2…クロスボウのような武器から、ビームなどを放つ事が出来る武器。武器の正式名称は「ガンアロー」。重力を無視した逆さの状態になれたり、瞬間移動、空間変異、腕だけ転移させる事も出来る。属性「空間」

No. 3…特殊な形をした槍。本人は風の力を操り、六本同時に扱っている。武器の正式名称は「ランス」。

槍を竜のように変化させて暴風を放ったり。属性は勿論「風」。

No. 4…主に氷の力を凝縮させた盾。（本人は科学者で戦闘に向いていない。）武器の正式名称は「シールド」。氷結の刃を作り出して敵を切り刻んだり、氷漬けにしたりする事が出来る。属性は「氷」

No. 5…巨大な斧のような大剣を用いる。武器の正式名称は「アックスソード」。

武器を直接振るうは勿論、投げつけたり、地面を隆起させたり、機関一の怪力を誇る。属性は「土」

No. 6…本など、「魔術書」のような物を使う。正式名称は「レキシコン」。幻術で敵を翻弄、幻術世界に捕らえる事も出来る。武器をコピーする能力も持ち合わせている。属性は「幻」

No. 7…大振りな剣を使う。武器の形状はどちらかというとメイスやハンマーに近い。正式名称は「クレイモア」。月の力を浴びると「バーサーカー」状態になり、武器が展開したり、口調が荒々しくなる。属性は「月」

No. 8…棘がついた手投げ武器を二つ使う。戦闘では常に炎を纏わせていた。正式名称は「チャクラム」。手裏剣のように投げつけたり、乱舞のように投げ敵を燃やし尽くす。炎の牢獄を創り出す事も可能。属性は「炎」

(チャクラム(チャクラ)は古代インドで用いられた投擲武器の一種。戦輪、飛輪や、円月輪とも呼ばれる。真ん中に穴のあいた金属製の円盤の外側に刃が付けられており、その直径は12-30cm程。投擲武器としては珍しく斬ることを目的としている。投げ方は二通りあり、円盤の中央に指をいれて回しながら投擲する方法と、

円盤を指で挟み投擲する方法がある。by Wiki)

No. 9..ギターののような楽器を使って、水を操る。武器の正式名称は「シタール」。

強く掻き均す事で、無数の巨大な水柱を発生させることも可能。属性は「水」

No. 10..トランプカードを使う。柄はノーバディマークが描かれている物。武器の正式名称は「カード」。敵をサイコロ、カードに変えたり、自身がカードの化けたりすることも出来る。属性は「時」

No. 11..身の丈ほどもある鎌を使う。武器の正式名称は「サイズ」。『*死の宣告』や、鎌を連続で振り回したり、敵を追跡する禍々しい力を放つ事が出来る。属性は「花」

(*この死の宣告は、原作では主人公のLvでカウント数が決まり、攻撃を受ける事にカウントが減る仕組みになっている。)

No. 12..指の間に複数挟めるほどの大きさのナイフを使い、電撃を操る。武器の正式名称は「ナイフ」。

テレポートや*分身、電撃、両腕から巨大な轟雷を放つ事が出来る。属性は「雷」

（＊分身が受けたダメージは本体にも入る。No. 1の分身や影分身などとは違う扱い。）

No. 13…鍵の形をした剣を使う。光の柱を剣から発生させることも出来る。武器の正式名称は「キープレード」。戦闘では殆どが二刀流で光の柱とも交えたコンビネーションで戦う。属性は「光」

うーん…一番気になるのはやっぱりキープレードだよな。
二刀流なのかそれとも、一本なのか。
さて、と。試してみるとしますか！

（下に続く）

N o. 2 「転生、そして能力詳細」 (上) (後書き)

改めてみると、期間メンバーの能力ってチートだよね…。
説明不足かもしれないけど、後々能力使用の時に説明すると思います。

(2011. 11. 25 能力レポート追加)

誤字、認識の間違いがあればお知らせください。

N o. 2! 「能力についての実験 下」 (前書き)

更新は不定期になる…かも？

出来れば、一日一話…いや、二日一話目指したいなあ…。

No. 2! 「能力についての実験 下」

下

キングダムハーツの主人公は、14歳でキープレードを振るっていた。

まあ、単純に何が言いたいかというと。

「…うぐぐぐ、重い…」

5歳と14歳では筋力が圧倒的に違う。

…これは鍛えないと始まらないなあ…。二本を軽く振るってたとか尊敬するわ。

キープレードっていうと、初期武器なんかを見る限り、軽い、っていうイメージがあるんだよな。

ほら、王様（夢のねずみ）とかだって振り回してたし。

どうやら、キープレードは一本のみのようだ。

…原作じゃ覚醒イベントが起きてから初めて二本になったんだよね…。

俺も覚醒しなければ使えないのだろうか。

それは兎も角。

使用者に合わせて重量が変化するとか都合の良い事は起きない訳で。仕方なくキープレードを元に戻すと、他の武器にする事にした。

「エアリアルブレードか…？あれは持つっていうより、腕から出てるって感じだしな。

あれか、エネルギーで生成されてるから重く無かったりするかも…。」

他にも、カード（No. 10）やらナイフ（No. 12）でも良いかもしれない。

見た目的にはどちらも軽量武器だからな…カードが武器かどうかは兎も角ではあるが。

一つ気になるのは、殺傷能力だ。

全年齢対象のゲームなので、無論死亡シーン等、グロが無いだけに、本来の殺傷能力が分からない。

確か、キングダムハーツには『死』という概念は無いんだっけか。

「まあ…別に人を殺したいなんて思わないからそっちのほうが楽なんだけどなあ」

閉話休題。

能力を使う方法は、機関メンバーの称号を唱える事で出来ると、神に一応言われている。

【狭間の指導者】

これはNo. 1の称号だ。能力使用に至っては、別々の称号があるので、使い分けなければならない。

ブオン、というライトセーバーが立てる音と同じ音と共に両腕に赤い鮮やかな光を放つブレードが現れる。

手の甲に現れるノーバディーマークを中心に、モノクロ色の茨が浮かび上がっている。

「うお…生ライトセーバーが見られる日が来るとは…か、感動だ」

スターウオーズを見れば、誰でも一度は夢を見たはず。

試しに腕を上下に振ると、ブオンブオンと、音が経つ。

段々楽しくなり、テンションが上がっていた時。

ジュッ

「うお…。」

落ちてきた葉がエアリアルブレードに当たった途端、溶けるように消えてしまった。

——…ええええええ！？

どうやら、エアリアルブレードに殺傷能力（人を殺せる威力）あるようだ…というか、下手したらとか下手しなくても扱い次第では自爆しそうだよな…？ なにこれ怖い。

正直、これが自分に当たったらと思うとテンションが一気に下がった。

——取り扱い注意すぎる。

「と、とりあいず、解除。」

スツと音も経てずに消えるエアリアルブレード。俺はそこでホッと、一息吐いた。

この様子だと、他の武器にも殺傷能力はあるのだろう。…護身には

十分だけど、できれば使う時が来ない事を祈るばかりだ。

と、その時。

ガササツ！

と、何かが茂みの向こうで動く音がした。

…やヴェ、見られたか！？…でも、こちらに近づいてるような気が…。

俺は咄嗟に近くの茂みに身を隠した。

ズシン、ズシン、と『何か』の足音が聞こえる。――この音は…人間じゃない…？

「ブヒイイッ！」

まもなくして、『ソイツ』は茂みから出てきた。

人間に近い大きな胴体に豚の頭。そして、筋肉隆々の太い腕。

そして木を荒削りして作られたと思われる、これまた太い棍棒。

――おい、今変な想像したやつ、自重しろ。

ともかく…

「…オーク…？」

そう、オークだ。知能は低く、行動パターンも単純な亜人と言われる種類であるが、その図体から見ても分かるように、獲物である棍棒で繰り出される攻撃は凄まじいという。

彼らの主食は肉で、動物の物は勿論、人間のものまで食らう。

人間の子供の肉が好きと言われ、正直、絶対見つかりたくない。

見つければ、最悪、生きたまま食われる可能性がある。

子供の足では逃げ切れる筈もない…俺は村に引き返すべく、静かに歩を進める。

…しかし、現実とは非情な物で…。

ゴッ、

「ブヒッ!？」

「うげえ!？」

木の根に足を引っ掛けて盛大に音を経てしまった!

無論、それがオークに見つからない筈も無く、その目は正確に俺を捉えていた。

不味い…こうなれば逃げ切る事も出来ない。

何故か非常事態にも関わらず落ち着いている事に感謝しながらも、策を頭で考え始める。

能力で対峙しようにも、一撃でも相手の攻撃…あの棍棒が直撃してしまえば、ミンチに化してしまいそうだ。

避けきる自身もないのに、接近するのは避けたい…。ならば。

「（こうなりゃ、ガンアローでも使うか！？…だが…もし当たらなかつたら？」

実際、銃なんて一度も手にした事も無ければ、打った試しなんてあるわけが無い。

そんな素人が目の前の巨大とはいえ、オークに当てられる自信は、無い。

「ブヒヒヒッ！」

「う…ガンアロー以外じゃあれをやるしかねえか…一か八かだ！」

大好きな人間の子供にあり付けるかもしれないのだ、そんなチャンスをオークが見逃す筈があるわけが無く、
オークは雄たけびを上げると、歩き寄ってくる。

「出て来い！サムライ！」

そう。ノーバディー創造である。

これで、目の前のオークを倒せるか兎も角、時間稼ぎが出来る筈だ。

そして。

虚からシャキン、と鞘から刀を抜く音と共に、助っ人^{サムライ}が現れた。
サムライというのは、目の前のノーバディーの種類の一つで、No. 13の配下ノーバディーにして上位の強さを誇る一体だ。
その容姿は、侍が着るような袖の長い服を着て、全身が薄く藍色がかっている。一見、刀を二本指しているので二刀流だと思おうだろうが、実は背後で重力を無視したように浮かぶ『鞘』も同時に扱う、四刀流の使い手。

この侍が俺に従ってくれる事を願いつつ、

「目の前のアイツを倒してくれ！」

と命令、というかお願いを試してみた所。

「……（コクン）」

やったああ！ 頷いてくれたああ！

一か八かは成功した。…これでサムライが頑張ってくれたら助かる。
なんて、俺の考えが甘かった。——良い意味で、だが。

「プギッ!? プギイイイイ！」

「…」

突然のサムライの出現に驚いていたオークだが、目の前の存在が敵

だと分かるや否や、棍棒で仕留めようと振り下ろす。

ブウォン！

が、それはサムライにヒットする事なくすかぶった。

：あの音からして、当たったらひとたまりもないな…。

バックステップでフワリと飛ぶように避けたサムライは、柄に手をかけ。

シュシュシュ…

ゆつくりと、引き抜いた。

鞘から引き抜かれた、愛刀（？）は日の光を反射して、鈍く灰色に光る。

「ブヒイツ」

棍棒を構えなおしたオークは、相手が武器を構えているのを見るや否や。

ブウォン！

再び振り下ろす。

サムライはそれを避けようともせず、抜刀した状態で立たずんでいる。

「あ、危ない！ 避け――」

サムライは腕を素早く動かしていた―目に見えないほどのスピードで。

「プギイツ!？」

音も無く振るわれた刀、それは振り下ろされようとしていた棍棒を叩ききっていた。

ゴドン、と鈍い音を立てて真つ二つになった棍棒。

巨大な木を荒削りして作ったような太いものが、一振りで切られていたのだ。

「…、以外と鋭利…。」

逃げる、という行動が頭から離れるほど、鮮やかな太刀使い。

俺はそれに見とれていた。…否、見とれる事しか出来なかった。

「プギィィ!」

獲物が使い物にならなくなった事に怒っているのか、乱暴ではあるが、先ほどよりさらに鼻息を荒くしてサムライに掴み掛かる。

サムライの鞘がその腕を殴打して、オークが一瞬、一鳴きして怯む。

——その一瞬。

「ブヒッ——」

この大陸では見られないはずの、桜の花びらが散るような幻影が見え…次の瞬間、サムライの姿が忽然と消え、オークの背後に現れる。パチン、と鞘に刀を収める音と共に、オークの上半身と下半身が別々に崩れ落ちた。

「うえ？…お…おう…えええ」

それまで、見とれていた俺だったが、何かが液体が顔に掛かるのを感じた。

勿論、オークの大量の血と肉を見た俺は吐き気を催していた。

頭が豚の怪物だとしても、例えば俺が直接手を出した訳じゃなくても…。

結局、耐え切れずに、嘔吐^{リバーズ}してしまった。

数分が経ち、俺は漸く落ち着つき始めていたが、まだあの光景が脳裏から離れない。

これ以上考え事も止めて、早く家で休みたい気分なんだけど…。

「……」

隣で、命令を待つ従者の様に佇む者…先ほど創造した、サムライ。彼（？）…他のノーバディに共通して恐らく、喋れない。無論、そのどちらかといえば人間の物ではない頭にも口と思われる部分が無いし。

ん？待てよ…でもダスクって喋ってたような？

まあいいか。と、俺はサムライを改めて見つめる。

何故か、あれほどのオークの血飛沫だったのに、体所か、刀にすら

なにも掛かっていない。

俺はその事に繭を潜めたが、まあ今は別に良い…血は見たくなかったし。

これ（サムライ）を如何するか、それが問題なのだ。
創造するだけ創造したものの、還し方は無い。

と、なれば、必然的に隠さなきゃならないな。
隠しておける場所なんて、この森ぐらいしかない。
いっその事、

『森で拾ってきたー！』

「…ないわ。」

怪しすぎる。

万が一…ありえる訳が無いが、親が受け入れてくれたとしても、村は違うだろう。

——とりあえず、サムライには『森で人に見つからないように行動』
してくれと、頼んでおいた。
…これで多分大丈夫だ。

この森は資源に向いた木が少なく、立ち入りも他の方角にある森より圧倒的に少ない。

しばらくは、秘密基地のように使えるだろう。
と、なると、ここで鍛錬するか？ 家族に見つかからないようにするべきなのだろうし。

強くなるにしても：単純に能力無発動でもある程度戦えるようにしなければならぬ。

——それ以前に武器を振るう力がないと技術も磨けやしない。

「うん、筋トレになる事はじめなきゃな」

この後、帰宅したら、体中泥だらけなのと、時間も遅かったためこっぴどく母に叱られた。

平民である俺の日常は続く。

No. 2! 「能力についての実験 下」 (後書き)

うーん、機関やノーバディにはまだ謎な部分が多すぎる…。
そして、サムライ無双。

やっぱり、自己解釈や想像が入ります。

一応、オリ主にいずれかキープレード二本を持たせたいな、と思っています。

No. a! 「ノーバディ、十三機関について。」 (前書き)

どうも、軽い雪です。

今回は、「ノーバディ」を知らない人向けにがんばって書いてみました。

にしても、どう物語を進めるか計画を立てないといけないなあ。

No. a! 「ノーバディ、十三機関について。」

【ノーバディーとは？】

闇に心を奪われてハートレスになった人間が強い心や思いを持っていると、稀に生まれ落ちることがある生物。

（闇⇨ハートレス⇨また別の敵キャラ）だと考えていただければ良いです。

通常、キングダムハーツの世界では、ハートレスに心を奪われると肉体と魂（心とは別）も消滅します。

然し、冒頭でも書いたように、強い心、思い等を持っていた人物がハートレスに心を奪われると、

稀に肉体と魂（記憶？）が異なる世界で残る事がある。

それが、ノーバディ。

体の形は人に近い形になっている者が多く、（サムライもそれに当てはまる。）色は白や銀の部分が多い。

ハートレスの殆どが、丸みを帯びた形に対して、ノーバディは角ばったり、鋭利な形をしている。

光でも闇でもない（二つは裏と表のようにハッキリしているため強い）狭間（無）に近い存在で、

ある程度短い間行動できるだけで程なく闇に溶けてしまう（実際に溶けるのではなく、「闇に消えてなくなる」という意味）。

然し、戦闘能力が低いのかと言えば、そうではなく、一個体ではハ

ートレスよりも上で強い。

動きは様々で、一見、心を持っているかのような感情的な動きをするが、心は無い。

実際にゲーム中でも「存在しない者」「誰でもない者」「抜け殻」と言われている。

（関節や重力を無視したような動きをするため、プレイヤーの一部からは不気味がられている。）

ハートレスが心を求めて本能で動いているのに対し、ノーバディーは知性を持って行動する。

また、体の何処かに、ハートレスに付いている、ハートの「エンブレム（マーク）」のように

逆さまにしたハートと十字架を組み合わせたような形のシンボルマークが付いている。

これは「心が無い」という事を表すそうだ。

存在しない者という呼称からか「死」という概念はなく、その最期には「消滅」という語句が用いられる。

【十三機関 『正式名称…XIII機関』】

人がハートレスになる時、特に強い心を持った者は、人であった頃の面影を残したままノーバディとなることがある。

XIII機関はそのような13人のメンバーで構成されている組織で、下級ノーバディを支配・統率しながら、目的を達成するために数々の世界で暗躍しているようだ。

特徴としては皆同じ黒いコートを着ていて、それぞれが専用の武器・司る属性・専属の配下ノーバディを持ち、人間だった時の名前に異端の証である「X」を足してアナグラムにしたものを新たな名前としている。

感情があるような振る舞いを見せるが、実際は心を持たないため、人間だった頃の記憶に基づき感情があるフリをしている。

ナンバーは入った順に決められ、リーダーである『ゼムナス(Xemnas)』は無論No. 1。
なので、番号が若い(小さい)ほど、昔からいるメンバーということになる。

正規メンバーではない。ナンバーと実力は必ずしも一致している訳ではなく、ナンバーが若いからといって機関内での立場が高いとは限らないという。

(それを表しているかのように、十三機関で一番最初に倒されたのはNo. 4の『ウィグセン(Vexen)』だった。)

ノーバディは年を取らないため、機関員の年齢はノーバディになった時点での外見年齢のままになる。
公式で解っているのはNo. 13の『ロクサス(Roxas)』のみ。

因みに、機関にはもう一人、正式ではないメンバーが居る。

機関No. 14。

基本的にN o. 13と同じく光属性を司り、キープレードを使う少女。
能力としては殆ど被るので、小説内では出ないかもしれません。
因みに、N o. 13がキープレード二刀流へと覚醒したのは、彼女が関係しています。

正体は「レプリカ計画」に基づいてN o. 4が作成したレプリカ人形の一つで、N o. 14は中でも一番の成功作「N o. i」である。

そのため実際はノーバディですらなく、それが理由で機関のメンバーとしては正式にはカウントされていない。

【今小説での能力設定】

「機関メンバー全員の能力使用可能」

N o. 1とN o. 13までの機関メンバーの能力を使う事が出来る。
重複は現時点で不可能で、予定ではあるが、同時に二人分まで重複できるようにしたいと思っています。

何故シオンを今含まないというのかというと、正式な「機関メンバー」ではないので。

それと、機関N o. 5の武器、「アックスソード」についてですが、これ、名前からもわかるように重量武器なんですよね。「キープレード」一本まともに振れないのにまともに使えるようになるのは何時になるんだよ、ってな感じになりました、「能力」としてその馬鹿力を発揮できるようにしようと思います。

：良く考えたら鎌とか槍とかも難しいよね…。まあこれらはなんとかして持てるようにします(汗)

（機関の登場作品は、「KH COM」^{キングダムハーツ}「KH2」^{ファイナルミックス}「KH358/2」
：一応No.1だけなら「KH1FM」にも
隠しボスとして出てましたね。

「358/2」では機関メンバーであるNo.13が主人公で、他の機関メンバーも操作できます。

なんというか、「358/2」は手元に無い上、プレイしたのも大分前だったのであやふやです：w)

機関は全員が共通して「FFを元にした魔法」が四種類使えます。
ファイナルファンタジー

・ファイア ・ブリザド ・サンダー ・ケアルガ

エスナ等、それらの魔法は無いようなので、実質存在するのは上四つだけ。

（といっても、KHのまほう（KHでは魔法とは呼ばない。）は、FFの物とはエッフェクト等が違う物です。）

その他にも「マグネ」や「ストップ」などという魔法がありますが、機関メンバーは使用していません。（恐らく。）

なので、オリ主も機関の使えないこの魔法は使えないことにします。

「ノーバディーを創造する能力」

本来、ノーバディーは「心の強い者がハートレスに心を奪われる」という条件が必要ですが、

この小説では、それを取っ払ってます。

ただ、この能力は、その機関メンバーに「配下」と言われる専用のノーバディーが居る場合、そのノーバディーしか創造できません。

逆に機関メンバーの能力を使っていない場合は、どんなノーバディーでも呼び出せると言う事です。

小説内では既に、ノーバディーの種類の一体「サムライ」が出てくれています。

因みに、小説内で主人公が内心考えていた「ダスク」というのは、ノーバディーの中でも二番目に弱い下級のノーバディーです。

他に、さまざまな種類のノーバディーが存在しますが、それは本編で。

因みに主は「サムライ」が好きなので登場回数が一番多くなるかも
(あ

「?????」

不老に変わり登場する能力です。

後付になる予定ですが、いまでもその能力は決まっています(汗)

【本小説における、オリ主の立ち位置】

最初は「ノーバディー」の能力を得たオリ主がルイズに召還される」という物でした。

しかし、そうになると、本来呼ばれるはずである「サイト」君が登場できないんじゃないか、という問題に当たりました。

まあ、今おもえば、「二人同時召還」という手も在ったのですが、

ガンダールヴとかどうしよう。って感じになるような。

近々、「ルイズ召還」verも一話だけ特別話として投稿してみようかと思っています。

――さてさて、この小説での立ち居地は作者の予定では

「近い場所で見守り、原作で起きる悲劇等を回避する手伝いをする」

という、案外地味な立ち居地となっています。

実際、もっと派手な立ち居地になりたいというのがありますけど、原作よりハッピーな展開をサイト、ルイズ達と繰り広げたい、という思いもあり、「召還」verではないこの立ち居地になりました。

「貴族から始めれば（に転生すれば）、教師になるなり出来て楽なんじゃない？」

無論、その設定で行くのも考えましたが、
誕生↓魔法教育↓学園生活↓成人↓先生　：大分大雑把にしましたが、先生になるまでに踏むステップが多く（自分からして）

「これ、続ける自信ないなあ…。」と、思わず苦笑い。これを書いた他の作者様を尊敬しました。

自分としては、原作に早く突入してえ！って、我慢できるわけがないので、平民にしましたw

「おいおい、待てよ、平民で行くならいいとして、どうやってルイズ達を見守れる場所に落ち着くんだよ？」

実はこれ、相当迷いました。実際、トリスティン魔法学院に居る平民の人たちってメイドだとか、コックとかしか居ませんよね？

（実は作者、アニメにしか見ておらず、おまけに小説は『外伝 タバサの冒険1』しか持ってないという。）

（2011. 11. 25 警備員もちゃんと居るみたいでしたw
出ませんけど（・ω・））

今の候補としては、警備員、って所でしょうか。

…無計画すぎて俺が泣く。 ご都合主義でも起こさなければなら
ないか…。

まあ兎も角、長々とここまで読んで頂いた方、有難う御座います。

No. a! 「ノーバディ、十三機関について。」 (後書き)

誤字、認識の誤りがありましたらご報告ください。

No. 0 ! 「もう一つの始まり方」 (前書き)

はい、今回はルイズに召喚される、「召喚」 ver です。

何故かこっちのほう書きやすいという事態。…うばあ…。
ひよっとすれば続くかもしれない。

因みに、サイト君が出ないバージョンでもあります。

No. 0 ! 「もう一つの始まり方」

ドサッ。

「ち、ちくしょう…覚えてろよ…」

長い間、あの神から落とされた穴の中を漂っていた俺だが、不意になにか「引っ張られる」…いや、「吸い寄せられる」のを感じ、目を開くと目の前に迫る「鏡」と思われる物。

そして、視界は真っ白になったと思ったら、草むらにぶっ倒れていた。

「おい、ルイズの奴、人間を召喚しやがったぞ！」

「フードを深くかぶってて解らないな…」

騒がしい。

どうやら俺は声からして、少年少女に囲まれているようだ。

…一応神は気を利かせて、服を着せてくれていたらしい、少し感謝しよう。

俺は今だ平行感覚が取れないまま、ノロノロと起き上がった。
視界がブレる。——此処は一体何処なんだよ、確か…

「先生、もう一度、やり直しを！」

「駄目だ、ミス・ヴァリエール。サモン・サーヴァントは神聖な儀式。やり直しは受付られない。」

「そんな！」

なにやら、視界の先で中年の男性と少女の声が聞こえる。

「サモン・サーヴァント」？…サモンってゆーと、あの召喚^{サモン}だよな？

という事は俺はあの少女に召喚されたと言うのか?!…んな馬鹿な…。

「アンタ、何者よ？」

少女の声で思考から現実に戻される。

視点も漸く定まるようになってきた。——目の前のピンク色の髪少女が話しかけてきたらしい。

「俺は…」

村雨、と言おうとして、もう一度口を閉じる。

——転生(?)のだから別の称でもいいのかもしれない。

「ヴェン、だ。何者だ、と言われても反応に困る。」

「?…おかしな平民ね。というかアンタ、?ご主人様?の前なんだからフード脱ぎなさいよ。」

「!…ああ、悪い。」

そう言えばといい、深く被っていたフードを外す。

フードで隠れていた顔が露見し——、周囲から息を飲む音、鼻を鳴らす音が聞こえた。

それにしても目の前の少女、?ご主人様?の所を強調してたな…と
いうことはやっぱり…。

「へ、へえ…以外といい顔立ちしてるじゃない。」

「そいつはどうも。…所で説明して欲しいんだが…。」

俺が置かれている状況が知りたくて、質問しようとした。

ある程度は予測が付いているが、俺の予測でしかない。まずは情報
収集しかないな。

「いいわよ、特別に——」「おい、ゼロのルイズ!早くコントラクト・
サーヴァントしろよ!」…」

「「「そーだ、そーだ!平民とキスしちまえ!」」」

「う、五月蠅いわねっ！分かってるわよ！」

野次馬共に邪魔されてしまったが、俺の意識は別の所に移ってしまっていた。

——今なんていった？「キス」だって？

冗談じゃない、行き成り瑞知らずの少女とキスだなんて、良くない。然し、なんでここで「キス」が出てくるんだ？

俺が顔を引き攣らせながらそんな事を考えていると、先程の中年の男が話しかけてきた。

「失礼、お名前を伺ってもよろしいでしょうか？」

「あ、はい。：ヴェンと言います。貴方は？」

見事に禿げ上がった頭がいささか寂しい中年の男の人は、以外と親切な言葉使いだった。

洋服が、何処かの「魔法使い」が着るようなローブに、なにやら長い杖を持っている。

「私はトリステイン魔法学院で教師を務めます、ジャン・コルベールと申します。」

…ミスタ・ヴェン、失礼ですが何処の出身でしょうか？」

「自分は…いえ、分かりません。…記憶喪失、みたいなんです。」

俺は咄嗟に嘘をでっち上げた。

別に、日本出身です、とでも大真面目に答えて良かったのだが、これなら

後から思い出した事にすれば、いくらでも変えられるからな。

「そ、そうですか…それはまた大変ですね…。」

「失礼、変な事を聞くようですが、此処はどこでしょうか？」

まずは、此処が何処なのか。

恐らく日本ではない、というか確実に、だ。

周りの少年少女を見渡したが、黒髪が一人も居ないと、殆どが金髪だったり、とカラフルなのだ。

「アンタ、そんな事も知らないのね。…ここはトリステイン王国よ。」

「うん？…やっぱり記憶喪失みたいです…。」

そんな国、一度も聞いた事が無い。

別に世界地図を記憶している訳じゃないから、確証があるとは言え

ないが。

コルベール先生は困ったように何かを考えている。

目の前の少女は呆れたような目で「これが私の使い魔…、」とつぶやいている。

そういえば。

「君の名前を聞いてなかったな。」

「馴れ馴れしく？君？なんて呼ばないでよ。？ご主人様？よご、し、ゆ、じ、ん、さ、ま。…特別に教えて上げるわ。心にして聞きなさい。」

「ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。それがアンタのご主人様の名前よ。」

どうやら俺はこの人に仕える事になったらしい。…不安だ。

No. 0 「もう一つの始まり方」 (後書き)

妙にルイズが親切のような気がした (苦笑)

んー…本編が書きづらいのは設定が安定してないからかな…。
近々本気で固定させないと…。

誤字、脱字、認識の間違ひがあればご指摘ください。

No. 3! 「鍛錬な一日」 (前書き)

話が余りすすまねえ!

今の所、ゼロ魔らしい要素も圧倒的に少ないしな!

：それにしても相変わらず能力使用技術に進展が見られない。

このままではノーバディに頼りっぱなしの駄目な奴になってしま
いそ。

ガンダールヴなら武器もちや使い方はある程度わかるんだけどなあ

(^ ω ^) …。

No. 3! 「鍛錬な一日」

「ハアアッ！」

俺は振りかぶる。目の前で楽しげに微笑んでいる敵（父）の余裕を、少しでも無くしてやる、とばかりに。

「うん、まだまだ甘いね。」

然し、この男、実に余裕である。

…予めNo. 2「ジグバール」の能力でも使っとけば…。

俺は自分の腕だけが木刀を持って父を襲っているシーンを想像して——やめた。シュール過ぎる（笑）

だいたいそんな事したら、明らかに異常な物を見るような目で見られるに決まっている。

今は基礎を上げなければ成らないのだ。能力の技術は…サムライやノーバディー達と戦って上げるしかないか。

いや、それにしても…。

カン！カン！シュツ！

当たらなさ過ぎる。

…最初は「父さん…戦えるの…？」と心配ばかりなのだったのだが。

「ほら、もう疲れたのか？ だらしないなあ、ヴェン。」

『なんだよ、そっちが負けてる癖に!』と言い返したくなるような挑発だ。

——息子の挑発する親ってどうなの。

然し、男としてのプライド（笑）を守るため、せめて一発は!

「うおおおおお!」

俺は勇ましく、父に立ち向かっていった。

おれ、父さんを倒したら、サムライの所へ行くんだ。↑死亡フラグ

「いでで…」

結局あの後、俺は一本も：一発も当てられなかった。
身体、プライド共にズタズタだ、ちくしょー。

まあ良く考えてみれば、俺は前世で剣や刀を振るったこともなければ、木刀も振ったことも、剣道もやった事もない
ただの素人なのだが。

然し：素人といえば、原作の主人公も素人だし：ロクサスもどちらかといえば最初は素人だったはずだ。

——あれ、我流だよな。誰に鍛えて貰ったんだ…?

まあゲームの話なのだから仕方ないか、と適当に結論付ける。

「あら、お疲れ様、ヴェン。父さんは倒せた？」

「無理だった。…なんであんなに強いのか？父さん。」

一人黄昏ていると、先程まで刺繍をしていた母が話しかけてきた。そーなんですよ、たおせねーんですよ。それどころか、掠る事もないんですから。

——本当にN O . 2 の能力使おうかなー、腕だけ木刀やってみてーなー。

と不貞腐れていた俺に、母が慰めるように（笑）救済の言葉（？）を俺に言った。

「お父さん、実は？元？傭兵なのよ。…それもかなりの実力のね。」

えっ

…でしょーねー。

やけに戦闘なれってゆーか、動きが只のおっさんと違うと思ったわ。

「因みに無敗だった彼の記録に傷を付けたのは母さんだけどねー☆」

テヘツつとウィンクする母さん。

(^ ω ^)

知るか。

「そおおいつ！」

先ほどの鬱憤を晴らすかのように切りかかる俺。
何に切りかかってるか？

キンッ！

「……」

無論、そんな事を出来るのは父さんと…命の恩人^{サムライ}だけだ。

無言で、受け止める彼（性別不明、というかあんのか？）に心の中で感謝する。

本当に心が無いんだろうか？というほど、人間らしい所がほんのたまにだが、見かける事がある。

さて、今俺は木刀でサムライに襲い掛かっているわけではない。
いや、襲い掛かっているのは襲い掛かっているのだが、武器が先ほどの金属音でもわかるように違う。

実際、俺が木刀で切りかかっても、掠った…というよりも空気を切るような。

兎に角、すり抜けるだけで振っても当たらないのだ。

次にサムライに木刀を持たせようとしたが――失敗。

持つことは出来るのに、振ろうとした瞬間に、するっ、とすべるように落ちたのだ。

ふーむ、「ノーバディ」に生半可な攻撃は通用しない、っていうのはわかってたが…基準はどうなんだろう。

何が透けて、何が当たるか。

何が持てず、何が持てるか。

――やはり謎だらけである。

…で、なんでそんな攻撃の入らないはずのサムライに攻撃が入ってるのかというと、持っている武器がサムライに通用するもの…ノーバディに通用するものだからだ。

『クリーパー』

ノーバディの一種である彼らは、体を変形させる事が出来るのが売りの、下級ノーバディである。

人型でないところを見ると「元の人間の心が普通より少し強かった」というぐらいだろう。

ゲーム内では雑魚キャラでもあったのだが、主人公が強すぎるのだ

から仕方がない。

俺は、この子はやれば出来る子だと思っている。

時に、潰れたスライムのように液体状になって進み。

時に、翼を生やして空を飛び。

時に、剣となって突如真上から奇襲してきたり。

：まあ、基本的には数で押す、ノーバディらしくない奴なのだが。

そう。サムライに切りかかった武器、こいつは「クリーパー」なのだ。

『同じノーバディーを通した攻撃ならどうなんだ？』
との、俺の安易な考えの元、実行されたわけである。

「来いッ！クリーパー！」

別にポケ○ンではない。

：ごほっ。

さっそく、である。

さて、「ノーバディー界で本来の目的以外で使用された」初めての被害者（サムライは含まない）

になるとは露知らず、ソイツはモノクロの茨を潜り抜けてどこことなく現れた。

その姿、兎に角平べったい。

ノーバディ類最小を誇り、小さすぎる腕（多分）に反して、足が体よりも大きい。

ペタ、ペタと歩く姿はキュートに見えそうで見えない。

——見た目がシャープだし…、夜は恐らく幽霊に間違えられそうだし…。

で、「剣に変形してくれ!」というお願いをして、現在、武器とさせてもらっているのである。

考えた通り、サムライにこの攻撃は通用したのである。

強度も申し分無く、…まあ少し重く感じるのだが、軽すぎても奇襲してもあまりダメージを与えられないか。

然しこの世界での…というか現実^{リアル}ノーバディは予想以上に強い。

…、単純に原作主人公が強すぎるだけか。

「……………」

その後、しばらくサムライと打ち合っていた俺だが、やはり一発も刀以外に触れず。

一瞬、武術の才能が零なのか、とブルーな気持ちから抜け出せなかったが、

『違う、二人が強すぎるだけなんだ。』という言い訳（割りと本当なのだが）するしかなかった。

気を取り直して。

正座をしてなにやら瞑想のような…ただそうしているだけであろうが…事をしているサムライと
剣から戻したクリーパーが虫を丸呑みにするのを横目に…ってちょっとまで。

「ノーバディーで食うのか!？」

クリーパーへ向けて叫んだが、首を傾げる（首はない）ような仕草をしただけで、またもや虫を探し始めた。

…あれ……そういうえば機関って何も食べてなかったんだろうか？

…だめだ、考えれば考える程想像つかねえ。

まあ、シーソル○アイスは食ってただけだな…でもまあ、不老なだけあって餓死はするんじゃないか…？

【運命を賭す者!】

さて、今回のお題は機関No. 10のルクソードさんの能力。

原作では、曲者ばかりの機関メンバー達の中で一番まともなのではないか?といわれるお方。

短く揃えた髪、蓄えられた髭など、いかにもギャンブラー好きって感じがする紳士である。

——というか、事実、生粋のギャンブラーなのだ。彼は。

武器からもそれが見て取れる。

彼の武器は「カード」。…実際これを見て何人かが、「えー、それって弱くね？」と考えただろう。

事実——彼は戦闘をゲームと考えるタイプらしく…。

あまり、強くない（ぶっちゃけた）。

然し、少し不自然な所があるのだ。

本人の属性は「時」。彼の攻撃は、巨大化したカードを持つての連続攻撃、主人公をサイコロにしたり、カードにしたりする。

実際、「時」らしい攻撃が一つも無いのだ。

唯一、「時」らしい面が戦闘で出ているのは、戦闘ルール。

彼との戦いは、「時」賭けたバトルなのだ。

（戦闘時には画面上に主人公とルクソードの「時間ゲージ」が格闘ゲームのように表示される。

ゲージはダメージの蓄積や時間の経過により減少し、先にルクソードのゲージをゼロにすれば勝ちとなる。

バトル中は主人公をサイコロやカードに変化させたり、自身がカードに化けるなど、戦闘をゲーム感覚で楽しんでいるのが分かる。）

んで、今回はその隠れた…否、フェアプレー精神で本人が出さなかったと思いたい、その「時」の技

を解き明かすのだ。

「特に可笑しい所が見えない。ただのカードのようだ。」

い
ず
れ
か。

No. 3! 「鍛錬な一日」 (後書き)

因みに、この小説にアンチ要素は無い、と思いますし、それで行きたいです。

殺しとかも出来るだけ避けたいんだけど、戦争や戦闘が多いゼロ魔の世界ですし。

――…第二話で初っ端オークが死んでしまってますけど (苦笑)

まあ、のんびり行こうと思ってます。

No. 4! 「魔法使い」メイジ (前書き)

はい、若干投稿が遅れました。ごみなさい。

今回はヴェン君のテンションが高いです。

：まあ安定しないのは何時もだと思ってください (苦笑)

今回は魔法について。

No. 4! 「魔法使い」メイジ

魔法。

それはファンタジーにおいて、最も重要な物の一つだ。

自由に空を舞い、火を起こし、水を生み出す…。

魔法を論理的に説明しろと言われれば自分には直ぐには思いつきそうにない。

だから不思議ファンタジーなんだろうけども。

「えくすぺくとばとろなゝむ! …ごほん、ライト。」

「今の何のスペルなの?」

不思議そうに見てくる母。

…説明しないよ。某ポッター君について話ても分からないだろうから。

さて、御ふざけばかりで進歩が無いように見えただろ？

…はい、まったくそのとおりでござえやす。

杖契約に成功した後、なにやら熱い目頭を押さえながらサムライに報告したのはいい思い出。

クリーパー？ あいつはカエルを飲み込んでるところだったよ。

——慣れたよ。それが人間の…俺の売りだからさ。

「何遠い目してるのよ。ほら、もう一回。」

「ライト！ライト！……光よ！」

コモンスペル唱えても何もおきねえんだもん。

仕方ないから三回目はヤケクソで「まほう」みたいな唱え方で。

パッ！

「えー…」

「やったわ！ 凄じやない！ こんなに早く取得出来たのってあの『烈風』以来じゃないかしら？」

なにやら俺よりハイテンションな母上。

俺としては、今までの「ライト」と喉を枯らすほど叫んだ努力やら、呆気無さやらで。

——というか、「光よ！」には突っ込まないンかい。

そんな「不思議」な魔法ではあるが、この世界ではなにやら。俺的考えで分けたら、四種類あるらしい。

一つ目、「コンスベル」

さっきのライトもコンスベルの一つで、杖先に光を灯す魔法だ。その他、ドアの開け閉め、ランプを灯したり消したり、等、生活向きの物もあれば、杖に魔法を纏わせて近接武器として扱うスペル等もある。初級魔法としてメイジは誰もがこれを最初に習うらしい。

二つ目、「系統魔法」

いよいよファンタジー。メイジ達の主力兵器。

「系統」の名の通り、火、水、土、風、という各系統がある。

それぞれ文字通り、火を起したり、水を操ったり。

違う系統同士を合わせる事によってさらに強化することもできるという優れもの。

三つ目、「失われた系統」

この世界に主人公が居るならなってそうな系統。ヒロインもありや。神祖ブリミルがそーだったといわれる、まあ、正式名称は「虚無」の系統だ。

最後に確認されたのが、三桁ぐらい離れた年らしく。…それで「失われた」と言われてるらしい。

一応、第五の系統とも言われる。

四つ目、「先住魔法」

これについては記述が少なかった。

まあ、それについては、分かっている事、という記述を見れば容易に想像できたが。

人間には仕えなかったり、詠唱が要らなかったり、魔法を反射したり。

兎に角、アンチメイジなのだ。そしてそれを使うのは亜人などしかない。

…まあ、俺も無詠唱の「まほう」ならあるけどな。…これも人前で使うのは得策じゃないかー。

正直、「まほう」が使える俺としては便利だなーっていう感じしかないのだが、

折角魔法世界に生まれたんだから、系統魔法ぐらいは扱いたい。

「凍てつく学求（Chilly Academic）」

所変わりいつもの森。

そろそろ名前でも考えてみようかとは思うが、残念だが俺にネーミングセンスなどありはしない。

さて、後半戦はおなじみ能力タイム。

一つ一つ、碌に開拓もせずに放置するものだから、マスターすべきものが増えすぎだ。

まあ、不老だから時間は生憎とたっぷりある。

No. IV ヴイクセン。

属性氷の機関内初の科学者である。

試す順番は決めているわけではなく、その日の考えで決めている。

今回は、「機関内でも魔法による攻撃を主力としたメンバーは？」という考えに基づいた。

該当メンバーは二人。

No. ?、No. ?、だ。

今回は？にしたが、？も近々試したいと思っている。

「…んむ、造りは頑丈だけど軽いな。まあ研究者でもあるし非力なものも考えて、だろうな。」

さっきから木に投げつけたり、足で踏みつけているが、掠り傷すら付かない。

サイズも一応それなりに大きいし…そうだ。

「スイツフィiiiiiiii、あああああああ！！！？」

【放送事故が発生致しました。しばらくお待ちください。】

山の斜面を草スキー。

爽快に風を切り、勢いも増してきたその時。

…後はもうお分かりであろう。

草場が少ない上に無理してスピードなんてあげるもんだから、コーナリングを見事に突っ切ってしまったのである。

無茶しやがって。

幸いだったのは、コーナリングで脱落したところがわりと山の下部だった事と、その頑丈なシールドを手放さずに座っていた事だ。

だが。

無論無事では済まされるはずもなく。

「う…ぼう…え」

衝撃はすべて自分の下半身へ。

つまりは下品ではあるがケツが痛い。すげー痛い。

「氷よ！」

キンッ！

「うおー固まった。…ツメテッ！」

さて、しばらく痛さに悶絶していた俺だが、何とか復活。

早速「まほう」で属性でもある氷のブリザドで凍らせていた。

瞬間冷凍。

まさしくそう言えるほど、一瞬で丸太が餌食となった。

触れてみると、コンコン、と硬く、とても冷たい。…一応火力は抑えたつもりだけど、

FULLで放ったらドライアイスみたいになるんじゃないか？

「終われ」

さっ、と能力解除。

おー、まだ氷、残ってるね。

これはこれで便利である。主に食品保存に。

そんな事を考えつつ。

最近は何かと探求する事が多い。
俺の不思議ライフはまだ始まったばかりだ。

No. 4! 「魔法使い」メイジ」(後書き)

少々やってしまった感があるZE。

この後は生活環境について一話。
チート
追加要素話二話。

正直追加要素は決まっていますが、またキングダムハーツシリーズからになりそう。分からない読者にはご免なさい。

正直、今だに主人公が殺しを行うシーンが書けないです。↑ヘタレ抵抗が抜けきらないですね。がんばりたいです。

原作突入については上記三話が終った後次話になりそうです。

うーん：早すぎるかな、遅すぎるかな？

展開のもっていきかたが下手糞なのでw

誤字、認識の誤りなどがあればご報告ください。

では、これからよろしくお願いします。

No. 5! 「平民なる日常」 (前書き)

今回は一般生活の少し詳しく書いたver。

オリジナルのセンチエル家ですが、平民達との仲は割りと良好と
いうことに。

そして今回は……

No. 5! 「平民なる日常」

日常。

それは日々変わらない物で、幸せか不幸であったとしても同じだ。
幸福なものにとっては天国。
不幸なものにとっては地獄。

それは人によって違う。

だが、果てして狭間は…その二つの基準は？

「ふああああ…。」

起床。

平民の朝は早い。…貴族がどうなのかは不明だが。

まあ、なんか怠慢とした感じがするからそんな気がするが。↑偏見

季節は夏。明け方というのにセミが既に大合唱していた。

俺は寢床であるベットから立ち上がり、部屋を出る。

「お。おはよう、ヴェン。」

「あら、おはよう。」

「おはよー。」

寝起きなのでぼーっとした頭で両親に朝の挨拶を済ませると、外へ出てまっさきに顔洗いへ向かう。

ぱしゃっ

「つめてー。」

家の外にある井戸で顔を洗う。

水をくみ上げるのも意外と力が必要。これやってるだけでも力付くな。

バサッバサッ。

ア”ッー

「……。」

突然の羽ばたきの音と悲鳴を聞いて嬉しくないことに俺の意識は覚醒。

俺は無言で立ち去る。

——クリーパーが鳥を食べてたなんて言ってもだれもわかりはしないだろう。

最近アイツ、とことんギャグになってきているな、と思う反面、生態系とか大丈夫か？見つかったらどーすんだ？とかいう危機感が募っていた。

…後で無闇に生態系壊さないように命令しないとな…。

羽ばたいてゆっくり森へと戻っていくクリーパー見送った後、家に戻って朝食。

食材は主に収穫した野菜を煮込んだ物等、この世界では以外と贅沢なのかもしれない。

残念ながらお米がないのだが。

母に聞いても父に聞いても、「お米？なにそれおいしいの？」的な返事しか。

主食お米な俺にとっては辛い事。

農業の知識と経験があれば、是非とも農作したいものだが、生憎と稲刈りの経験しかない。

まあつまり…

「お米諦めろよ（＾ω＾）」ということだろう。

…今更遅いので置いといて。死刑宣告（大げさである）にも等しいからショックだけでも。

とはいっても、母の手料理は美味しいので余り困ってなかったりする。

「偉大なる始祖ブリミルよ…」

この変な御祈りさえなければ言うことは後はないのだが、
この世界の神話はどうなっているのだろう。ブリミルという奴は前
世で言う、キリストなのだろうか。
調べてみる価値はありそうだ。

「はっ！」

カン、と木刀と木刀がぶつかる音が整備されていない農道響いてい
る。

否、整備されてるんだけど、科学が全くといって発達していない
この時代、大分荒れている。

朝食を食べ終わると、父と鍛錬。

此処は以外と邪魔になりそうではあるが、以外と苦情は来ない。
それどころか、「見物させてもらってるよ」などという声が。

「ヴェンのお兄ちゃんががんばれー！」

「坊主、あぶねえ！」

「動きが良くなってきたな、兄ちゃん。流石レイグの旦那の息子だ
！」

な、わけで、周りにはいつの間にか人だかりが出来ているわけである。

俺がぼこぼこにされるところがどう白熱するのか分からないが、近所のおっちゃん共はなにやら興奮気味である。

から竹割りで切りかかってみるも、真面目な動きでは当たるわけもない。

「ほったってやあっ！」

薙ぎ払い返し、突き。

某緑勇者の剣技の真似である。

スッ、スッ、コン！

「なん…だ…と」

「スピードはいいね。でもまだ真直ぐすぎるかなっ！」

相変わらず余裕の表情。

アンタ何者だよ…畑仕事した後なのにそれとかねーわ！

カンカカンカン。

「ふっほっいえ！」

「ほーれほれほれほれ！」

俺だって伊達に鍛錬を続けているわけでもない。
父さん、サムライに鍛え続けられれば……！

容赦ない突きを繰り返す父の攻撃をサイドステップで避け、
振り抜きで腕を狙ったのだが。

ひょいつ、すかつ

「え」

「貰った！」

カンっ！

「いでっ！」

見事に空を切り、逆に木刀を叩き落とされてしまった。

結局その後は父がモンスター討伐に出かけるまで続けられた。

：相変わらず一勝も出来なかったが。

化け息子に勝る化け親父。：こりゃ早く追い抜きたいな。

父の仕事は傭兵兼農夫である。

といっても、主にモンスターを討伐して安全を守る、という事をしているのだが。

途中で胡散臭い武勇伝であったが、父の最盛期時代の話を聞かせてもらった。

暴れ狂った火竜を討伐したことがある、とかきかされても、ねえ。

（笑）

まあ実力も、最盛期じゃないにしろ相当あるということは分かっているのです、

なんとなく信じられない事も無い気はするが。

「あ、ヴェンにーちゃん！」

「お、ハティか。なにしてたんだ？」

目の前でペコリとお辞儀する藍色ショートヘアーの子。
名はセンチュエル・リニール・ハティ。

そう、この子はこの地を収める貴族様の3人娘の一番上。
性格は男勝りの元気で、貴族らしい気品の無い、だけでもやさしい子だ。

よくお忍びというか、勝手に館を飛び出しては、平民の子供と混ざって遊んでいて、

分け隔て無く接してくれる為、周りの平民からも気に入られている。

今でも他の子どもと遊んでいたらしく、ニヘヘ、と笑うと子供たちの輪へ戻っていった。

年齢は俺と二歳差。顔立ちも将来は美人となるであろう綺麗な顔立ちをしている。

あ、リアル執事に連行されてる。

少年少女も必死に助けてる。愛されてるなあ。

因みに、連行しようとしているのはセンチュエル家に使っているエルドさん。

逃げ出す彼女を見つけては、勉強をしないハティを連行しているのだ。

それは彼女が輪に混ざって遊んでいる最中でもかまわず連行するものなので、少年少女たちには余り好かれていない。

「彼は苦労人だからなあ。ま、ハティのことを二番目に大切に思っているのは彼だろうしな。」

村人は苦笑しながらそれを見ている。

無論一番目は親である。それも親馬鹿なのだとかで、娘達に向ける愛は人一倍強いらしい。

——まあ、まだ若い（24）のに白髪が混じるのが地味に早いのは、確かに彼は苦労人なのだろう。

「お前なにしてんだよ」

いつものセンチエル森：名前が安価なのは気にしないでくれ。

それよりも。クリーパーに命令をしなければ、と思いつつ入った俺は。

鍛錬で切り開かれた広場の中央丸太でポーズを決めているサムライ。

…こいつをどう思う？

何処かで悪い物でも食ったのか、と一瞬思いつたが、あ、口ねえわと結論に至る。
今世紀最大の謎だ。

「——ハジメル。」

「え」

なにやら変な単語が聞こえた。

「（やべえ、俺疲れてんのか！？いくらなんでも元の世界が…日本が恋しいからって流石にこれはないぞ！？それともお米なのか！？お米を食べたいが故の錯乱なのか！？意味わからねえ、とりあいず……）」

「喋った！サムライが喋った！」

某ハイジのように叫んでおいた。

No. 5! 「平民なる日常」 (後書き)

というわけでなんともまあ、サムライ君が喋りました。

なんだかボケが欲しかったのと、後半戦が寂しかったので勢いあまって☆

にしても、原作はアニメしか見てないので、ゼロ魔の設定とかわからんのよ。

宜しければ、今後ともお願いします。

誤字、認識の間違えなどがあればご報告お願いします。

N o. 6! 「覚悟」 (前書き)

今回は下手糞なシリアス。

実際考えている事としている事が矛盾した所が多く出てきそうではあります。

次回で平民少年編は終わりに…なるかなあ。

No. 6! 「覚悟」

「とうっ!」

どうやら幻影でも、疲れていたために聞いた幻聴でもないらしい。
正義のヒーローばかりにかっこ良く^{ばくてん}猿轢を決めたサムライ。

——いや、俺の中のサムライのイメージが…。

「いや、願ってみるものでござるな! ヴェン殿。拙者のようなの
ーばでいでも願いたいというものは聞き遂げられるものとは! 拙者、感
動したでござる!」

「…えっと。どちら様?」

「のおおおっ!?!」

意気揚々と話しかけてきたサムライ(?)に現実を認めたくない俺は
思わずそう聞いてしまった。・・・にしても盛大なズッコケだな。

リアクションに俺が感心していると、サムライは立ち上がり、ぱっ
ぱっ、と土を払い。

「拙者は、サムライの中でも長き時主人(ヴェン殿)をお守りした
——」

「―鳶とんびと申しあげる！」

どうやらこのサムライ、名前まで持っていたようである。
一瞬某量産型の名前を言いそうで冷や冷やしていたが。

にしてもだ。

「なんで急に喋れるようになったんだよ!？」

残念ながら、俺は謎を自分でゆっくり解こうというタイプではない。
早急に今世紀最大の謎の答案を求めることにする。

――すると奴は目(?)を光らせ。

「よくぞ聞いてくれたでござる!それは昨日ヴェン殿が能力の実験
とやらを終えて、別れた後でござった!。」

「で、結論だけ聞こうか？」

「手厳しッ!…回想ぐらいいでござろう!？」

~~~~~

(サムライ視点)

「はあ…今日も対して調べられなかったな…。んじやな、サムライ」

「…。」

手をヒラヒラさせて言う主人を無言で見送るサムライ。

隣でまだなにやら咀嚼する音が聞こえていたが、特に目に留めることもなく、鍛錬を行なっている…

二匹はその広場へ足を進める。

パリッパリッ。

少々五月蠅いでござるよ。

そう二番目に主人に仕える事なった部下クリーパーに注意しようとしたが、

「……。」

出るのは沈黙だけである。

…もどかしい。然し、今に始まったことでもない。

過去にも、主人に言葉にして注意を促したかったあの時も。

刀でしか語る事ができないサムライには…辛い事であった。

心を少しとも手に入れる事ができたあの日からだ。

この気持ちに苛まれたのは…打ち上げる事のできない心の叫びばかりに悩まされるようになったのは。

『ちょっと…良いでしょうか？』

「……。」

何か声が聞こえた気がして、桜花は周りを見回したが、姿は部下意外にも居ない。

部下はしゃべる事が出来ないしー、一体。

『ああ…これは念話です。あなたの意識に直接話しかけてるんですよ。』

「……！」

驚いた。

『良かった、成功してたみたいですね。あらま…これじゃ会話に困るなあ…んじゃ、えいっと。』

「…お、」

『？』

「おおおおおおおおおおお！……！」

感動だ…と、一瞬彼(?)の目(?)から滝のような涙が出ている幻影が見えるほど……。猛烈に叫んでいる。

積年の願いが適った。

…少々呆気ない理由ではあるが。

~~~~~

「えっと、ひょっとしてだが、その女の声の人って…。」

「主に『貴方を転生させた神様』って言えば解ると申されていたが…なるほど神様だったのでござるな。」

なんともまあ。

なにやら鳶に続きを促してみれば、第三の願いがカウントされなかったようだ。

うん、そーいえばノーバディって不老なんだよな。

んで変わりに送られた物といえは…。

何か見たことのある肩当。

「はて…？」

「?どうしたのでござるか？」

肩当…何か重要な事が思い出せそうだけでも…
まあ、良いか。

神様の事だから何時か必要になるんだろうし。

とまあ…。

「む、主人、」

「…ああ、わかってる…。」

エンカウント。

どうやら二人で騒いでいたせいで、敵さんと思われる者達を引き寄せてしまったようだ。

周囲でガサガサと音が聞こえる。

…数的には6匹。それに音がそれなりにデカイ。

（この足音は…又もやあの？おーく？なるものでござるか？）

ヒソヒソと俺に訪ねてくる鳶。

…いや、知らねえよ。俺だって聞きたいよ。

（そうなるど厄介だな…囲まれてるようだし…逃げるのは難しいな。）

切迫した殺気が立ち込める…冷や汗と共に未だに音を立てる周りの草むらを横目に、

この展開をどう切り抜けるか、という方法を詮索していた。

「（畜生…単純に切り抜けるだけなら増援を創ればいいんだけどな…。）」

同じく警戒しながら、何か思案している様子の鳶を横目に。

「（コイツ（鳶）らばかりに頼る訳にゃいかんしな…、）」

それに、増えれば隠すのも辛くなる。できれば危険は避けたい。

肩当は戦闘フラグだったか。

オークみたいな馬鹿力と接近戦は懸命ではない。ならば。

【凍てつく学究】

凍らせて一気に蹴りを付けるしかないのだろう。

ヴェンがシールドを構え、鳶が抜刀した。

「プギイイツ！」

それを開始とするかのように、一匹のオークが襲いかかる。

…ヴェンの予測は間違って居なかつたようだ。

「！…せいっ！」

瞬間、鳶の流れるような動きで懷に潜り込み、刀で貫いた。

急所を狙ったの攻撃のようで…恐らく心臓かもしれない、オークは痙攣した後、あっさり絶命した。

それを見て、やはりヴェンが口元を抑えて、顔を青くした。

「むぐ…「プギッ！」うおっ！」

「主人、危ないッ！」

二匹目がいつの間にか背後から混棒を降り下ろそうとしていた。

慌てて前に飛び込み前転で回避。慌てて行なったから腰を打った。痛い。

フリザド
「氷よ！」

「フギッい！？」

突然現れた冷氣……そして、氷。

力加減が分からない。凍りついたのはオークの左足。

否…力加減が分からないんじゃない。「殺す」事に躊躇しているんだ。

「（ち、畜生！殺らなきゃこっちが殺られるってのに！）こ、氷よ

「！」

「グィエエッ！」

悪態を付いてもう一度冷気を放つ。

…だが、やはり力が制限され、右足を凍りつかせるだけだった。
しかし、これで一応動きをある程度封じる事はできた。武器を振り落としている。

「四刀流……霧雨キリサメッ！」

鳶といえば…鞘をも用いた四刀で霧のように二体目のオークを切り刻んでいる。

「（あれが…、さっきまで陽気に話してた奴…なのかよ…。）」

これが…戦い。

そして、更にオークの悲鳴が重なったかと思えば、戦闘していたのは、

あの、クリーパーだった。

「プギャアアアアー！」

ベチヨ。

水を叩きつけたような音がして、降りおろされた棍棒がクリーパーを押しつぶした。

…と思ったその時。

水銀のような光を反射した液体は、みるみる内に体を変形させ――。

「プギ――」

槍となって、オークに突き刺さった。

左胸に刺さっているようで、悶えるオーク。

銀色の槍はまた変形を初め、先端の部分が長い鋏。

そして。再びオークの体を貫いた。

あっという間に三匹のオークを絶命させた鳶とクリーパー。

あれだけ至近距離で確実に血が多く流れるような殺し方をしたというのに…。

――全く血がついていない。

否、表面に赤い部分があるのだが、その血は、まるで防水加工された布…傘にかかる水のように

地面へ滑り落ちていく。

これが…殺戮…否、戦闘。

初めてこの世界でオークが死ぬ所を見たと言うのに、トラックに轢かれた時だって見たのに。

血、死、死体を見ると、膝が震える。

すぐに逃げ出してしまいたい。

目を閉じて、現実逃避したい。気絶したい。

でも、死にたくない。

そう、生き残る事に決心した俺はー。

両足を氷漬けにされながらも、また武器を拾い上げ、構えるオークに対して。

「ごめん」

「氷よ！」

止めを、刺した。

この世界は前世のように平和に暮らせる世界じゃない。

平和ボケしたまま、生涯を終えられるような所じゃない。

俺は初めて殺した―目の前の完全に冷凍されたオークを目の前に、

ただ、静かに涙を流していた。

N o. 6! 「覚悟」 (後書き)

ノーバディー達は無双。

正直主人公戦わなくて良いんじゃないかってぐらいでござる。

まあ、ただ部下に任せっきりの上司ヴェンにはならないようにしますけど！

先頭描写難しい。

誤字、認識の誤りがあればご報告くださいませ。

N o. 6. 5! 「夢」 (前書き)

迷走。

そして量は薄め。

No. 6. 5! 「夢」

あの後、目眩がするやら、吐き気が来るやらで、両親を心配させてしまった。

俺が止めを刺したのは、一匹。

残りの5匹は、鳶とクリーパーが仕留めた。

はたから見れば、たった一匹である。…自分からすれば一匹でも…だけでも。

遺体は全て土に埋めた。…体の大きさが大きいだけに大変だったのだが…。

「……。」

二つの月に照らされる部屋の中、俺はベットで寝転んでいた。眠れない。まだ、全身が痛い。

——俺も何時かはあの事（殺し）にも慣れてしまうのだろうか。

そんな考えが脳裏をよぎり、「そんな訳がない」と頭を振って否定する。

人は良くも悪くも、「慣れて」しまやすい。

もしそうになったら、と思うだけで背筋が冷やりとする。

繰り返される自負の念に疲れ、俺が寝ついたのは、長らく時間がたったあとだった。

「あ…れ…?」

俺が目を覚ましたのは、ベットの上ではなく、乾いた砂の上だった。周りは暗く、余り見通しが良くない。

ザザアア、ザアアア。

不意に波の音が聞こえたので、そちらに目を向けると。

元の世界と同じような、一つの月と海。
照らし出された暗闇の世界だった。

ふと、目を凝らしてみると、誰かが岩の上に座っているようだった。
一瞬、俺は元の世界の夢でも見ているのかと思ったが、生憎とこんな光景は見たことはない。

それに――。

目の前の? 黒いフードの男? でここが何処が分かったところだった。

「…こんな所に客とは珍しい。」

見たことがある。

俺が前世で死んだ時も、今世の今でも正体が解らない、あの人物が居た。

「貴方は…？」

「ふむ。君は正式な客では無いようだな…。不思議な事もあるものだ。」

「客？」

一人何かを分かったかのように言う彼。

正式な客というのはなんなのだろう。

というかスルーかいな。

「おお、失礼。何、気にしないでくれ。」

君はとても似ているな…。今では名前を忘れてしまったが…。彼に似ている。」

…ふむ、君に解るように説明しよう。…君は夢を見ている。」

夢？

…痛くない。頬を抓ってもなにも感じない。

うん、そうなのか。

まあ、何となくふわっふわっとした現実味の無い感じがしてるからな

「君が此処に来れた理由は私には解らないが…」

彼は若干申し訳なさそうに言うと、

「求めている事なら解る…：君は答えを求めているようだな」

ずばり、俺の欲しかった事を言い当てた。

…夢だから、という事にしておこう。

「貴方はどう思います？」

「…どうだろうな。答えは私には答えられないかもしれない。」

…そうなのかあ。

まあ確かに、急に「殺しについて貴方はどう思う？」なんて答えを求められてもな。

というか、「死」っていう概念が無い所で生きてるからね…。

「只、殺しという行為に正当さや正義はない…：ということだな。」

…？

「殺しが全て罪というのは…：無論例外もある。」

例外？

「肉だ。人は肉を食べる為に生き物を殺すだろう。弱肉強食、だ。」

それに、君は一度も蟻を踏み潰した事は無い、と言えるか？」

それは、言えない。

「逃げるようではあるが…、自己満足や無意味な殺しを避けなければ良いのではないか？
時には守る為に奪わなければ成らない事もあるからな。」

…その能力チカラをどう使う？」

この能力チカラを…？

「以外と答えは簡単な物だ。」

まあ、力が無い物にすれば、？成し遂げる？事は実に難しい事ではある。

全てを温和に終わらせる事が出来ない事のほうが多い。それは力があっても同じかもしれないが。

だが、お前には力のある者だ。」

…そうなのか。

命を奪わないで済む方法…否、命を奪う必要性を発生させないようにする為に。

「答えは見つかったかね？…くれぐれも間違った選択をしないようにな。」

それと…それは元は私の能力だ。有効に使ってくれたまえ」

ああ、有難う。

探してみるよ。

最後に波の流れる音が聞こえ、俺の意識は薄れていった。

N o. 6. 5! 「夢」 (後書き)

頭の中が混乱中。

?彼?が誰なのか…、

どうして夢で彼を出そうと思ったのか、作者でも分かりません W

次回でようやく原作メンバーと出会い。

No. 7! 「旅立ち」 (前書き)

ふえーい、更新が遅れました御免なさい。

今回はついに、原作メンバーと出会う：瞬間手前までどうぞ。

No. 7! 「旅立ち」

とある日の昼頃。

待ってましたとばかりに手を振り上げ。

「キイイイイイイイイイイグウウウウウ」

サッ

「クイイイイイイムウウウ」

サッ

「ゾおお「やらせねーよ!」手厳しッ!？」

鳶^{アホ}の頭を殴って止めさせた。
ごほん…行き成り冒頭で悪いな。

あれから10年。

10年間ですっかり背も伸び色々変わってしまった俺だ。ヴェンだ。鳶が冒頭で叫んでいた（未遂に終わったが）通り、キング・クリムゾンだが許してくれ。

…この10年間。長かった。

否、実際終えてみると、案外早かったなーって感じではあるのだが、修業中は大変だった。

まあ、結局、村に任された仕事をこなしたり、使う余地があるかどうか怪しい系統魔法の訓練をしたり。

どうやら適正は風にあったようで、それなりに強い突風を起こすことが出来た。

——ランク？ かどうか解らないが、母によると「ライン」程度らしい。

因みに他の魔法については、同じくらい「火」があるぐらいだった。

…どちらも「まほう」に負けているから、はっきりといって微妙だけれども。

でもまあ、上位になると分身を作り出せるらしい。

単純に分身といえ、できなくもないのだが、俺の分身はダメージを受けると俺も受けた事になる。
しかし、風のスクウェアスペルの分身は…某忍者漫画の影分身のようなものらしい。

辿り着くには高い壁があるけども。

………

「ヴェン、それは考えて決めた事なのか？」

「そうよ。そこだけはハッキリとなさい。」

昼の食卓。

飯を食べ終え、俺はある決意を両親に話す事にした。

この世界での成人が今一解らないのだが、俺はもう20なのだ。（

前世合計38。）

そろそろ見られる物を見たくて旅に出たいと思っていた。

のんびり平和に暮らしたいとは思わない事はないが、
やっぱり異世界なのだ、冒険しなきゃ損だよなあ。

んで、俺が、

「色々知りたい事、やりたいことが在るんだ。だから…旅に出ていか？」

そんな事を告げると、先程の両親の再問。

俺はゆっくり頷いて、

「ああ。それが俺の願いだから。」

「「……………」」

俺が割化し緊張しているが、堂々と言い切った後、
両親は二人とも思案顔になって唸っていた。

——そして痺れを切らしそうになった時。

「…わかった。なら、？あれ？を持っていきなさい。」

親父は重々しく頷くと、自室へ歩いていき。

——程なくして、大振りの剣を持ってきた。

その剣は一般世間でいう大剣：もしくは両手剣と呼ばれる大きさ。
No. 7でいう？クレイモア？より大きめで、片手で振るうのには
難がある。

ロングソードか。

鞘のカラーは薄い緑で、長年愛用されていたと思われるような傷が
あちこちについている。

しかし、錆びが少しもない所を見ると、良く手入れされているようだ。

——いや、基準はわからないけどね？

「父さんが母さんと結婚する前まで……傭兵時代の時愛用してた剣だ。」

おお…それは年季が感じられる訳だ。

って、結婚するまで？したあとは何使ってたんだ？モンスター討伐とか…

…まあ、いいか。

「父さんにはもう使う機会が無いかもしれないから…。ああ、後碓石もだ。手入れはちゃんとするんだぞ？」

ずしり。

おお、思ったより少したが、軽い。

「あら…その剣を見ると思いだすわねほら、あの時の……」

なにやら昔話を始めた二人。

なんだかんだで、夫婦水入らずの生活でも送りたかったのではないだろうか。

二人とも見た目こそまだ若いが、年は確実にとっている。

——俺はここから死ぬまで姿に変化は無いんだけどな。

ちょっと寂しくなった俺だった。

・
・
・
・
・
・
・
・

「ほほおー、主人のお父上の愛剣でござるか…。」

「ああ、傭兵時代から使ってたらしい。」

所変わり森の中。

数の増えた丸太の上に、俺と鳶は座って会話していた。

此処も変わった物だ。

…少なくとも良い意味では無い。残念ながら。

広場のスペースは何倍かに広がり、地面が抉れている所、隆起している所。

大惨事である。

「それにしても良く見つからなかったよなあ、ほんと…」

「？」

「いあ、なんでも。」

どうしたでござるか？

と言わんばかりにしみじみ修行の日々を思い出す俺に疑問符を浮かべている鳶。

「んで、その剣って凄いのか？」

「大した業物でござるな。これを作った匠に御会いしたい。主でも解る通り、結構な年季物。」

お父上も手入れ怠っていなかったのでござろうなあ。」

べた褒め。

というか鳶よ、お前自分の愛刀しか使わんだろ、なんで詳しいんだ？

「拙者としてサムライである前に一人の剣士でござるよ！」

だそうだ。俺にも解る日がくるんだろーか。

：能天気な癖して割りと博識なんだよな、コイツ。

と、

ペタリペタリ。

独特な足音と共にクリーパーがどこからともなく歩いて来た。

「お、ちゃんと来たな。って何銜えてんだ？」

クリーパーを掴んで目の前まで持ち上げる。

あからさまに毒毒しい色のキノコを銜えていた。

ああ、これは…。

「…クリーパー、エゾテングダケ（毒キノコ）をキャプチャーしたみたいだな。」

否、実際この世界にはない。ただ、一応毒キノコではある。それも人を致死させる程の奴。

ただ、直感的に言いたくなっただけだ。気にしないでくれ。

——まあ、大丈夫だろうからジタバタし始めたクリーパーを降ろしてやる。

「所で主、何時出発するのでござる？」

「主じゃなくてヴェンって呼んでくれよ……明日の朝。」

「ムシヤムシヤ」

「明日の朝でござるか…、拙者達は？アレ？の中でござるか？」

「うんむ。」

説明しよう！

？アレ？とはNo. 10「ルクソード」武器であるカードの事である！

自分がカードに入り込んだり、カードに相手を閉じ込めたりとしている所からヒントを得て、

「これなにか保管したり保存したい時に役に立つんじゃない？」という考えに至り。

結果、見事に対象を保管させる事に成功した。

一枚につき一つしか物を入れられないのだが、カードの数は無限にある。

出そうと思えばポンポンでるのだ。

ただ、事実物をコンパクトに保管するだけなので某猫型ロボットの四次元ポケットより不便だ。

まあ、その代わりなんと、カードの時を操れるようなので、食材等も保管できる。

因みに中の物を取り出す方法としては、俺が解除するしか無い。

とまあ、これに鳶達をバレずに運ぶ事が出来るわけである。

ただ、如何せん中は何もないから暇らしい。俺はまだ入ったことないからしらが。

主にそれが鳶の不服らしい。

「拙者が自由に表を歩けるのは何時になるのでござるかなあ。」

「…ん。善処するさ。」

何時かはそんな場所を作りたいと思う。

前にも言ったであろうが、時間はあるのだ、のんびりでも確実に探せる筈だ。

【運命を賭す者】

称号を唱え、カードを創り出す。

表まっさらなカードが二枚出たのを確認して、

「んじゃ。」

「御意。早く出られる事を期待するでござる。」

パアアツ

光と共に鳶の姿が消え、カードにサムライが描かれる。
それを確認すると。

「次はクリーパーと…こら、逃げるな。」

毒キノコを食したクリーパーは再び歩きだし何処かに行こうとしていたので、
むんずと両手で捕まえてから、ジタバタするクリーパーを同じようにカードに保管した。

二枚のカードが無事保管されたのを再び確認して、布のバックに入る。

「……。」

長年お世話になったセンチエル森に静かに俺はお辞儀すると、
剣を背負い治してから。

背を向けて村へと戻るべく足を踏み出した。

・
・
・
・
・
・

「明日から旅に出るんだと？そりゃあ寂しくなるなあ。」

長い間お世話になった、大工のラトクさん。

この人には折れた鍬などの修理なのでお世話を掛けた。

鍛錬ギャラリーの一人で、気前の良い親父だ。

「はい。そろそろ、その時だと思ひまして」

「堅苦しい話し方は止めろよ。…ふむ、確かに思えばお前も随分で

かくなつたもんだな。」

餓鬼の頃なんて、嵐が吹けば吹き飛ばすようなチビだったのにな、と懐かしそうに言うラトクさん。

そりゃ、20にもなれば昔のヒョロとした所も無くなるだろう。

「何時ぐらい戻ってくるんだ？」

「そうですね：じゃなくて、そうだなあ、何時になるかはわからないな」

見るもの見てからじゃ遅いかもなあ…。

ラトクの親父も、元気とはいえ歳でもある。

もしかすれば、王都か何処かで職に就くかもしれない。：というか就くだろう。

「まあ、報告には戻ってくるよ。」

「ああ、忘れるんじゃないぞ。…それじゃあ、俺は仕事がある。」

「わかった。仕事、頑張って」

言われなくとも、とばかりに鼻を鳴らして作業場へと戻っていくラ
トク。

さて次は……。

んー、ハティはいま魔法学院に居るんだっけか。
なら挨拶出来ないな。残念だ。

「えー兄ちゃんどっかいつちゃうのー？」

「何時戻ってくるのかしら？」

「へえー兄ちゃんもついでに出るのか。」

村の少年少女。

よく昔話を聞かせて貰ったお婆ちゃん。

先程のラトクの親父の弟子さん。

村人に挨拶を済ませて行く。

途中、子供達と遊んであげたり、家へ招いてもらったり。

そして、日は落ちて、夜。

「答え…見つかるかなあ。」

俺は朝早く村を出る為、早く寝付く事にした。
ぼそりと今回の旅の目的の一つに対する不安を呟いたのだった。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

「ご馳走様」

朝。

若干息子の旅立ちを祝ってか、豪華な朝食を食べ終えた俺は、自室から、カード等、色々入ったバックと、着替えを肩から掛け、譲り受けた剣を背負い外に出る。

黒いフード付きローブを着込む。以外とお気に入りである。

今日は幸いな事に天気だ。

旅立ちが雨だとか、正先が悪すぎる。

「荷物は持った？忘れ物してないかしら？」

「大丈夫だよ母さん。ヴェンだってもう大人だ。」

「はは…、そうだよ母さん。」

まあ確かに、遠足等とは違うのだ、忘れ物はしたくない。もう一度荷物を確認してから、

道中にある森を進んでいたら、行き成り雨が降り出したのだ。

ついていないいな、と内心思いつつ、雨宿りする場所は無いかと、木の下を走りながら探すこと暫く。

「…小屋か。彼処で雨宿りさせて貰うか…。」

コンコン

「…すみません、誰かいませんか？雨宿りさせて貰いたいのですが…。」

反応がない。

人気もしないし、ひよっとしたら留守にしているのかもしれない。

周りを見渡しても、同じような小屋は見えない。

…仕方がない。

「失礼しますよっと……うお…クモの巣貼ってる…。」

どうやら長い間人に利用されていないであろう事を示すように、埃とクモの巣だらけだった。

一応、毛布が敷かれた同じく埃を被ったベット、椅子、テーブル等がある。

汚いけど、我儕は言えないし、これでもマシなほうかな、と思いつつ。

「えー…今頃雨止むなよな…もう」

外を見てみれば、先程の雨は何処へ、また晴れていた。

若干その事に愚痴りつつ、まあ、休憩でもしているか。と思い埃とクモの巣を払って椅子に座る。

荷物は床に置いて置く。

「ん?」

ふと、埃だらけの光景に見合わないような真新しい箱があった。箱といっても長方形というか？長いものだ。

近づいて開けてみる。

「えええっ!？」

まさかである。

この世界でけして、科学の発達していないこの世界で見る事になるとは思わなかった物をここで見る事になるとは。…それにしても何故これが？

「ロケット弾だなんて物騒なもんを…。」

筒丈に折りたたまれたそれは、まさしく対戦車用ロケットランチャーだ。

えーつと…「M72 LAW」？詳しくは知らないけど、たしかM^{メタル}ギアソリッドGSで出てきたよな。

然し、誰がこんな物を――。

再び箱にM72を直すと、椅子に座って思案する。

その時だった。

ドアが静かに開き……。

「「！」」

今、運命の歯車が、回り始めた。

No. 7! 「旅立ち」 (後書き)

てなかんじで第七話。

時間を掛けた割には、話が進んでいないという事実。

……文才が欲しい。

原作メンバーとの出会いはフーケ編から。

なんか結構無理やり臭いですが（へへ、；）

「破壊の杖」のは合ってますかね？

一応wikiで調べはしたんですが。

さあーって…次回は難しい戦闘描写…。

誤字、認識の間違い等あれば、ご報告くださいませ。

No. 8! 「vsゴーレム」 (前書き)

戦闘描写。

というか、更新が遅くなりました、すいません。

保存するの忘れてデータが一度吹っ飛びました(汗)

今回はノーバディ達は出ません。

No. 8! 「vsゴーレム」

「「!」」

俺が出会ったのは、図体が熊のような、気前の良さそうなおっさんでもなく、

威張りくさったような、偉そうな貴族の男でもなく。

青髪の小柄な少女だった。

マントや杖を見る限り貴族だが。

「っ…黒いローブ…」

俺を見た途端警戒して、杖を構える少女。

あちゃー…この子が所有…というか関係してる貴族なのかも…

「わ、悪い。雨が急降ってきた物で…雨宿りしてたんだ。」

「……。」

俺が慌てて理由を説明するが、未だに表情を変えず、警戒する彼女。な、何かりアクションが貰えないと辛いな…。

「ねえ、何か見つけたの、タバサ…って黒いローブ！」

「……まって」

「なにしてるのよタバサ。黒いローブの男って正にこの男じゃないの！」

「フーケ？俺の名前はフーケじゃない、というか誰だそれ。」

俺の言葉に、後から入ってきた赤い髪の少女…恐らく青い髪の毛の子と仲間なのだろう。

も、怪訝そうな目で俺を見てくる。

「貴方本当にフーケじゃないのかしら？…つくならもっとマシな嘘を付きなさいよ。」

「いや、バレたかあ、ってそうじゃなくて！俺はフーケじゃねっての！ヴェンっていう名前があんだよ！」

「へえ、んじゃヴェンさん。本物のフーケは見たかしら？」

知らない知らない。
というか、

「フーケって誰？」

俺の質問に、彼女達は目を見合わせると小さな声で、

「……嘘は言っていないみたい」

「本当に何も知らないのね…、」

そこで漸く警戒の色が薄れる二人。

「ん…自己紹介させていただくわね。私の名前はキュルケ…長いからキュルケでいいわ、
なかなかカッコイイ平民さん。」

「…タバサ。」

「あ、ああ。ありがとう。…改めて、旅をしてる。ヴェンだ。」

どうやら威張りくさった貴族様…ではないらしい。
まあ、それでもまだ見下した感はあるが。

——まあ仕方ないか。

「んで、答えてくれなかったらそれで良いんだが…？フーケ？って誰だよ？」

「貴方まだ街に行っていないの？」「ああ。」…なら仕方ないわね。」

なんだかんだで教えてくれるらしい。

「フーケってのは、ここ最近…というか暫くだけど貴族の間で噂になってる大泥棒の事よ。」

「大泥棒ね…」

「優秀な土のメイジで、二つ名は？土くれ？…ゴーレムの大きさからして、トライアングル…くらいかしら。」

トライアングルか…といっても実際に見てみなきゃどれだけ凄いのかも想像つかないな…。

「なるほど…で、なんで君たちは俺の事をフーケと？」

「まあ…いろいろあって私たちもソイツに盗まれてるのよ。それで、私たちは協力してフーケを捕まえる事になって、」

「うちの仲間の子がなんだけど、フーケが物を盗む際にその姿を目撃してるらしいのよ。」

「…それが黒ローブの男」

なるほど…、

「情報では、この小屋を拠点に使ってる、っていうのだったけど…

この様子じゃハズレみたいね。」

偶然、黒コートを着て、この小屋に居た、という事から疑われたわけか…。

なんつーか俺、不幸だな。

「さ、行きましょう、タバサ。ダーリンにも報告しなきゃ。」

「…（コクリ）」

「さようなら、平民さん。」

「ああ。」

と、二人が出ていこうとした時。

ゴゴゴゴゴゴ

「なっ、地震…!?!」

『きゃあああああああ』

「っ、この声はヴァリエール！タバサ！」

「……フーケのゴーレム」

「ここが拠点だってことはアタリみたいだったわね…、杖をもってない…貴方は違うみたいね。」

二人の後を追ひ、外に出ると、そこにはそびえ立つ巨大な土のゴーレムが。

「でけえ…。」

少なくとも、オーク鬼は軽くある。

これが、トライアングルクラスの實力か…と感心。

「…（呪文詠唱の声）」

タバサは既に詠唱を開始、杖を前に出すと、

「トルネード」

ヒュゴオオオ！

竜巻を発生させ、放つ。

強風か、真っ直ぐ、ゴーレムに吸い込まれるように当たる。中々の強風だ、流石に、機関メンバーのほうには負けるが、高いクラスであることは間違いない。

だが。

目立った傷一つ付いていない様子を見ると、ゴーレム（相手）のほうが強いうだった。

「（風じゃ分が悪いとは云え…強度は凄いな）」

「私も行くわよ！…ファイアボール！」

次はキュルケがスペルを唱え、大きな火の玉を作り出す。こちらの中々大きい。これならダメージが…

メラメラ、と着弾したゴーレムの表面を焼くが、

ブウウン！

ゴーレムの一払いで鎮火。焦げたぐらいで目立ったダメージにはなっていない。

「ッ…あのゴーレム、中々ね…。」

これにキュルケが舌打ちする。

中々所か、大分だと思うんだが。

ゴーレムのすぐ近くにいる、ヴァリエール嬢の姿を見て、

「（俺が動いたほうがいいのか？）」

然し、ノーバディー達と同じで、人前では封印している能力。

…え？このままで（能力未使用）いけて？

このままであのゴーレムに勝てるほど、化け物にやなっちゃいないぞ。うん。

たしかに、血を吐くような訓練はしたが、飽くまで一般人より強いって程度だ。

そこへ能力使用によるステータスが+される、ということだ。

それに不老なだけであって、消して不死身ではない。

場合によっちゃ、食中毒で死ぬこともある。

——ただまあ：死んだ事ないから解らんけど。

「タバサ、シルフィードを呼んで頂戴！」

「：（コクリ）」

「（黙って見捨てるほど、俺は落ちぶれちゃいないしな…）」
【静かなる豪傑】

今回はN.O. 5「レクセウス」を選択する事に。

実際、まだ他に選択はあったんじゃないかと思うだろうが、

まあリスクを少なくするなら、これが良いんじゃないかと。

一回の戦闘で一回までしか能力使用が出来ない、なんて事はないかな。

と、今にもヴァリエール嬢迫るゴーレムを止めようと歩を進めようとしたその時。

あの科学兵器ミサイルランチャーと同様、見ることになるとは思わなかった物を見る。

「ルイズっ！」

黒髪の少年。

そして服装といえば、現代的な物。

背中に錆びた長剣を背負っている事を除けば、何処にでもいるような高校生に見える。

「（…でもなんでそんな人物が？）」

……

「（まあいいか。聞いてみりゃ解る事だし…）」

と、なにやら、揉めている二人。

否、そこ危ないから！さっさと逃げようよ！

何やら「貴族だから逃げる訳には行かない」等と聞こえたり
乾いた音がしたと思ったら、少年がヴァリエール嬢の頬を平手うち
してたり

「お前ら逃げろおおおおおおお！」

「「え？」」

二人に迫るゴーレムの拳。

なんとか間に合う。二人を押しのける。

次の瞬間、ものっそい重量が体に襲いかかる。

「ぐあっ……ふんぬううう！」

一瞬意識が飛びかけたが……
というか飛かけるだけで済んで良かった。

怪力は怪力といっても、見事にスプラッタになる可能性がある。

——まあ、賭けに近い。

「うおらっ！」

掛け声が余裕そう、だって？

ノンノン。むっちゃ辛いです、全身、特に足と腕が悲鳴上げてます。なんとか、ゴーレムとの力の競い合いに勝ち、押し返す事が出来た。

然もよろけてくれている。

真逆、人間に返されるとは思わなかっただろうな。

無論、隙を見逃す気はない。

俺自身もよろけながらだが、アックスソードを召喚して。

「土よ！（クエイク）」

アックスソードで地面を叩き付ける。

クエイクというのは、地面を隆起させて串刺し、もしくは敵を打ち上げる「まほう」。

発動には地面に何らかの？衝撃？を与える必要がある。

敵を単体で狙って隆起させる事は勿論、直線上に連続で隆起させるタイプが。

今回は、ゴーレムの足を隆起させた土で貫き、バランスを崩させるのが目的なので狙い型。

「せやっ！」

ガキッ、ズゴォン！

狙い通り、クエイクのまほうはゴーレムの片足にHIT。
あの大きい図体ならば、片足だけでは支えられない筈だ。

だが。

それは、ゴーレムが再生しなかったら、の話だ。

ズズズッ、と折れた片足が猛スピードで隆起した土も呑み込み、元通りに。

「ちくせう！（畜生）フーケのゴーレムは化け物か！」

「ちょっと、貴方…なにものなのよ？す、素手でゴーレムの腕止めたり…」

「質問は後にももらえると有難い！あの二人を！」

「え、ええ。貴方は大丈夫なの？倒す手立てはお有りかしら？」

「大丈夫だ、問題ない。…と言いたいけどな。取り合いず時間は稼ぐ。さあ行ってくれ！」

話している内にも、着々と力が上がっていくのが解る。

上昇の基準が、通常verなのかリミットカットverなのかは解らないが、…比べようがないからな。

ただ、気力の上がり下がりによって出来る事も変わるから制御は繊細で他のメンバー同様これも難しい。

キュルケが二人を、特に、「貴族の誇り」がどうか言ってるヴァリエール嬢を連れて何処かへ行くのを

見送ったあと、完全に片足を取り戻したゴーレムへと向かい合う。

パンパン、と手を払って。

「てめえは奴らを殺したいだろうが…悪いがこっから先は一方通行だあ！」

どやあ…

Side キュルケ

「ここまで来れば大丈夫ね…あの平民さん大丈夫かしら…？」

「今すぐにも引き返すわよ！フーケを捕まえなきゃ…後、あの意味不明な平民の事も調べなきゃ！」

「あつ、ルイズッ！ごめんキュルケ、直ぐ彼奴連れ戻してくるから！」

「またもや懲りずに元の道を引き返していくルイズ。」

「ダーリンは連れ戻す為に追いかけて…って態々二人をここまで連れてきた意味ないじゃない！」

「私はため息を付いて、二人を追いかける。」

「ごめんなさいね、平民さん。貴方の努力、無駄になりそうだわ。」

S i d e ヴ ェ ン

「うおおおおお！」

雄叫び。

そしてオーラの量は更に増え、暑苦しさをすら感じる程に。

まだスーパーサイヤ人ほどは出ていないが。

ガゴッ！

先ほどよりも軽くなったフットワークと、アックスソードでの一閃で腕を叩き切る。

尚も再生を繰り返すゴーレムだったが、段々と遅くなってきた気がする。

「（まったく…このままゴーレムを倒せるのは目に見えてるが・・・その後が面倒だな。）」

時間が経つごとに脆くなるゴーレムと、時間が経つごとに強くなる俺。

言わずとも勝敗は決まったようなものだが。

「（フーケの野郎を取っちめないといけないしな…捕まえられるか心配だ…。）」

「覚悟しなさいっフーケ！」

「っなあ!?!」

突如、後ろから物凄い音と共に衝撃を受け、俺が吹き飛ぶ。
まさか、フーケか！？否、でもさっきの声は：

体制を立て直し、目を向けた先には、ヴァリエール嬢の姿が。

「おい、ルイズ！なんであの人を攻撃したんだよ！」

「ち、違うわよ！ゴーレムを狙おうとしたら、何故かそこが爆発しちゃって！」

なん…だと…。

今のは爆破ミスだったのか！あぶねえ、まじあぶねえ。

狙いがもしも俺の体内だったら、汚ねえ花火になるところだったぞ！

おそろべし！爆発少女ヴァリエール！

…って、そんな事考えてる場合じゃなくて。

「そおおうい！」

迫る拳を切り捨てる。

奥義で葬りさってもいいが、残念ながら未完成だ。

…あ、そーだ。

「少年！取ってきて欲しい物がある！」

「な、なんだ?!」

「小屋があるだろ? フーケの拠点とか言われてる場所。其処にミサイランチャーがあるはずだ。」

「なっ、ミサイランチャー?!」

「ああ、時間は問題なく稼げるが早急に決めたほうがいい。いそいでくれ! 長方形の箱にはいつてる!」

「任せろ!」

「ちよちよっと! サイトは私の使い魔なのよ、そんな勝手なこと…」

「悪い、嬢ちゃん! これもフーケを捕まえる為だ、分かってくれるな?」

やっぱり知ってたか。現代的な装いと言い、そうじゃないかと思っ

た。小屋へ走り出した少年…もといサイト。ヴァリエール嬢はそれを見て講義の声を上げる。

俺の答えに渋々だが納得してくれたようだ。

「(フーケの搜索を頼もうと思ったが…プライドが高いみたいだな。)

恐らく彼女は俺の指示を受けてくれないだろう。
予想ではあるが間違ってる気はしない。

再生を終えて、俺を攻撃しても一向にダメージが与えられない事に
遅くながら学習したようで、ターゲットをヴァリエール嬢に移した
ようだ。

ズシンズシン、と土煙を上げて歩き、拳を振りかぶる。

「きゃあ!？」

「させるか!土よ(クエイク)!」

足をクエイクで碎いて、拳をアックスソードを投げて切る。

回収しなければ素手だが、時間も時間だ、今なら素手でも互角以上
に戦えそうだ。

森のほうへ飛んで行くアックスソードを見ながら、仕方なしと拳を
握る。

と、その時、俺のほうにも遂に救世主が。

「持ってきた!一応、俺使えるみたいだから、俺が狙っていいか!
?」

「え…?君はソイツ(ミサイランチャー)使えるのか!？」

「多分、俺のルーンが関係してると思うんだけど…」

いろいろと聞きたい事はあるが。

俺も使ったことは無い。というか前世で持てる訳ないよそんなもん。まあ好都合だ。使える奴が使ったほうがいい。

「わかった！一発お見舞いしてやれ！」

「おう！」

ルーンの力がどうか言うのだが…スムーズに展開を終えた所を見ると問題ないようだ。

にしても、俺たち初対面だよな…？

「くらえ！」

そして、サイトの持つ対戦者用ミサイルランチャーが。

バシユッ！

音を経て射出された。

そして、化学兵器はゴーレムへと着弾し。

ドカアアアアアアアアアアアン！

上半身を木っ端微塵に粉碎した。

残った部分もボロボロと崩れ落ちていく。

「やったわ！」

「ああ、フーケのゴーレムを倒した！」

動かなくなったのを確認して二人が喜びあっている。

俺は能力解除して、ふう…とひとまずの仕事を終えて座り込む。

まだ「フーケの捕獲」という詰めが残っているが…奴は恐らく精神力の消耗のしすぎで、今頃疲れ果てているだろう。

それに、恐らく逃げる体力は残してあるのかもしれない。

相手は土のメイジ。追いつくのは無理かもしれない。

「ちくしょー…くたびれ儲けの骨折り損…二人を守れたから良いとするか」

なんか、どっと疲れが出てきた。

能力使用状態の時は息が乱れる事も無かったってーのに。

これも能力の一部なのだろうか、と思索していた所。

「だ、大丈夫ですか!？」

と、その時。

森の中から緑色の髪の毛のメガネを掛けた女性が現れた。

ふむ…? この人も仲間、か?

バサッバサッ。

ふと翔く音と共に、青い竜が現れた。

…うわー、風竜か? これ以上敵は嫌だよ、見方であってくれー!

と、半派都合のいいことを考えていたが、一応警戒する。

「ダーリン、大丈夫?」

風竜に乗るキュルケとタバサの姿が見えて、

「(はあ…、助かった…)」

俺は安堵のため息をついたのだった。

だから警戒出来なかった。

カチャ

「助かったわ。」

「ミス…ロングビル？」

「「っ！」」

裏切り者…否、フーケが襲ってくるという事に。

ミサイルランチャーをこちらへ向けるミス・ロングビルもとい、フーケ。

「ちっ…油断した…アンタがフーケだな？」

彼女はメガネを外すと、

「良くわかったわね。」

No. 8! 「vsゴーレム」 (後書き)

て、なわけです第八話です。

実際戦闘と言っても、同じ事繰り返してるだけだったんですけどね..
(; ˊ ˋ 。 ˊ ˋ) ..

まあ、そこは苦手なのでご容赦を。

もう一度アニメを見直そうかな..
それとも原作買ってこようかな..。

後で、「能力レポート」なるものを割り込みで投稿します。
そこに詳細を書いていこうと思うので、良ければ目を通してやってください。

それと。

『^{ツェン}村雨は使い魔を召喚すべきか?』

これについて、意見を聞きたいと思ひまして。

実際、ノーバディー居るなら使い魔要らなくね? って感じではあります。

まあ、することになったらそれで、何を召喚するか決めないといけないですね。

では今回はこの辺で。

誤字、認識の誤りがあれば、ご報告くださいませ。

N o. 9! 「捕獲成功」 (前書き)

進展が無い

遅い

短い

がんばった前回に比べて、異常なほどの低クオリティ。

え、量意外特に、変わらないって？

No. 9! 「捕獲成功」

何も知らない、というのはとても怖い事である。

適切な医療方法を知らなければ、下手すりゃ怪我人の命を奪う事があるように。

目の前の女性も――フーケもどうやら？知らない者？のようだった。

「「「「……」」」」

ロケットランチャー
化学兵器をこちらへ向ける、ミス・ロングビル、もとい、フーケ。
そして、それを向けられる俺たち5人。

とても不味い状況だ。

俺だけなら、なんとか能力でもなんでも使えば、逃げ出せるが…。

「（この四人をどう助けるか…？）」

残念ながら、助っ人（鳶、クリーパー）は小屋に放置してしまった。
：というか、それは流石に隠しておきたい事なので使うかどうか、
といえは使わないのだが。

もし使うなら、最初っから使っとけと。

ただ、そうするとこの事態の解決が難しい。
能力もあのアックスソードを回収するまで使えねえし…、説明する
のを忘れたが、

『出した武器を手にした状態のみ、能力の解除・変更が出来る』

これが分かっている事の一つだ。
キーブレードならば、距離が離れてても戻ってくるんだけどな…。

あれ、詰んでね？

それともあれなのか、某ゾンビゲーのウェ○カー（？）みたいに両手で弾を受け止めろと？

——無理言わんといってください。

タイミングみすれば木っ端微塵って、試す度胸ないれふ。

…ロケットランチャー？

あ。

「H A H A H A H A ! !」

「「「「! ?」」」」

「恐ろしすぎて気ににでも触れたのかい…?」

全員ビククリ、フーケは引き気味。

：酷いな、俺はそんなリアクション求めちゃいないのに。

と、兎に角、この空気に耐えられないので行動に移す。

能力のせいで、ダッシュの時に地面が盛大に抉れたが、これなら直ぐに取り押さえられそうだ。

「ちっ！アンタも馬鹿だねえ、死にな！」

単に俺の勘違いだったらどうしよう。

一瞬、そんな不安がおれの脳内を走ったが。

カチッ

…杞憂であつたようだ。

「ふんっ！」

「くあっ…畜生…！なんでだい…！？」

構えたロケットランチャーを蹴り上げ、そのままバク転して姿勢を戻す。

——ふ、カッコつけ乙だな、俺。

ちなみにバク転は鳶直伝のものだったりする。…初めて喋れるようになった時確か彼奴してたもんな…。

強引に持っていたから、腕を痛めたな、罪悪感が微妙に沸くが、…しめたぞ。

——…あれ、どうやって拘束すりゃいいんだ？

とりあえず、両手を背中で組むように抑える。

「ちっ…！」

「諦めろん。…誰か縄もってないか？」

油断は出来ないが…どうやらこれで解決みたいだ。

ガラガラガラ。

所変わり、武器も回収、現在俺は馬車の上である。
座席にはキュルケ、タバサ嬢、逮捕されたフーケ、そして向かいに
はサイト君とヴァリエール嬢、が居る。

何故か俺は運転席に。

どうやら俺しか馬車を扱えないらしい。…かく言う俺も得意ではないのだが。

——本来ならば、事件解決、ではさらば…だったのだが。

『待ちなさいよ、アンタも関係者なんだから一緒に来なさい。』

何故か不機嫌顔のヴァリエール嬢の一言で、俺の同行が決まった。どうやら、街に行くのは後になりそうだ。残念。

まあ…馬車も動かせないのだから仕方ないしな…と思い現在に至る。

「さて…聞かせてもらおうよ、平民さん。」

「はあ…忘れてくれると有難かったけど…。んで、お嬢さんは何が聞きたいんだ？」

どうやら事情聴取は回避出来ないようだ。

「あ、俺も聞きてえ事があるんだ！」

「あら、ならダーリンが先でいいわ。」

ふむ…サイト君が先か…という事は、多分俺と変わらんな。

「アンタは…アレ（ミサイルランチャー）の事を明らかに知ってるみたいだった…合ってるよな？」

「うんむ、そうだ。知ってるよ。」

「って事はアンタは…！」

「ちょいまち」

やはり、というように迫るサイト君。
…俺はそれを片手で押し止める。

「ね、ねえ、アンタ達、さっきからなんの事話してるのよ？」

「秘密、だ。…まあ、君たちには害は無いから気にしないでくれ。」

それからヴァリエール嬢は一瞬ムスっ、とした顔を作り…「まあいいわ。」

そう言ってフーケへの尋問へ。

「……。」

タバサと言えば、やたらと分厚い本から視線を外さず、無言。

「……。」

フーケのほうも、尋問するヴァリエール嬢を見ながら、こんなガキに話すことなんてないよ。とばかりに無言。

「はあ…」

とりあえず、ため息を付いておいた俺だった。

学園へと戻る道は平和なようだ。

ただ、地面が雨でぬかるんだりしていて、少し尻が痛くなったが。

「んで、俺からの質問だけでも。君はどういった経緯でここへ？」

「そのピンクブロンド：ルイズに使い魔として無理矢理召喚され
たんだよ」

「わ、私だって好き好んでアンタなんて召喚したいと思ってた訳な
いわよ！」

「あれ、じゃあ帰れないのか？」

「…俺は諦めない。なあ、アンタ、帰り方とか知ってたりしないか
？」

無様ねW…ゲフン、んー、と言っても俺はどこでもドアなんて事は

出来ない。

藁にもすがるような思い（そう見える）で聞いてくるサイト君。

まあ、解らない気もしない。突然、見知らぬ場所へ連れてこられて、「返せない」なんて言われたら…。

「すまん…俺も解らないんだ…でも、協力しよう！」

「そ、そうなのか…：はあ…」

落胆してるな。

魔法の中に、転移魔法なんてものが残念ながらこの世界にはない。

否、もしかしたら、只知られていないだけで探せば見つかるかもな・
・。

さしずめ、テレポート（空間移動）ってな。

——うん？でも、某白黒ジャッジメントみたいなテレポートだったらどうしよう。

「（俺の能力の中に無いか…：まあ、関わっているとすれば、確実に属性…空間だろうな。）」

「んじゃ…次は私から。…さっきの馬鹿力といい…貴方何者？」

「人間（キリ）」

「私の知ってる人間はゴーレムの拳を素手で止めないわよ…。」

ここに居るじゃまいか。

一応、基本は人間だ。まだ辞めちゃいない。

「……。（疑惑の目）」

「まだ人間辞めたくないだけだよ、言わせんな恥ずかしい」

なんかサイト君が疑惑の目を向けてきたので。

「…なんでフーケはその…？破壊の杖？を盗もうとしたんだ？」

「武器商人相手に売ろうとしたんじゃないの？」

「なるほど…。もう使えないけどな。」

その為に盗んだというのなら、納得出来る。

あれ、というかそれしか目的らしい目的無くね？

金目的なんだろうから。

結局そのあとは、フーケへの尋問を放置、俺への質問タイムで占められたのだった。

No. 9! 「捕獲成功」 (後書き)

雪「酷い出来だ。」

ヴェン「無様ねw」

そして今回も登場しなかったノーバディ。
…何処でどう出そうか……。

N o. 1 0! 「魔法学院到着」 (上) (前書き)

思いつた分だけ投稿。
前回といい短すぎるよね。

(下) はしっかりいつもぐらいの量にさせていただきました。

No. 10! 「魔法学院到着」(上)

「へえ…ここがその魔法学院なのか…。」

ホグワーツ…ではなく、トリステイン魔法学院。

現在、長い尋問の末に、若干気分が悪くなるという症状を起こしながらも、無事に一向は目的地にたどり着いていた。

因みにノーバディー達については完璧に隠し通した(ドヤ

——否、聞かれてなかったただけだね？

「なによアンタ、ここ周辺に暮らす民のくせに知らなかったの？」

「…そりゃー悪うございあした…。うちの領主の娘がこの学院に通
つてるみたいだね。」

ヴァリエール嬢…改、ルイズ嬢が失礼な聞き方をしてきたので、
むすつとしながら答えてやった。…仮にも俺は命の恩人だぞ…まあ
いいけども。

「へえ…そういえば聞いてないわね。どこの領なの？」

「センチユエル領」

「ああ、あの平民と仲が良いって言う、変わり者の貴族の…」

「そんな貴族も居るんだな…やっぱり悪い人ばかりじゃないのか？」

今度はキュルケ嬢。タバサ嬢とフーケが空気になってるが気にしない。

気にしたら負けだ。何に負けるのかわからんけど。

いや変わり者って…、まあこの世界の貴族から見たらそうだろうが…。

平民にとっては神様みたいなもんだぞ、多分。

ああ、そうだサイト君…：けして多くはないと俺は予想するがな。
どんな世界にも、貴族にもいい奴らっていうのはいるものだ。

「さて、と。付いたわね、うーん。お疲れ様、平民さん。」

「ああ。ほら、立てよフーケさん。」

「まったく…呑気だねえ…、私はこんなのに捕まったって言うのかい…?」

残念だったな?

人は見た目にも寄らないもんだぜ、と言ったら何故か鼻で笑われた。
ていうか、俺の化け物さをアンタが一番わかってる気がするんだが?
フーケがルイズに連行されていく、恐らくこのあとは警察的な所に
引き渡されるだろう。
さて、俺もさようなら、だな。

ガシッ

「貴方も来るのよ。」

「…さいですか。」

ドナドナ状態で引きずられるのも嫌なので、仕方なしに付いていく事にした。

「良く戻ったのう！ いやはや…よもや、ミス・ロングビルがフーケとはもう…。」

「でも良く戻ってきてくれました。お手柄ですぞ！」

俺が案内…連行された場所は、中央塔の最上階付近の部屋。
目の前で感慨深げに顎鬚を撫でる老人が恐らく、学院長のオールド・オッスマン…だっけか。
となりのハゲている中年男性は誰だろうか。…まあ教師と考えるのが妥当か。

「ふむ…で、そちらの方…」

「ヴェンと申します、センチュエル領のほうから旅で。」

「おお、あのセンチユエルからとはの。では、ハティ嬢の事は…？」

「ええ、知ってます」

そうかそうか、と何故か嬉しそうに言うオスマン老人。

この様子なら、ハティは良くしてもらっているのだろう。…出来れば一目見てみたいが。

彼女はまだ気さくでやっているのだろうか。というか大丈夫だろう。

（下へ続く）

N o. 1 0! 「魔法学院到着」 (上) (後書き)

雪「書いてる途中で話の流れ忘れたんだよ、言わせんな恥ずかしい」

No. 11! 「就職」 (下) (前書き)

今回頑張りました。

：面白いかどうかは、作者からじゃわかりませぬが。

雪「今更ながら、原作沿いは途中まで：変わる所は変わります。多分。」

クリーパー「(パクッ)」

雪「おいばかやめろ」

No. 11! 「就職」 (下)

「さてさて…、リーナ嬢の息子…で合っとるかの?」

「え?…母と知り合いで?」

現在、少年少女4人の微笑ましい表彰式を見届け、他の人は出ていき。

——俺は目の前の老人と対話していた。

驚いた。どうやら知り合いのようだ。

「ああ、そうじゃ。一時期、この魔法学院に務めとっての。…ふむ、煙管…煙管は…」

「教師、だったんですか? (…また新事実か…、両親の過去となるとまだなんかありそうだな。)」

オスマン老人は…いや、敬意を込めて学院長と言うべきか。と、いっても、目の前の老人から威厳らしい威厳は感じ取れない。もっと厳しいの想像してたけどな。

「おお、あったあった…」煙管を無事発見する事が出来た老人を見ながら、俺はそう思わずには居られない。

「ふむ、当時は土のトライアングル、スクウェアメイジが少なくて。手を貸して貰ったのだ。」

「なるほど…、…それで、引き止めたのはこれが理由では無いんでしょう？」

「ほっほっ…そう急ぎなさんな。…そうじゃの、一つ、お願いがあるのじゃが…。」

顎鬚を撫でながら、暖かい笑をオスマン学院長は作ると。

「君の腕を見込んでのお願いじゃが…警備員として働かんかの？」

ここでもさかのスカウト。

「警備員、ねえ。」

俺はオスマン学院長に、「時間をください」と答えた。

「ほっほっ。ゆっくり決めて貰って構わない。」老人はそう返した。

——よく考えてみれば、この学院、警備員らしい警備員が居ない。

学院で生徒意外に居るとすれば、雇われている平民のメイド、そしてコック。

で、無論教師。

鎧を着て、槍を持ったような者は居ない。

「こんな警備体制で大丈夫か？」

芝生を歩きながら、つい、つぶやいてしまった。

——否、事実、本当に大丈夫なのか、と思わずにはいられない。

『な、なんで警備員とかを雇ったりしてないんですか……？』

『ふむ……まあ、わしらもメイジじゃからな、一人風のスクウェアもおるし……。』

『まあ単純に特に必要とする機会がなかったんでの。』

『は、はあ。……で、何故今になって？』

まあある程度は予想が付く。

フーケに入られた事による危機感から、だろう。

『ミス・ツエルプス্টーの話では、君がフーケを取り押さえたらし

いの？』

『ええ。…でもそれが？』

『配属するにも、只の平民警備員ではメイジに勝てるかどうか怪しいからの。』

『君の父上と同じ、？メイジ殺し？なら、安心できるという物じゃろう？』

老人は、そういうと、ウィンクをしたのだった。
——待て、アンタ、父さんの事も知ってたのか。

「よっこしようにちっと。…警備員、ね。」

取り合いず、学院内の塔を背に、芝生に座り込む。
再び、どうするべきか思索をする。

——ここで警備員になる事のメリットは？

まあ、それは…。

『君一人じゃから大変かもしれんが…ふむ、給料は生活に困らない程度は出そう。衣食住も保証するぞ？』

…目を光らせて放ったオスマン老人の言葉でわかるように、中々破格の条件なのだ。ここにいれば、取り合えずは困る事はあまりないだろう。

——メリットは？

それは、各地を巡れなくなる事。

休暇は虚無の日等にとってくれるらしいのだが、たかが一日で動ける範囲も決まっているような物。

…あれ、俺って旅に出たんだよね？

しかし、旅に出るといっても、路銀等が尽きてしまった時、働き口無い、というのも避けたい。

「（なら…一日でもそれなりに回れるぐらいの移動手段があれば…？）」

移動手段、ね。

この世界には、前にも述べたかもしれないが、科学が全く発達していない。

基本、移動手段は使い魔に乗る、もしくは馬なのだ。

さて、こうなると無論、能力でどうにかするしかないという物。

候補としては、

No. 2の空間属性。…恐らく、テレポートでの移動が出来て、楽なはず。

まあ、転移場所を間違えれば、生き埋めというところでもない失敗事故が発生する。

——出来れば使いたくないな。

まだ他にもある。

No. 3の風属性。単純に、風の力を操っての飛翔だ。

まあこれでいいのかもしれないな。

スピードを上げればスピードは出るし…。

「（ノーバディー達に何か役に立つのが居ないかな…）」

ふと、ずしっずしっ、という音が聞こえ、そちらの方へ音を向けると…。

「お、確か…タバサ嬢の所の使い魔だったか。」

青い鱗に青い瞳。まさしく、ファンタジーの代表格と言える…

ドラゴン
竜。

俺の考える竜というのは、威風堂々とした、人に懐かない生き物を想像するのだが…。

「きゅん」

この生き物（竜）、人懐こいようで、おまけに鳴き声がやたらと可愛い。

：思わず拍子抜けしてしまったのが良い思い出だ。

「なんか…ようか？」

「きゅいきゅい」

全長6メートルもあるが…どうやらこれでもまだ幼いほうなのだから。成体はどれほどになるのか、想像がつかない。：出来れば会いたくもないのだが。

ソイツはゆっくりこちらへ向かって歩いて来ると、頭を下げて俺の顔を覗き込んでくる。

「……！」

間近で見るとすごい迫力。

ただ、目は近くで見ると、日の光を反射して綺麗な宝石に見える。

「ン……」

とりあいず撫でておいた。

——触り心地？意外とさらさらしてたな。

目を瞑って気持ち良さそうにしている。∴コイツ、可愛いな。

「∴お前、主人乗せて飛んでたよな？」

「きゅい！」

俺がそう聞くと、竜は自慢げに鳴く。

「お、お前、言葉、わかるのか？」

「きゅ！」

すげえ。

しばらく撫で、ゆっくりしていたのだが、授業が終了した事を知らせる鐘が鳴ると、何処か満足げに竜は飛び去っていった。

——主人（タバサ嬢）のところへいったのだろう。

さて、俺も答えを出しに行くか。

「失礼します。」

「おお、ヴェン君か。入ってくれて構わんよ。」

ノックし、ドアを開けて中に入る。

と、オスマン老人は出ていった時と変わらず、煙管を吸っていた。

——仕事しないのか…？

机を見ても、種類らしい物はのっていない。

オスマン老人は体をこちらに向け、

「やってくれるかの？」

俺はその質問に、

「ええ、お願いします。」

できる限りの笑顔で答えたのだった。

No. 11! 「就職」 (下) (後書き)

主人公、就職。

オスマン先生の口調とか色々気になるでござる。

イルククウかあいよいよイルククウ。

実はヒロインはイルククウにしようかと思ってまふ。

鳶「……。」

雪「悪かった」

No. 12! 「学院内詮索(上)」 (前書き)

とりあはず出来た前半をUP。

今更だけど、ヴェンの姿は二次元的な姿に脳内変換してくださると幸いです。

No. 12! 「学院内詮索(上)」

魔法使い。

それは子供のならば、一度は憧れた事はあるだろう、職業。
箒に乗って空を自由に舞い、人々に平和を贈る……そんな魔法使いに。

少なくとも、俺もその一人であつたはずだ。

はず、というのは、無論前世の幼少期思つた事なので、記憶がほとんどないからなのだが。

——だが、昔の記憶というのは案外思い出しやすい。

……まあ、俺だけかもしれないのだが。

「…にしても…。」

現在も、その魔法を目の当たりにしている訳だが…。

魔法で飛んでいるのは三角のトンガリハットを被った少女でもなければ、
レベテーション

白黒のいかにも、というような少女でも、スーパードレスに変身しちゃう魔法少女でも無い。

——中年のハゲたおっさんである。（けして口に言える物ではない）

「（ここのメイジは箒とか空飛ぶ絨毯とか使わねえよなあ…。）」

無論、若いメイジのほうが多いだろうが。

魔法使いときたら、『箒に乗って空を飛ぶ』が結構固定されていた身としては、

単身で宙を舞う姿を見ると、物足りなさが残るのだ。

まあ、おっさんには合わないが。

箒と魔法使いに対する考えは兎も角。

「おお、これですこれ。？始祖が残したマジックアイテム？…やっ
と見つけた…」

「それで、何を探すんですかい？」

「ええ、そうですぞ、ヴェン君。？破壊の杖？について何か記述があるかどうか…。」

「なるほど。」

名前は基本的には、ヴェン君と呼ばれている。

呼び捨てでも良かったのだが、そこは妥協してくれなかったようだ。俺？俺はコルベール先生と呼んでいる。

年上だからね。

コルベール先生が膨大な本棚の中の本から一冊の厚い本を取り出した。

緑の冊子で、金色の文字で題名が掘られている。

――…こん中にミサイルランチャーの項目なんてあるのだろうか。

「すぐにでも探しに掛かりたいが…、？破壊の杖？という名前はたしか学院長が付けたとか…」

ううむ…時間が何の道掛かりそうだ」

「探索なら自分でも良いですよ？」

「いや、君の案内が先だよ。それにここは他にも、立ち入り禁止の所があるからね」

立ち入り禁止？…それはそれで気になるな。

あれか？秘密の部屋か？三頭犬が守ってたりする？

というかこの世界にケルベロスとか居たりするんだろうか。

…と、冗談はこれぐらいにして…。

「立ち入り禁止…？例えば？」

「例えば…：宝物庫等は許可が学院長の許可が必要だったりするな」

「成程」

宝物庫か…：そういえば、あのミサイルランチャーも宝物庫から持ち出されたみたいじゃないか。

他には何があるんだろうか。…すごく気になるな。

これ以上、執拗に聞いても、有らぬ疑いを受けそうなので止めておく。

「（然し…：良くもまあ、ゴーレムと互角に戦えるような俺を警備員に選んだな…）」

気づけば、俺に宝物庫を狙われるかもしれない、というリスクもあった訳だ。

——単純に気楽な老人なのか…：それとも狸なのか。少なくともあの老人は只者じゃない事は確かだな。

「(ま、雇われた以上、相応の働きはさせていただくけどな)」

「…しかし…時間が惜しいな…仕方ない、…今から言う場所は立ち入り禁止です、そこにさえ入らないと約束して頂ければ、自由に見回ってもらってもかまわない。まずはさっき言ったように宝物庫、…それから…」

結局、研究意欲に負けた(大丈夫か?) コルベール先生に、禁止場所を教わり、別れた。

見かけ通り部屋は多いらしい。

——全部覚えられるわきやねええ。

長い廊下、階段を抜け、俺は再び外へ。

さんさんと降り注ぐ日光を肌に、中庭を歩く。

こういう天気の日、何処か木製のベンチに座って、昼寝へと洒落

込みたくなる。

とりあえず、初日である今日は門の当たりを中心に警備すれば良いようなので、父譲りの剣を背に突っ立ってみる。

「……。」

暇だ。

そのせいか、段々と眠くなってくる。

残念ながら、某中国と呼ばれる門番のように立ちながら寝る技術は俺にはない。

実にご教授願いたいものだ。…仕方ないので詮索も兼ねることにした。

トリスティン魔法学院の広さは…例えるなら…東京ドーム…1個半、ぐらいか？

まあ、魔法学院はここしかないらしいので、この広さも納得ではあるが。

なんでも、他の国からの留学生も居るらしい。

とりあえず、門の外に出る。

目の前に広がる光景は、草原と馬車等が通る道があるだけの、寂しい光景。

…結構、孤立してる場所あるんだな…。

やっぱり、警備が気になる俺だった。

「出てこい！」

俺はできるだけの小声で叫んだ。

…いまやってるのは、カードの中の物を元に戻す作業だ。

PON、と軽く弾むような音をたて、白い影がその場に現れる。

「ただいま参上！ 援護を求め——」

「おいばかやめろ」

「うぼほっ！」

決めゼリフも考えていたのかコイツは。

然も大声で叫ぶものだから、少々手荒だが、ヘッドロックして鳶の顔を押さえつける。

——こいつ、何処に口があるかわからねえもん。

「静かにしてくれ…、敵が現れたからお前を呼んだわけじゃないから安心してくれ。」

「むぐっ…」

とりあいず、コクリコクリ、と頷くのを確認して、拘束解除する。
俺はため息を付くと、長ったらしい現状説明始める。

「なるほど…：…此処の警備員に、でござるか。」

「ああ、でも周囲を見てくれ、コイツ（警備）をどう思う？」

「すごく…薄い（警備が）です…というか主人しかいないではござらんか！」

「ああ、案外大変な仕事を受け持ちちゃったらしい…。」

ふむう、と老人が考え込むような仕草で、思案している鳶。
鳶達ノーバディーは記憶というものがあるのだろうか。

少なくとも、機関メンバーにあることは確かではあるのだが…。

「なあ、鳶。」

「んむ、なんでござるか？」

「ノーバディーは…お前だって、今は心はあるけどよ…心を失った抜け殻…だったんだよな？」

自分でも今更ではあるが…というか前にも聞いた事があるんだけどな。

「そうでござる。…基本的には、残るのは俺の身、魂のみ。その残った身…これは記憶も含まれているでござる。」

「ただ…」

「ただ？」

何か思い出そうとしているように見える鳶。
だが…数秒後には頭を振り…。

「そういった記憶も、闇に飲まれるその日まで永久に生き続ける内に、忘れてしまった…。」

「…」

「でも、最近、主人と接する上で思い出した事がござってなあ…。ほんの少し、それも僅かな事ござるが…」

「か、片方は思い出したくないトラウマでござる…あばばば。」

「何か、思い出せたのか？…じゃあもう片方…。」

確かに、ノーバディは最終的には奪われた心と同様、闇に溶けてしまっただけ無い。

だが、キブレードによって、奪われた心と体を取り戻した時、元の姿に戻る事が出来た筈だ。

生ける屍。

…ノーバディというのは、悲しい存在。

鳶にトラウマを残した物とは何だろうか？…わからんな。

「誇り高く、だけでも他人の為に身を差し出せるような人間であった、という事でござる。」

拙者は今まで、有意義を持てなかったあろうなあ、心を手に入れてからというもの、記憶も無くて素直に喜べなかったのでござる。でも、僅かでも思い出した、…この事だけで満足でござる。

志を思い出せたのだから、その志を貫くだけでござるよ。」

一見、能天気で何も考えてなさそうな奴だけでも…

「そうか…。」

よっぽど、人間より、人間らしいじゃねーか。

『う、五月蠅いわよ！この馬鹿犬ツーーーー！』

キュピーン ドゴオオオオオオン！

…、ひでえタイミング。

「およよ、随分と派手にぶっぱなされたね」

「…ててて、あ、ヴェン。聞いてくれよ、ルイズのやつさ…」

なにやら、体の所々が焦げている。

——あの爆発を体に受けて良く生きてたな。マジで。
顰めっ面で、寮から出てきたサイト君に声を掛ける。

「…アイツが魔法を使えたらここまで苦労しねえのになあ…」

「…待ってくれ。魔法が使えない？」

可笑しいぞ？現にあの大爆発が起きてるじゃないか。
確か…あの規模の爆発を起こすには、爆炎のスペルだな。

因みに、爆炎というのは、火と土の合成魔法。火2つと土1つによるトライアングルスペル。

空気中の水蒸気を気体状の油に『鍊金』し、空気と攪拌して点火させる、という物だった筈だ。

まあ、実際は爆発事態で吹き飛ばすのではなく、酸素を奪う、という目的だが。

と、この質問に答えたのは別の声だった。

「ああ、あの娘っ子は魔法が使えねえ。どんなスペルを唱えても、

ドカン、だ。」

「?!（何処から声が?）」

「おう、兄ちゃんこっちだ。坊主が背負ってる剣だよ。」

「お、おお…剣が喋ってる…」

なんと、声の発生源はサイト君の背負っている錆びた剣からだった。
?（刀の根元）をカチカチ動かしているではないか。

剣の長さは150センチほど、デカいな。

「お、おう。俺の名前はヴェン。アンタは?」

「俺か?俺っちの名前はデルフリンガーだ。よろしくな、兄ちゃん」

「それで…、彼女は、ヴァリエール嬢は何のスペルを唱えてもあの爆発が起きるのか?」

「そうだ。詠唱の仕方もちの振り方も正しいんだがよ、どうも理由がわからねえ。」

ますます、可笑しいな。

実際、俺もメイジなので解る話なのだが、魔法は失敗して爆発する物ではない。

精神力だけ使用し、何も発生しないのだ。

母も確か、失敗した時はそうなると言っていた。

その事を一人十ひと振りに話すと、

「それじゃあ、ルイズが失敗する理由ってのは失敗とは関係ないのか？」

「娘っ子の魔法が失敗魔法じゃないとすると……あー、思い出せそうで思い出せねえ」

「ああ、そういう事かもな。……まあ飽く迄予想の範囲だけでも……」

では、一体なんだというのか。

：駄目だ、お世辞にも頭が良いとは言えない俺の頭じゃ答えはでそうにない。

——というか、あの爆発起こせるなら、下手な魔法より強くないか？

しかも、なんでもない場所から突然、だ。

あの爆発が正確に体の内部に定められたら、と思うだけでぞっとする。

「あー、サイト君、君も中々な苦勞人だな……」

「：今思っただが、？君？付はよしてくれよ。ヴェンのほうが年上だろ？」

「それもそーだな。んじゃ、遠慮なくサイトと呼ばせてもらおう。」

適当に会話を終わらせると、サイトが何やら洗濯でもするのか、置
を持って水の流れ出している場所へ歩いていく。

洗濯…、男に自分の下着を平気で洗わせるとは…もしかして男とし
て見られてないのか…。

否、もしかしたら人間とも見られてないかもしれないな、と俺は心
の中で合掌した。

願わくば、元同じ世界の住人として、彼に幸せが訪れるように、と。

「…デルフリンガー降ろしたほうが作業しやすくないか？」

「ルイズが、『私が買い与えた物なんだから、いつも身に付けてな
さいよ』って五月蠅いんだよ」

「…そうか。」

No. 12! 「学院内詮索(上)」 (後書き)

鳶との会話の辺りが失敗してそうな雰囲気。
まあ簡単に言えば、

「主人との交流で記憶(志)が僅かだけ戻った。それまでは、心があっても志が無い状態だから、素直に喜べなかった。でも、今は、志がある。昔の自分がそうしていたならば、今も同じようにするよ。」

てな感じです。

因みにトラウマというのは、…予想が付く方が居るでしょうか。
今は秘密ですw

所で。

「ノーバディーには一般武器は当たらない」と今小説の設定では、
というか原作でもそうなるんですが…。

ストラグルバトルの棒は設定通り、当たりませんでした。

(競技の為のおもちゃの武器)

何処にでもあるスケボー(スケートボード) 何故かノーバディーに
攻撃が入る。

(各所設置してある移動用の物)

これってどういう事でしょうか。

ストラグル棒「なんという理不尽」

20011. 11/21.

警備員となる平民は居るそうです。

——小説では、居ないことに。

さーせん、警備兵の皆様。

No. 13! 「魔法学院(下)」 (前書き)

下巻だぜ!

ストーリーの進展がないでござる。

こんなグダグダな小説ですが、これからも応援お願いします。

No. 13! 「魔法学院(下)」

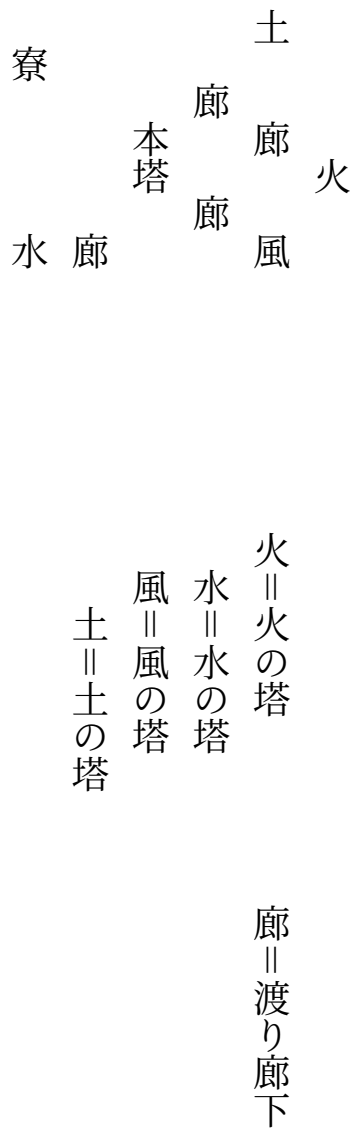
「つと…あれが食堂か？」

サイトと別れた俺は、現在、風の塔と水の塔の間：

アウストリの広場を抜け、本塔に隣接して作られている食堂を目指していた。

本道とは反対の方向には、城壁のそばには、使用人の宿舎…俺が寝る場所がある。

＊簡易学院概要図



食堂正面の扉は、何やら入れない感じがするので、他に扉が無いか探し回る。

と、大きな煙突がある所、厨房と思われる所へ入る為の扉を見つけた。

コンコン、とノックする。

「あいてまっせ、どうぞお入りくださいませ」

中から、中々声がごついおっさんの声が聞こえた。

——此処のコック長だったりするんだろうか。

平均身長の頭一つ分ぐらいの扉：なのであと少しで頭が付きそうな扉をくぐり抜ける。

「お邪魔します。：今日から配属となった者ですが、ここは？」

「なんだ、同じ平民の仲間か。ここは厨房だ。俺の名前はマルトー。兄ちゃんは？」

「ヴェン、と言います。今回は挨拶周りもかねて、学院内を見て回ってるところですよ。」

へえ、そうかい、と陽気に手を差し出してくるマルトーさん。

見た目より陽気そうだ、と思いつながら、握手する。

：さっきのサイト君も同様だが、背丈が俺は大分大きいらしい。

——といってもマルトーさんとは同じぐらいなんだけども。

強く握ってきたので、俺も対抗として力を入れて握り返す。

「おお、ヒョロっとしてる割には力は強いじゃねえか。」

「鍛えてますから。」

苦笑しながら、笑うマルトーさんに返す。

「気に入った！飯はここで食っていきな、上手いものを食わせてやるよ。」

「ありがとうございます。」

「なあに、これくらいはいいってことよ！それと兄ちゃん、堅苦しい話し方は無しだ」

「わかった。じゃあ、自分はこれで。まだ他にも回る所があるので。」

おうよ！と返事を背に、厨房を出る。

とっても良い人で安心した。他の使用人の人も接しやすければ助かるけど。

料理は…とても期待できる。なんせ、貴族に対して料理を作っているのだ、腕は保証されているようなもの。

そんな事に心を弾ませながら、今度は取り合いず、荷物を置きにへと使用人の宿舎へと向かう。

部屋は二階の一番奥の部屋。

入ってみると、案外狭くも無く、寝泊りには十分な部屋だ。クローゼットを開け、荷物を入れる。

「うし：後はぶらぶらするか…。」

警備はどうした、と聞かれそうだが、これはオスマン老人が、

『基本的にこの学院の護りはそこらの施設よりも上じゃ。なんせメイジの教師が多くおるからの。

なに、フーケのような盗賊がしょっちゅう現れる訳でもないしの。まあ、有事にはしっかり働いてもらうけどの。』

との事なので、大丈夫なのだろう。

思った以上に此処は硬いらしい。どうやら俺たちの心配は杞憂だったようだ。

——実際、俺が必要なのか？まあ有事の際があるが…。

なんとなく腑に落ちないが、それは置いといて。

「そういや今日は、夜に舞踏会やるんだっけか。

：俺が入れる所ではないのは目に見えているけど。」

そんな事を考えつつ、周りを見回す。

先程から気になっていたが、何故か生暖かい…そんな視線を感じる。広場のあちこちに日向ぼっこしている使い魔達を見回すが…違うな。

「（誰かに見られてる…？監視されているのか？）」

こりゃ、真面目にしないと、と見事に勘違いした俺は、

遠くから未だに視線を向ける、サマランダー（火トカゲ）に気付かなかった。

「と、でも思ったか？」

伊達に鍛えちゃいない。

俺はどうやってあのトカゲにバレずに接近するか思案する。

一応、歩は進めながら。

「（能力の無駄遣いだが…んー。光となって移動するんじゃないかな。No. 13じゃだめだ。

いっそ幻でも見せるか？…それが良いか。）」

【影歩む策士】

レキシコンを呼び出し、適当にページを捲る。

ページ事に、相手に見せられる幻術の詠唱、内容などが書かれている。

——見つけた。こいつでいいか。

【効果…対象に偽の自分を見せる。本物の姿は見えない】と【効果…五感を騙す】で良い。

「See the mistaken truth. (誤った真実を見よ)」

一つ目の詠唱はこれ。

英語の発音とか、中々難しいのだがある程度グダグダでも大丈夫らしい。

「What is felt is not felt. (感じる物を感じず)」

二つ目。

これで、感覚的のもので俺（本物）を捉える事は出来なくなっただろう。

動物的第六感には探知されるかもしれないが…多分、行ける。

幻影である俺は、そのまま広場を進んでいく。

——やはり、正体であろうそのトカゲが、器用に脇に生える草むらの草影に隠れながら追う。

「（でけえ…こりゃこういうのがダメな人には、絶句な光景だろうな）」

実は俺、自分で思えるぐらい、悪戯好きだ。

特に、冷静で表情を余り変えない人物とかが慌てふためく様子を見るのが、楽しい。

——今回は爬虫類だが。

五感は騙しているので、普通に歩いて近づく。
多分、今正面を横切っても気づかれない筈だ。

【かいげーん解幻】

呪文名といい、この解除するための言葉といい、突っ込みどころ満載だが：

「わっ！」

「！………」

OUT。

目をひん剥いて気絶してしまった。

——遣りすぎたか…。

前を歩いてたと思った人物が、いつの間にか後ろに居る。

ひっくり返して腹を触る。…こしょぐりである。

死んだふり…もとい、気絶したふりを見破るべく腹を触るのだが…。
反応がない。ただの気絶のようだ。

「持ち主にバレたら面倒だな…取り合いず放置して…と。」

逃げ出す。

貴族に絡まれるのはとことん面倒なのだ。

警備といっても、到底俺一人でカバー出来る範囲等知れている。ならば、『要請』を呼ぶ必要がある。

「…、ダスクか？…アサシンも悪くはないな。」

情報だけを手っ取り早く俺に流すだけならば、ダスクが良い。

戦闘能力のほうは、期待できるとも限らな無いが…相手がメイジで無ければ100%勝てるだろう。

あー、でも、武器事態に魔法を掛けてある物もあるらしいしな…。
ここは専門家…否、本種族の方に聞くしかないな。

「およ、またまた用でござるか？」

「ああ、さっきの警備の事だが…、援護にノーバディーの力が欲しくてな。」

「ふむ、ならば拙者にその任務、お任せ願えないだろうか？」

「鳶が？でもお前、一目に気づかれないように動くのは、若干無理あるんじゃない？」

実際、俺がダスクを選んだ理由としては、原作通りならば彼らが『変身』出来るだろうからだ。

記憶を失っていたロクサス（No. 13）の目を欺く為に、犬に化けたり、FFの登場キャラの…なんだっけ、ビビとかいう奴にも化けていた。

アサシンは地中に潜り込む事が出来る。

…原作では床にめり込んでいるだけだったが、…どうなのだろう。

まあ、名前からして隠れるのが得意そうだから…とかいう割りかし、適当な理由だ。

鳶は…サムライは基本的に戦闘のプロフェッショナルだ。隠密とかいうより、堂々をしてそうだが。

「ふっふっふっ。」

「？」

「甘いでござる。…拙者もノーバディーの一人。ならば…」

突如、言葉が切れると同時に、目の前の鳶が消えた（・・・）。

——なん…だと…？まさか、ステルス持ちか！

と、思ったら。

「瞬間移動も出来るでござる！」

全然違ったでござる。

…よく考えれば、ステルスなんて付けてみる、鳶最強伝説じゃないか。

いや、まてよ、瞬間移動でも大分怖い。

気づいたらザッパリ。ホラー意外の何ものでもねえ。

肝心の戦力としては…申し分無い。

武器の分野は違うが、俺の全ての装備に対して、対等どころか優位に立てるような奴だ。

勿論、俺の師匠である。戦い方は基本的に鳶から教わった。

——ただ、ノーバディーと人間では感覚的な部分が色々違って、あまり宛にならない所が多かったが。

隠密性としては、気配を察知、瞬間移動も出来るのだから余程の事で無い限り、セーフだろう。

「見回り範囲は一人で大丈夫か？」

「問題無いでござる。生憎と拙者は、疲れ知らずの体のもので」

まあ、そりゃノーバディーだからな。

「連絡はどう取る？やっぱダスクが居るんじゃないのか？」

「む、そうでござるな…。クリーパーを回してくれるのはどうでござるか？」

「…さつきから何度も言ってるが…大丈夫か…？アイツ、直ぐに生態系を荒しに入るぞ。」

というか、下手したら生徒の使い魔が食われるかもしれん。危険だ！」

「む、じゃあ連絡用ダスクを配備して頂けると助かるでござる…」

変装させて通達させれば良いだろう。

鳥あたりが懸命か…？…携帯があれば苦労しないんだが…。

こうして、俺と鳶、二人の共同警備作業が始まるのであった。

——— 舞踏会？

平民である俺が呼ばれる訳なからーが。

ただ…マルトーさんの飯は美味かったとだけ伝えておこう。

No. 13! 「魔法学院(下)」 (後書き)

雪「セコム、してますか？」

…13巻でございます。

さっそくの学院内詮索話なのに、話したのはおっさん二人。
ストーリー運び、頑張らないとな…。

相変わらず行き当たりばったりな今作ですが。

…オリ主人公原作知識がないと、行動しにくい…。

オリ主が持つてるなら、悲劇がどう起きるか分かっていて、と書きやすいんですけど。

さあて、どうやって悲劇を回避すべく動かすかな…。

というか、機関内で治療に応用できる能力なんてありましたっけ？

——ケアルガじゃ、病気治せねえよなあ。

なにか、能力を新たに覚醒させるか（おい

No. 14! 「おな~~~~り~~~~ッ!」 (前書き)

どうも、偶に血迷った巻を投稿する軽い雪です。

さて、相変わらず展開のノロいんですけど、よろろ。

No. 14! 「おな~~~~り~~~~ッ!」

「~~~~♪」

ブリックだが高んだか知らないが、舞踏会の終わった日から暫く。相変わらず、暇を持て余す警備の仕事の為、門に背を預けながら鼻歌を歌う。

とはいっても、早朝なのでそれなりに寒い。

愛用の黒いローブを着籠み、まだ薄暗い所、一人で突っ立っていた。他の範囲はダスク、鳶に任せている。

ここ最近に至って平和で、これが学院の日常なのか、と納得していた。

まあ、トラブルがない事は云いことだ。平和だね。

ただ――。

問題なのは、警備の仕事についての詳細だった。

主に俺は、日没までが担当という事になっていたのだが、

『あれ？日没後どうすんだべ？』

残念ながら、警備員は俺しかいない。

警備するというのはなら、実際は日没後のほうが余程重要だと思うのだが、

『夜は休んで良いぞ。メイジの先生方も見回りしているしの。』

なら良いか、ってんなわけねーだろ。

学院長、最近煙管をふかして座っている所意外見たことねえ。事実、仕事もサボっているのか、書類関係の紙が重なり、結構高くなっていた。

——第一印象は優しそうで良い爺さんだな、と思っていただけにこれは残念である。

んで、

『見せてもらおうか、先生方の夜の見回りの現状を！』

案外、他人の目を気にして、真面目に仕事に取り組んでいると思ったのだが。

——結果、期待していた俺が馬鹿だった、という現状である。

この十一日間、真面目に仕事をしていた教師と言えば、あのコルベール先生しか居なかったのだ。

その他は警備とも言えない適当にブラブラしているだけの教師、悪い教師は寝ているのか、見回りにすら姿を見せなかった。

流石に我が目を疑ったね！

おまいらフーケに最近盗まれたばっかだろうが。

なのに警戒レベルが上がるとおもいきや、まさかの低下である。

あれ、もしかしたら盗まれる前からこうだったのか？

ひょっとしたら、更に酷かったかもしれない。

先生、俺、どうしたらいいんでしょうか？

まあ、結局は鳶達に理由を説明し快く承諾してもらった。
：持つべきは頼りになる部下だな…。
少なくとも人間である俺は、早朝まで寝る事にした。

それから十一日間。
もう色々と慣れてしまった。残念ながら。

？主人、報告致します。？

「おう、どうだった？」

肩に止まったハトから報告を受ける。
ダスクの喋り方は一種のテレパシーだ。声も何も聞こえないものの、
言っている事は理解できる。
ただ、長文になると受け取りづらくなるが。

因みに、何故ハトかというと。

最初はカッコ良く、鷹が良かったのだが。

——なにやら貴族の風習として、鷹狩りがあるらしい。
という事で、ありふれた、気にも止められないようなハトになった
わけだ。

？今一時間を含め、現在まで特に異常は見られませんでした？

「了解。有難う、戻ってくれ。」

？承知しました。？

バサバサと羽ばたき空へ舞い上がっていく。

本塔の影に消えるのを見送ってから、欠伸、そしてまた仕事へ戻った。

「やけに賑やかになってきたな……」

門から庭を覗くと、なにやら数人の生徒が自分の使い魔と思われる生物達に話しかけていたりしている。何をしているのだろうと、思いつつ、それを眺める。

——見たところ、芸を教えているようだ。

使い魔であろう鳥、（ハルケギニア原産の物か？名前は解らない。）がエアループを決めていたり、動物ショーを見ているようで面白い。

俺も使い魔欲しいなあ…。

まあ、つばいのなら居るけどな。ノーバディー達みたいな。

どちらかといえば、可愛い生き物が欲しい。
ノーバディー達はシャープなデザインなので、可愛いより寧ろカッコイイだ。

得意な系統によって召喚される生物は変わるらしいが…其処は余り調べてないし、教えてもらってないので
曖昧だ。…ああ、風竜もいいな…、アイツは可愛かったし（主に鳴き声と仕草）。

「あら、やっぱりここに居たのね、平民さん。」

「お！お早う。キュルケ嬢。」

「あら、そんな堅い呼び方は止して？キュルケと呼んで頂戴。」

「ん、そうか。んじゃ俺の事だってヴェンと呼んでくれ。…所で、俺に何か用か？」

挨拶を終え、キュルケに聞く。

…目線をずらしちゃダメだ…特に下方向。

仕方無いので、口笛を吹きながら、更に下、地面でも睨んでいようかと思ったら。

「…なあキュルケ。ソイツあ、お前の使い魔か？」

「あら、そうよ。貴方があの時脅かしたサマランダーよ。」

「……」

何となく、キュルケがジト目になっているのに気付き、口笛を吹いて誤魔化する。

——そうか…俺が脅かしたのはキュルケのサマランダーだったのか！

目線が痛いでござる。

「…まあ、あれは私に非があったような物だし、別に気にしてないわ。」

「…そうか。」

「まさか、サマランダーの視線に気づいて怖がる所か、逆に驚かせに来るなんて、度肝抜かれちゃったわ」

「H A H A H A。…そういうのが好きな達だね。いやはや、ごめんごめん」

微笑んで頭を掻く。…全く恥ずかしい限りである。

——と、何故かキュルケが驚いた顔を。

「どうした？」

「い、いや、貴方って、笑うとガラリと雰囲気変わるのね。って」

「そうか？…んー、それって悪くなるって事か？なら困るな…」

「いやそうじゃないのよ！…んー、なんていうか、お日様が照ったみたいなの？」

それっていい事なんだろうか。

取り合えず、悪いことではないらしい。ほっとした。

頬を赤く染めている理由が解らないが…、色っぽいな。

——心の中でサムズアップした俺だった。

「悪いな、サマランダー…じゃなくて、名前とかあるのか？」

「フレイムっていうの。良い名前でしょ？」

「ああ、それらしい名前だな。…悪いな、この前は。ちょっと脅かすだけだったんだが…。」

「キュルル…」

自慢げに言うキュルケに返し、フレイムの頭を撫でる。

…スベスベしてるなー、爬虫類系独特の。

——でもまあ、こんな使い魔でも悪くないな。あー、にしても癖になるなコレ。

「ふふ、触りごごちが良いんでしょう？毎日手入れしてあげてるもの。」

「ああ、暇があれば暫く撫でていたくなる程だな…。というか、尻尾危くないか？」

先程から、目の前を右へ左へとぷらんぷらん動く尻尾。

あれだ、ポケ○ンのヒトカゲの尻尾みたいだ。…あーつまりは火が付いている。

学院の庭は草原、おまけに寮や本道など、中の作りは殆どが木で出ている。

——何か秘密でもあるのか？

「任意で熱を加減出来るのよ。それに燃え移らないわ。」

「へえ…、それは便利だな。」

「それで…用なのだけど、もう話しちゃったわ。」

「そうかぁ。所で、質問したいことがあるんだが、聞いていいか？」

「何かしら？」

フレイムを右手で撫でながら、左手の親指を経て、例の集団を指さす。

まあ、何をしているのかは解るが、何を目的として、が聞きたい。

「貴方…警備兵…よね？」

「ああ、そうだが？」

「ああ、そうだがって…まあいいわ。貴方は今日、アンリエッタ王女が来るのは知ってるわよね？」

「えっ」

いやそんな事聞いてないぞ。

王女って…というかそれが何で集団使い魔調教軍団結成の理由になるんだ？

なんか行事でもあるのだろうか。

「はあ…大丈夫なの？今日は？使い魔評論会？があるのよ。」

「使い魔評論会…？あー…なるほどね。」

王女と評論会。

要するに、使い魔評論会を見に来るのね。そのお姫様が。

アンリエッタ王女と言えば、トリスティンの花だとか言われていて、大層綺麗なんだとか。

——どの世界でもお姫様っていうーのは綺麗なのな。

「んじゃあ…キュルケも何かすんのか？」

「勿論！やるからには一番を目指すわよ！ね、フレイム。」

「きゅる！」

「はは、そうか。頑張れよ？」

「ええ。…でも、タバサには負けちゃうかもしれないわね…」

なんだ、行成弱気かよ、と言いそうになったが。

…ああ、あの風竜が使い魔だったな…、そりゃ大変だ…。

全長6メートルで彼処まで綺麗な竜なのだ。確かに不利だな。

「と、…噂をすれば影…だっけか」

「あら、タバサ、貴方も使い魔の訓練かしら？」

「…（コクリ）」

すたすたと、ゆっくりこちらへ歩いてくるタバサ嬢の姿を確認して
続いてキュルケも気づいて声を掛ける。

そして、タバサの後ろから四足歩行で風竜が歩いてくる。

「やっぱりいつ見ても綺麗ね…うー、私も負けないわ」

「なあ、風竜であってる…よな。名前聞いてもいいか？」

「…シルフィード」

「きゅい！」

小さく、呟くような声だったので、聞き逃しそうになったが…シルフィードか。良いセンスだ。

「また会ったな、シルフィード。」

「きゅい！」

「あはは、もう…ビショビショじゃねーか…」

声を掛けて、頭を撫でてやる。

すると、ベロリ、と顔をそのデカイ舌で舐められた。

——い、犬なんかとレベルがちげえ…。

暫く、このやり取りが続いた。

キュルケが惚けて、タバサ嬢が先程のキュルケのように驚いていたが…

そんなに、笑顔が良いのだろうか？

でもまあ、NO.13の数少ない笑顔って見てるこちらが微笑まし

くなるよな。

『アンリエッタ王女陛下のおな〜〜りい〜〜!』

昼。

野菜スープ（うますぎる!）を完食した俺は、マルトーの親父と共に
お姫様歓迎式にギャラリーとして参加していた。

トリステイン学院生徒全員が集合しているというだけあって、実に
多くの生徒で溢れかえっている。

『きゃー！本物のアンリエッタ様よ!』

「へえ…、確かに美女と言われるだけはあるなー。」

「よし満足だ。…んじゃヴェン、俺は女王陛下の為に召し物を作
らなきゃなんから」

「ああ、分かった。俺はもう少し見てるよ。」

噂されるだけはあるという物だった。

馬車の台の上に立って手を振っている女性は、可憐で、清さをもった少女。

「私のほうが綺麗よね、ねえ、ヴェン？」

「…うおっ、いつの間に…、まあ綺麗かどうかで言えば、どちらとも。だな。」

まあ、キュルケと女王陛下はジャンルが違う美しさだな」

「じゃんる？」

「まあ、綺麗にも色々あるって事だ。キュルケは綺麗だけど、女王陛下はまた別の綺麗さがあるな。」

「ふふ、ありがとう」

「どういたしましてー。」

オスマン学院長と姫が話しているのを見終えてから、ひと足先に撤退する事にする。…にしてもキュルケが頬を染めてばっかなんだが…。

評論会については良い勝負だった。

僅差、と思いたい（点数は付けないので解らない）がタバサが最終的には勝利。

キュルケが悔しそうにしていたが、俺共にタバサを祝ってやった。

シルフィードがとても嬉しそうにしていた。

——あー、使い魔欲しい。

No. 14! 「おな~~~~り~~~~ッ!」 (後書き)

雪「シルフィードよりも先にキュルケにフラグ立てちまったZE!」

というわけで、十四巻。

戦闘が書けるのはどうやら次巻になりそうです。

えっ、醜い戦闘描写を見たい訳ないだろだって？

——ご容赦くださいませ。

といっても、現段階じゃノーバディ達の活躍の場は戦闘しかないでござる。

所で、気になる所が一つ。

BbsFMに出てくる「謎の男」ですが、機関メンバーと何か関連があるのでしょうか？ 気になる俺です。

使い魔は何にするか、アンケートでも取りたいと思います。

・要らないだろjk

・作者の好きで良いぞ、ばっちこーい！

どちらかをお願いします。

感想は作者にとってのオルナミンCであり、マッチ（炭酸飲料）で

す。

No. 15! 「姫殿下の頼み事」 (前書き)

待たせたな!

御免、気分が乗らないのか出発出来ませんでした。
気づいたら? 惚れ葉編? も飛ばしているという。

——まあ後から? 惚れ葉編? は入れたいと思います。

No. 15! 「姫殿下の頼み事」

「きゃあああああああ!？」

「うゝらあゝめしやあゝ」

現在時刻、日も沈んだ夜。

今夜も一定時間まで警備をして、終える予定だったのだが。

？不法侵入者発見、学院内の生徒かもしれませんが、ご確認を。？

とのダスクからのメッセージにより、今現在その対象を追跡…という脅かしているだけだが、…をしている。にしてもリアクションいいなこの人。…というか声からして女の子か。

——罪悪感もあるが、今更なので続行している。

といっても、俺が普通に物陰からわっ、と飛び出しても、こんなに良いリアクションはしてくれないだろう。

だが——、もし、？両腕と両手？だけが追いかけてきたら？

現在能力はNo. 2の身体移動（仮名）だ。

「きゃあああああああ! 助けてえええええ!」

「ああ、ああ」

と、なるわけである。

因みに、今上げている声は某神隠しの顔なし君の声である。

——そろそろ止めるか、これ以上やったら俺がお叱りを受けるかもしれない。

ふらふらになっている目の前の人物を見て、俺はそう思わざる終えなかった。

「はあ…はあ…、ひっ!」

「あー、もう大丈夫だから。…警備員です」

「あ…、そうですか。…はあ…」

散々驚かせた少女に職名を名乗って話しかける。

…と、現れた俺に気づいた少女がビクツとなる。

只、警備員という職名を聞いて、どうやら少女は落ち着いたようだ。

うーん、肝が座ってるな。…否、ここの学院の生徒にしては、だけでも。

こんなに早く落ち着けるもんかね？俺は無理だけど。

「失礼ですが、お名前をお聞きしても？」

「は、はい。」

少女が慌ててフードを脱ぐと。

——…俺、何処かで死亡フラグでも建てたかなあ…。

なんとまあ、散々驚かせていたのは、昼間に見たあのアンリエッタ王女本人だったのだ。

予想の右上に行く、やばいぞ。このままだと下手すりゃ首ちょんぱじゃね？

やべえ、どうしよう。

「あ、アンリエッタ姫殿下でしたか…！」

「止してくださいませ、私に非があるんですから！」

慌てて、片膝付いて頭を下げる。

DOGEZAという選択肢もあったが、ハルケギニアの人物に伝えるかどうか…。

ともあれ、何とか一命は取り留めた。

過去の自分に「てめえ、何処で死亡フラグ建てたんだこの野郎」とも言いたいが、

「分かりました。…それで、お尋ねしますが、姫殿下は夜中に何用で…？」

「そう堅くならずにお願いします。…実は、」

少し躊躇う素振りを見せる姫殿下。

——秘密のご用でしたら、喋らなくても結構ですが、と言おうとしたが。

「この学院内に居る、ヴァリエール嬢に会いたいのです」

「ヴァリエール嬢に…、ですか？なら、ご案内致しましょうか？」

「いえ、場所は解って居ます…あつ、でも、護衛、をお願い出来ませんでしょうか？」

「あ、はい。では、付いてきてください。フードは付けて貰って構いませんよ。」

何から護衛するのだろうか、と一瞬疑問符が浮かんだが、姫殿下の願いを断るのは失礼だと思い、承諾した俺であった。

…あれじゃね、俺の両手だろうな。
だが自重はしない。驚かせる事が趣味でも、そして今現在、特技と
なりつつあるのだ。

「うわあっ、ちよっやめろっ！ルイズ！」

「うるさいうるさい！」

「たはは…喧嘩してやがる…」

「どうでしょうか…、」

部屋の前に着くなり、ルイズ嬢とサイトの喧嘩と思われる声が聞こえてきた。

耳を澄ませてみれば、ビュッビュッ！という風を切る音が聞こえる。

——パシンっ！

「いてっえ！」

「おいおい冗談だろ……」

まさかの使い魔調教……？否、評論会はもう終わってるし……、ハッ、まさかそういう趣味（SM）してるのか、あの二人。

俺が二人への見方を変えかけている所。

コンコン。

「失礼します……」

ガチャリ

「え、ちょ、開けちゃうの？姫殿下?!」

扉を開くと、そこには予想通りというか、そうであって欲しくない光景があった。

乗馬用の鞭と思われる物を手にしているルイズ嬢。
そしてそれから逃げる体制のサイト

——いや、セーフでした。サイト君は一般です。

「姫様!？」

「それに…ヴェン？」

俺はオマケかいな、こらひでえ。

姫殿下はルイズに話しかけている、俺は取り合いずサイトに話しかける事にした。

「相変わらず賑やかなのね。」

「姫様、何故このような時間に？」

「おいおい、また何かやらかしたのか？」

「何時もの事だけだな…うう、ヒリヒリする」

何時もの事って…、まああの爆発魔法に比べれば幾分もマシだな。
ギャグ補正なのか知らないが、あれを至近距離で放たれて生きてられる気がしねえ。

——もうあれ一つの「成功」魔法でいいんじゃない？

二つ名が「爆発」のルイズになりそうだが。テロリストくせえ

「私は、ゲルマニアに嫁ぐ事になりました。」

「な、なんですって?! 寄りにもよってあの野蛮な成り上がりのような国に?!」

「仕方ない事なのです…小国であるトリステインを守る為にはゲルマニアとの強い協定が必要なのです」

「そ、それでも…!」

「私は王女です。…国の為にこの身を捧げる事に、躊躇いは無いわ」

「なあ、ヴェン。よく言う、? 政略結婚? って奴なのか?」

「ああ、そうだろうな。…にしても? 野蛮な成り上がり?... ねえ。」

ゲルマニアについての話は色々聞いている。

国土面積はトリステインの10倍。…姫殿下がトリステインの事を「小国」といったのもうなずける。

因みにトリステインの国土面積は約7万km²。

社会風習や政治制度も他国とは一線を画しており、メイジではない平民でも金があれば領地を買い取って貴族になることができる。

この事がどうやら「野蛮」と言われている理由のようだ。

まあ、トリステインの貴族はお堅いが。

確か、キュルケのツエルプストー家もゲルマニア貴族だったはず。性格は彼女のような似ている人物が多いと聞くし、俺的には良いところなんじゃね？と思うが。

「でも…その前に、やっておかなければならない事が有るのです…。

」

それから姫殿下は淡々と話し始めた。

ただ…、そのお願いと言える物が思わず険しい顔になってしまう物だった。

簡単に言えば、空に浮かぶ島とされる？アルビオン？の王子、ウェールズっていう人物に

姫殿下は？手紙？を送ったらしい。もし、それが他の者などに見つかるような事があれば、

今回のゲルマニアに嫁ぐ、という話は無しになってしまう。

——その手紙を回収してきて貰いたいのです。

普通なら、遠出のお使い程度で済むかもしれないが…

現在、アルビオン王国では内戦が起きていると聞いている。

実際詳しいことは解らない。とりあえず、行くのは戦地に突っ込むような物、だ。

「部外者が口を挟むのも何ですが…流石に危険だと思われます。アルビオンは現在内戦が起きているそうではないですか」

「分かっています…：私は酷い女です…戦地で危険が伴うと分かっているながら、友人である貴方を行かせるなんて…、でも…貴方しか頼れる人が居なくて」

だからって友人に頼むのわよお…なあ、ルイズ嬢
と思いながら、その助けを求められた当本人を見ると。

「姫様直々のお願いなんて光栄ですわ！」

何故か目を輝かせて姫殿下の手を握っていた。

——答えはYesか。

怒りや疑問を通り越して呆れてしまった。

でも、なんとなく、この少女が断る所は想像が付かなかった。

フーケのゴーレムとの戦いでも、逃げる所か、ゴーレムを睨みつけていたのだ

…只者じゃないな。

「ならば、俺も手伝わせてくれ」

「…貴方も…？協力してくれるというのですか？」

「アンタ、警備員の仕事はどうするのよ。」

「どうせ居ようがいまいが関係無いような状態だよ」

まあ、警備補助員が居るからな。

この学院がしょっちゅう襲われているなら、もう少し考えるが、見回りのダラケっぷりを見てる限り、大丈夫だろう。

随分物騒な観光になってしまうが、アルビオン：空飛ぶ王国を見てみたい。

あれだぞ、リアルラピュータだぞ。

——バルスって叫んだらどうなるんだろ？　というかそもそもどうやって浮いてるんだ？

思考がズレた。

兎に角、自惚れではないが、俺が同伴すれば守れる筈だ。

ルート等を内密に選択すれば安全に進める可能性も無いわけではない。

ならば——。

「出発は何時の予定？」

「え、あ、明日の朝にはたって貰います。

アルビオンが接近する日に間に合う事が出来るでしょうから」

「なら、自分は明日に備えて準備でも。…んじゃ御休みなさいませ」

そう言うと、俺は返事も聞かずに部屋を出る。
若干気分が悪い。

自分でも気付かなかったが、多分俺は怒ってたのだろう。

No. 15! 「姫殿下の頼み事」 (後書き)

雪「散々待たせておいて何この駄文…次巻からがんばる!」

というわけで15話。

どうも作者は、一度に三人以上のセリフを書き分けられません。
うん。苦手。

次回は漸く港へと出発できそうです。

ノーバディーも創造する予定。というか、まだ三種類しか出てないのね。

まあ、頑張らせていただきます!

N o. 1 6! 「港町への道中」 (前書き)

はあはあ、やっと出来たぜ…。

No. 16! 「港町への道中」

部屋を出て、元々あと少しで警備を終える予定だったので最後に一通り見回ってから：っと。

【魔弾の射手】

最早諦めた事ではあるが、ニート教師を発見したので。

：っと、モードは『麻痺』そして、『狙撃』。

そして、カチャカチャっと出てきたガンアローを合体させ、ライフルにする。

屈んで、銃身後部を脇に挟んで、目を細めながらターゲットサイトを覗く。

幸い、ハルケギニアの夜は、二つの月のおかげで良く見える。

サイトの中心がニートと重なり：、引き金を引いた。

タアンッ！タアンッ！

「眠れっ！」

ビャン！

「Oh！」

「YES！（ガッツポーズ）」

——どう考えても八つ当たりです、有難う御座いました。

「ん、にしても……戦地か……」

戦場、戦地。恐らく、今まで俺が目にした凡ゆる（あらゆる）光景より、酷い物だろう。

おまけに、此処は魔法世界。規模も違うのだろう。

そうなってくると、身を守る為の物が必要だ。

特にヴェリエール嬢。…彼女は攻撃面はあれでいいものの（爆破魔法）、防御方法が全くと言って良い程ない。サイトが居ても、守れる範囲は限られてくる。

「……んー、盾何かを持たせる訳にもいかねーし……」

あのお嬢様が持てる盾なんて、早々ない筈だ。…使いやすさを重視した小型の盾もこの世界に無いことは無いんだが、生憎と俺は持ち合わせていない。

——それにしても、と。ヴェンは思う。

全くと言っていいほど、彼女は戦地へ行くことに抵抗を示さなかった。

『貴族は魔法が使えるから貴族なんじゃ無い！敵に背を向けて逃げないのが貴族よ！』

今でも思い出せる、その言葉。

恐らく、あの時（フーケの時）と変わらないのだろう。

戦い、任務は誇りを持ってやり抜く。

正直、俺には理解出来るか怪しい所だった。：誇りより命のほうが大事に決まっている。

死んだらそれで終わり。後悔する事も出来ずに、だ。

だが：彼女は強いのだろう。

キングダムハーツの世界で言えば、彼女はきっと『強い光の心』の持ち主に違いない。

なら：、俺は敵に背を向けてでも、彼女を：いや、彼女達を守らなければならぬ。いや、守りたいのかな

幸い、寿命ならいくらでもある。なに、観光がちょっと遅れるだけだ。

「つたく…これは追加給料を求めないと駄目だな…」

ともあれ、冗談抜きで頑張らなければ行けないのは目に見えている。
明日を万全に迎える為、俺はベットに潜り込むのだった。

——ヴェンが気づいていないだけではあるが、彼女はただ単純に無
謀なだけである。

はてさて、それに気づかされるのは何時頃か。

翌日。

幸いこの日は雨も降らず多分、昼頃にはポカポカお天気になってい
るだろう。

どちらかと言えば、そちらの方が大助かり。

「（最初も目的地点は…、ラ・シェロールだっけか。）」

港街である、ラ・シェロール。その港街は、比較的高い山にある。――お気づきであるだろうが、すごく矛盾している。

港と言えば、海にあるもの。だが、まったく正反対の山にあるというのだ。流石にこれには頭を捻らずには居られなかった。つまりどういう事だってばよ。

答えは単純。

此処ハルケギニアでは、「フネ」と言うのが存在する。

ええ、「船」じゃありませんとも、「フネ」ですわ。理由？知るわけない。

船が移動するのは、なんとお空。現代で言う飛行機である。

：科学が発展しないのもうなずけると言う物。

動力は風石とか言うモンだそうが、魔法石と覚えて頂ければそれで良い。俺もわからん。

とりあえず、装備を付け、服を着替え何時も通りの黒いローブを着
籠み、外へ出る。

出来れば朝飯を食っていききたいのだが、恐らくまだ作ってくれていないだろう。

――という事は昼まで我慢か。こればかりはラ・シェロールの料理に期待するしかない。

あれ、初の街らしい街での外食じゃね？なんか嬉しい。

「ヴェ、ヴェルダンテエエエエ！」

——今日は良くない日になりそうだ。まる。

俺が門を目の前にしたとき、恐るべき光景を目にした。

体長がこの生徒並みのデカさのモグラ（ジャイアントモール）が飛んできたのだ。

洒落にならん（＼（＾Ｏ＾）／）

何とか下敷きになるのは避ける事が出来た。何故か達成感がする。些細だな。

っと、そうではない。朝っぱらから、こんな悪趣味な事をする奴は誰だ！

「ああ、ヴェルダンテ！僕のヴェルダンテに攻撃したのは誰だ！」

何やらシャツの胸元を開いた、いかにもって感じの貴族のおぼっちゃまがモグラへ走り寄る。

被害者か…となると、このモグラ、この少年の使い魔か。

何か、特別恨みは無いが、ざまあ。

初対面に、何言ってるんだと聞かれそうだが、一目見て何故か言いたくなった。

間もなく、犯人と思われる人物が何かに乗って降りてきた。

——おお：ありやグリフォンだな。うほ、顔イケメン。

ただ、首から腹に掛かってるエプロン（？）、てめえは許さねえ。
正直、あれがなければ「かあつくういいいい！惚れちゃいそうだぜ、
グリフォン！」だけだな。

そして、グリフォンが鮮やかに着地し、背に乗っていた人物がサツ、
と飛び降りる。

降りてきたのは、簡単に容姿を説明するなら騎士ナイトそのものだったと
言おう。

——三銃士とかに出てきそうだな。あれ

「済まないね、流石に自分の許嫁が襲われているのを止めない訳には
行かないのでね」

「なっ：あれはグリフォン隊の！」

「い、許嫁エ！？」

「わ、ワルド様！」

反応はそれぞれ。俺は今一状況が掴めない。

：どうやら、キザ少年の使い魔を吹っ飛ばして、俺に悪い光景を見
せたのはこの男らしい。

まあ、正直モグラの一件は差ほど気にしちゃいない。

面白い光景でもあったからな。『巨大モグラ、空を舞う』ってか、
流石ファンタジー。

「ああ、僕のルイズ。…相変わらず君は軽いな、羽のようだ。」
「わ、ワルド様…」

成程、騎士様も負けない程キザでございますね。
あのセリフ、俺には到底言えないな。…自分が言う所を想像して、
無駄に悶えた。

「よう、サイト。」

「お、ああ。ヴェンか。…まったくルイズの奴…」

「何だ何だ？妬いてるのか？」

「そ、そんなんじゃないよ！」

まったく素直じゃないな。そんな面白く無さそうな顔であの二人をみてたら、そりゃ気づかない筈ないだろ。

だが…恐らく此処に居る俺の聞いていない、参加者二名についての情報を取り合いず聞く。

「なあ、あのおっさんとあの坊っちゃん、誰だ？」

「ん、あのキザ野郎はギーシュって名前。彼奴、昨日俺達の会話を盗み聞きしてやがったんだ。」

んで、彼奴も『姫様の為ならっ!』とか言って付いてくる事になったんだ。」

「なんじゃそりゃ…、んで片方のお前のご主人をお姫様抱っこしてるおっさんは?」

「それは知らねえ。…そう言えば、姫様が護衛の者を一人付けるって言ってたな。」

はーん。

片方は勇気と無謀を履き間違えた奴、片方は詳細不明の騎士様ってとこね。

だがあえて言おう、ギーシュとやら、お前は要らないと。

取り合いず、いつまでもイチャイチャしてもらっているのも何なので、声を掛ける事に。

「失礼、貴方様は?」

「僕の名前はジャン・ジャック・ワルド。『グリフォン隊』の隊長を務めてる。

今回は姫様に直々にお問い合わせしたんだ。君たちの護衛をさせてくれるってね。…そういう君は?」

「此処トリステイン魔法学院で警備兵を務めさせて貰っています。ヴェンと言います」

「ああ、宜しく頼むよ。」

うん、丁寧に戻してくれたな。良い奴っぽいな。
その『グリフォン隊』がどれほど強いのかは解らないが、隊長を務めている程の男だ。

戦力としては鍛錬を詰んだとは言え、実戦経験豊富なワルド君のほうが強いだろう。

ん？何で君って呼ぶかって？

良く考えてみろ、前世と年齢合わせて……止めた。今は今だよな！
合計年齢が中年な事に気づいて、現実逃避する俺。

Side 三人称

さて、場所も変わりヴェンと、今回『手紙回収隊』である総勢5人のメンバーは、
ラ・シエロールへ向け、パツカラパツカラと馬に乗って道を進んで行く。

「…天気良いなあ…眠くなるぜこんちくしょー」

ヴェンの予測通り、出発して暫くで天気が晴れた。美しい青空である。

この世界は科学が進化していないメリットである『NO、空気汚染』

がある。だから『空気うめえ』のだ。

勿論、それは夜でも同じで大きな月のせいで若干見づらいが、それでも夜空満天の星空は素晴らしい光景だ。

「ルイズの奴、『ああ、ワールド様』なんて言いやがって：」

こちらは絶賛不機嫌中。

目線の先には、グリフォンに乗った騎士とご主人様^{ルイズ}。何故だか面白くない。

：これが嫉妬心であると気づかないのは、恋を知らない彼には仕方ない事かもしれない。

かといって、ヴェンもヴェンで前世を含め、全くと言っていい程恋愛関係とは縁が無い。

彼女の出来た友人を冷やかしながらも応援してやる側。

それどころか、『彼女が出来ても幸せに出来る訳ないから』と、モテない事を喜ぶ事は無いが、まあ、楽で良いなあという感じだったようで。ボッチで無ければそれで良いらしい。

『なんだ坊主。お前さん、娘っ子を取られて不満みたいだな？』

「だからあ、そうじゃねーって」

「お、デルフか。」

『よお、兄ちゃん。また会ったな』

「だなー」

からかって同じ返答しか来ないので、デルフは自分に掛けられた声に反応する。

この剣、実は寂しやがり屋で相手にされないまま放置されるとイジけるという可愛い……くない性格だ。

彼が美少女の声だとかだったら、需要があるのだろうが、声は正に気軽に話しかけてくるおっさんの声。

でもまあ、ヴェンはこの剣の事が中々気に入っている様子である。

『剣が喋れたら寂しくないな』『心とかどーなってんだ?』

興味心身で時偶サイトから借りて二人（正確には一人と一振り）で、語り合ったりしているようだ。

四桁レベルという凄まじい程長生きしているこの剣は、大半の記憶を忘却してしまっているが、
たまに聞ける昔話というのは、中々面白い。それが気に入っている理由でもある。

「所で、聞くが……サイトは何か武術でも習ってたか？」

「ん? いや、無いけど?」

彼がこう質問したのは理由がある。

使い魔兼、ボディガードでもあるサイトが、唯の高校生が何故剣を振るえるのだろうか。

デルフの丈は背に背負わなければいけない程：160ぐらいか？

無論、重量も比例して重くなるのだが……鍛えたりしないと持てないような重さだった。

「何でそんな事を聞くんだった？」

「いや、デルフを振るうのにやけに？慣れてる？な、と思ってさ。」

「別に慣れては 아닙니다よ？…実際、コイツを振るったのはまだ二回しか無いですし」

『なあに、坊主が俺っちを振えるのは坊主が？使い手？だからさ。』

「使い手…？それってどういう事だ？」

「それがよ、俺もデルフに聞くんだった。〈使い手って何の事だ〉ってな。でも——」

『仕方ねえだろう、何も何千年前の話だ。忘れちまう』

サイトの言葉を引き継いで、デルフがカチャカチャ笑いながら言う。何故笑っているのかわかるかという、何となく、声だ。声で解る。

ヴェンは「何だ、お決まりのド忘れか…」と肩を落とす。

それから、何気なく隣に目移すと。

「ご機嫌よう、ミスタ・グラモン。」

「ああ、…って、急に何だねそれにその口調…」

「それとも二股男と呼んだほうがいいのでしょうか？」

「！君っ、初対面に加え貴族に対して無礼じゃないか？！それにアレは二股じゃなくて…」

どういう訳か、ギーシュに対しては喧嘩腰なヴェンであった。

早速、来て欲しくも無い危機が訪れたのは、目的地に更に近づいた時だった。

山へ登る道で、崖と崖に挟まれた道。

とつくに闇夜になり、視界も良くない。

ギーシュとサイト、加えてデルフと雑談していたその時。

視界の真っ直ぐ……何かが……いや、聞き慣れている音が聞こえて、

「不味いっ！回避しろ！弓矢だ！」

「なんだって?!」

シュッ！

音を経て、馬と馬の間を弓矢が通り過ぎた。

：何者かが、こちらを狙っている。暴れる馬から飛び降りると、しやがんで弓矢の飛んできた方向を見る。

暗くて今一見えないが……恐らく、盗賊などの類だろう。

ザッ！

「うおっ！」

今度は上から。

どうやら崖の上にも居るらしい、これは益々危険だ。

「盗賊のようだな、僕が前を何とかするから、何とか耐えてくれ」

「ワルド様！私も戦います！」

「ルイズ、気をつけろ！」

「わかってるわよ！」

ふむ、正面突破するしか方法は無いな。…通常なら。

崖の下からじゃ上は狙えないだろうし、明らかに不利だ。

——俺しか上は狙えないな、と改めて思いつつ。

「【旋風の六槍】」

そして灰色の茨と共に、腕に槍が一本現れる。

実際、非殺傷戦では風で相手を叩きつけて気絶させれば良いだけなので、槍は余り使わない。

フワリと風が起き、地面を両足が離れる。

そして、そのまま高度を上げて崖の上に降り立つ事が出来た。
——うん、今日は絶好調だな。っと。

「ちっ、メイジがあと一人居たか！」

「殺しても構わねえな？ 目的は金だな」

…上だけで4人か…これは思った以上に少ない。

嬉しい現状だが、思案しているうちに、一人の盗賊が弓矢を弓に番え、放ってきた。

次は咄嗟によける事はしない。何故なら

ヒョウフツ！…パタッ

「なっ…、弓矢が効かねえ?!」

オートスキル
自動能力の「風壁」があるからな。

能力は簡単、接近した対象を風で押し返したり、今みたいな弓矢に
対しては勢いを消す、といった感じだ。

本来俺を射抜く筈であったであろう弓矢は、風壁に勢いを消され、
虚しく地面に落下した。

「うらあっ！死ねえ！」

弓では無い、片方のロングソードを持った盗賊が俺に切り掛つてきた。

「はっはぁ、無駄だぜえ！」

「ぐあっ！」

再び見えない壁に阻まれて、盗賊が弾き飛ばされる。

——うーん、某学園都市第一位になった気分だな。…というか、危機感ないな俺。

お相手さんと言えば「接近したら危ないぞ。」「…じゃあどうするんだよ」

などと小声で喋っている。

んじゃま、こちらから……他の救援にも行かなければならない、一発で決める。

「トルネドッ！」

トルネードでは無い、トルネドである。

まあ、どの道起きる現象は同じ。巨大な竜巻が不自然な、有り得ないスピードで現れ、

「「「うあああああああ！！！！」」」」

盗賊四人を派手に巻き込む。

全長30メートルはある竜巻が、盗賊四人を巻き上げ、あつという間に4人は落ちたら即死な高さまで上がった。高所恐怖症な人間が受けてみる、泡を吹いて気絶するな、コレ。

しかし、このままでは叩きつければ先程も言った通り、スプラッタ間違いなし。

まだ叫び声も聞こえるし、此処は徐々にトルネドの勢いを削いで…、

バタッ、バタッ、バタッ、バタッ。

「「「……………」」」」

「きっかり四人、いっちょ上がりだな。さてと…ん？」

しっかりと生きているか脈を取って、全員気絶しているのを確認。

そして持っていた縄で四人とも締め上げて、一息。
：どうやら下の喧騒も収まったらしい、崖下を覗いたら、四人とも
無事だった。

あちら側も盗賊を縛り付け終わっているようだ。

そして、俺がふと、別の風を感じて見上げると、

「あら、もう終わってたのね。流石はダーリンだわ」

「……」

「きゅい！」

俺が見たのは、若干残念そうに、だが嬉しそうにしているキュルケ
と、

何故か俺を見て思案顔のタバサ嬢、それに加え、彼女の使い魔シル
フィードであった。

No. 16! 「港町への道中」 (後書き)

雪「一般人じゃ一発KO。こんなんで大丈夫か？」

村「ギーシュが何故二股男か知っているかについては、サイトから聞いた事にしといてくれ」

2011／12／15

ルイズに対する

キングダムハーツの世界で言えば、彼女はきっと『強い光の心』の持ち主に違いない。を主人公の思い違いに修正。

ご指摘なされたエイワス殿、有難う御座います。

槍「あれエ…俺要らねえんじゃねエ…」

先生、文才が欲しいです！

お知らせ

まず始めに一言。御免なさい。

色々と書いている内に、納得出来ない所や治したい所が色々出てきたので、

また、初めから書き直していきたいと思います。

・主な変更点

・『謎の肩当て』が最初から使用可能

効果はアーマー・テラ（鎧の男）の姿になり能力を使用する事が出来るという物。

・『ヴァニタスの能力を扱う事が出来る』但し、アンヴァースを作り出す事は出来ない。

・幼少期の話数を増やす

それ以外は特に変更せずに行きたいと思います。

何卒、身勝手な作者であります（；´Д｀）

No. 1 「スプラッターな死亡事故」 (前書き)

気を取り直して一本目。

といっても、内容を少し弄っただけですが。

No. 1 「スプラッターな死亡事故」

「知らない天井だぜ☆」

…ごほん、開始初っ端から弾けてしまった俺、村雨だ。

現状を報告するとすれば、死んだと思った知らない天井が見えた。つてところだ。

『大丈夫ですか、主に頭が。』

「大丈夫だ、問題ない…ってかおまい誰や？」

神だ！目の前に神がおる！

——まー予想なんですけどね？

『知ってたんですか…？』

「いんや、違う。…というかモノローグもとい俺の思考読むなんてお前やっぱり神だろ、」

『やけにテンションがお高いですね、…まあそれは良いとして…』

良いのかよ。

それは兎も角、この人、神であることを否定しなかったよ！
やっぱりテンプレか！『ごほん。』おっと。

『すいませんでしたあ！』

わーお、見事な土下座だね！そういえば、【土下座】ストラップと

かあったな。

何気ストラップはやってんだよ。myフレンドの筆箱にジャラジャラ。ボクサーパンツの奴ばかり。

ん、過去を思い出してたけど気にしたら負けだ。別に何かに負ける訳ではないが。

それは兎も角、目の前で土下座しているのは割りと若い姿をしている自称神。

——って追い待て、なんで俺は土下座されてんだよ。

『私のミスで（省略）貴方は死んでしまったんです……。』

「はあ！？…要するにアンタの事務用インクが俺の生命を現す、紙に落としてしまったと？」

…さてよ、でも俺の死因、溺死じゃねーから。あ、別に死因とは関係ないのね。インク関係ないのね。

だって俺の死因、トラックに吹き飛ばされてスプラッタな筈だから！
因みに人間って首ぎっちゃんしても、血が流れている数秒——それこそほんの数秒だが、生きてる。

あれはキタな。色んな意味で。

『そこで私は・・・私の上司なんですけど、その上位の神様から貴方を侘びで転生させなさいとの志命を受けたんです。』

「なるほろ。で、俺は生き返られるのか？」

人間、二度目の生が得られるなら、泣いて藁にしがみつくぜ。
つまりは俺もその一人ってわけだ。まあ、特に未練もないからこん

な平常心でいられるんだろうけども。

毎日、何がしたいのか解らない日々だったからなあ

『元の世界には無理です…すみませんけど、それが掟となってるので…。』

「はあ、して、その掟ってなんぞ？」

——つまりは、俺をもといた世界に戻すと、輪廻の輪が崩れるらしい。

それってやばいのって、聞いてみたよ。そしたら、目の前の神様、顔青くしてたよ。

よっぽど酷いことが起きるんだな。すげー気になるぜ☆

正直、納得の？な？の字もたいして出来てないが、生き返られるなら結果おーらい。

「んで、なんなら俺を生き返らせることが出来るんだよ？」

『えっと…簡潔に言えば、ばられるわーると平行世界に転生してもらいます。』

「それって、創作の世界とか、なのか？」

はい、と頷く神に俺のテンションはじわじわ上がり始めた。

どうせ楽しむなら、楽しもう。―そして一番気になる部分、お願いをどれほど聞いてもらえるかは…。

『CAPCTYは4つまでですね。…私より上位の存在になれば、まだ増やせますが…。』

「あー、それで十分な気がする。」

ひゃっはー！

お願いごとは4つまで。やったね！

ならばどんなお願いをするか。

あー、こういう時って、いざとなるとどんなチートにしようか迷うな…。

というか、チートの基準がわからないし、それらしいバトル漫画も少しも持ってねえ。

「うーん…なら一個目は…。」

一個目。

思いついたのは、ゲーム「キングダムハーツ2」からN.O. 13，
No9の能力を得る、というものだった。

しかし、神様の『機関全員能力を使えるようにしますね』との
一言により、全取得。

どうやら武器も使えるらしい。

二個目。

二つ目以降は悩んだ。

正直、一つ目で「僕、満足！」と草薙○君ボイスが響いたのだが、
どうせなら何か追加することに。

ノーバディーを創り出す能力にすることにした。―ダスクからトラ
イワイトゾーンまでなんでもござれた。

：確かノーバディーの発生条件やらなんやらある気がしたが、まあ
気にするな（何

三個目。

俺が憧れてもいた、『鎧の男』の能力を使えるようにしてもらった。
やったねたえちゃん。

四個目。

んで、次は『諦めろん』な人：『ヴァニタス』さんの能力を使える

ように。

あの人の声優は中々好きだっただけに、これも嬉しい。

『容姿等は私にお任せあれ！』

うん、僕、満足。

『それじゃあ、貴方の行く世界ですが、【ゼロの使い魔】の世界です…抽選なので仕方ないですね』

「え、それって何処——うわちよおまこれ聞いてねえ」

何処ですか、と問おうとしたらいきなり視界がぶれ、気づくと謎の穴にまっさかさま。

嫌な予感しかしない俺だった。

No. 2 「新しい両親」

ここはトリステイン王国内のある村。

その小さな村のひとつの家。

「生まれたぞ！」

「男の子ですって！」

「わー、すごい！」

その家で、一人の男の子が生まれた。

「おぎゃあああ、おぎゃあああ。」

その子供の名前は「ヴェン」。
産声を上げるその子は――。

「おぎゃあああ。（なんてこったい…）」

転生した村雨、その人だった。

俺だ。村雨だ。

意識が無くなったと思ったら、次、目を覚ました時はこうなったんだ。

――畜生、あの神、急に俺を急かしたのはこのせいか！

「リーナ、見ろよ、俺たちの子供は無事に生まれたぞ…！」

「え、ええ。私たちの子ね。…ふー…疲れたわ…」

どうやら声の主が俺の親らしい。

つまりは俺…村雨は赤ちゃんに転生したらしい。なんてこったい。

――あれ？確かノーバディーはデフォルトで不老だったよな？

（大丈夫ですよ。一応、見た目それなりの大人で止まるようにしておきました。）

あれ、答えてくれた。

まあ、とりあいずこれで一生赤ん坊、とかいう詰み状態は回避できた。

しかし、そろそろ赤ん坊の本能（？）で叫び続けたので疲れた。それに、眠くなってきた。

「おぎゃああう。（ねーむー。）」

そして俺も母となった女性の腕の中でこの世界初めての眠りについたのだった。

☆☆☆☆

キングクリムゾン。

——ぶっちゃけ、五年程時を飛ばさせて頂いたぜ！

赤ん坊の毎日は發揮しいって退屈だろうからね！

さて、現在五歳の俺は、周囲に愛されて育つ事が出来た。

直ぐに立って歩いたり、少しだが話せるという成長の早さに、両親と周囲を驚かせた。

正直、後から、これって異常なの見せて良かったのか？と、不気味がられるかと内心ヒヤッとしたが、思いのほか抵抗がないらしく、いまでも変わらず普通の子供として扱ってくれていた。

この村はセンチュエル公爵という貴族が治める領地のひとつで、他の北村、西村などとまとめて、「センチュエル領」と呼ばれているようだ。どうやら、貴族や平民、そういう隔たりがあるところを見ると、割と昔な時代らしい。

そして、この世界には、御伽噺ともいえるような物が存在していた。

「魔法」だ。

会話で飛び交う「魔法」という単語に、俺は毎回聞き間違いかと思
い首を傾げていたのだが、実際に母が魔法で物を動かしているところ
を見て、信じざる終えなかった。

に、しても。

実際、魔法使いが出るような小説や漫画で【ゼロの使い魔】という
タイトルは聞いたことが無いな。

ハリー・ポッターとかなら：まああれは有名だしな。

「まー、いいかあ。」

実際全然良くないのだが、まあ目的の一つ「平和に生きる」という
目標は達成したい：と思うな。

あー、でも魔法使いの世界に來たのだから、無論、魔法は使いたい
と思う。

魔法使いになれるのは最初から決まっているらしく、両親、または
先祖に魔法使いの血を持つものがないと使えないそうだ。

平民にはその血が流れていないものがほとんどで、魔法が使えるの

は貴族の者たちがほとんどだそうだ。

まあだから、貴族と平民という格差があるんだろうな。
この世界では魔法は圧倒的らしいし。

因みに、母はメイジであるのに、何故貴族でないのかというと、没落貴族なのさそうだ。

そこで平民である父と出会い、今があるらしい。

――で。

肝心の魔法適正といえば…。

「せんせー、杖契約ってどうするんでせう？」

「何いつてるのヴェン。…ほら、もう一度よ。」

母に契約の仕方を教わるも、それらしい反応すら見せない始末。
…おい、父ちゃんなんでホッとしてんだ!?

「良いじゃないか、リーナ。杖契約だって何週間もかかる奴もいるらしいじゃないか。」

ふーん、そうなのか。

でも、それっていつか使えるって事なんだよな。それじゃあ別にホッとするかどうかでもないような。

「それに、『魔法が使える』ってだけで、仲間はずれにされるかもしれないだろ？」

さ、流石は我が父……そこまで考えてくださるとは……！

「

それもそうねえ……、でも我が子がどれほど魔法が使えるかと思うと、わくわくしない？」

まあ、僕も気になる事は気になるけどね、と子供のように目を光らせる母を見ながら苦笑する父。

ど

っちかとゆーと、夫婦ってよりも、兄妹みたいだな。

父の名前はレイルと言う。

平民にはどうやら苗字が無いらしく、原則、下の名前だけという事になるようだ。

趣味は読書。日中は薪割り等、仕事を終えた後は良く読書をしてい

る姿を見る。

何でも、元傭兵だったそうで蓄えてある金…（平民が持つにはとても多い量）で商人から本を買って居るようだ。

無論、俺も読書は好きなので父の膝の上に乗ったりしながら本を眺めたりしていた。

実際、文字が最初は全然読めなかった。…まあ今では父の教えにより、ある程度の文字は読めるが。感謝。

「うん？ヴェンは本が好きなのかい？」

「うん、本大好き。」

「そうかそうか。やっぱり本というのは良いもんだよ。」

それについては喜んでくれたようだ。…だが父よ、五歳児に本に付いて熱心に語るというのも。

まあ、その気持ちは良くわかったが。

誕生日に、『勇者イーヴァルディ』…だっけか、そんなタイトルの本を買ってもらった。

何気面白かった。

父は厳つい体をしている訳では無い。というか、『本が読むのが趣味です』と言えば、確かにそう見えるという、比較的痩せた体型をしている。

それでもまあ、筋肉は付いているのだが。カッチカッチやぞ、お前。

母に聞いても、「昔は凄かったわよ…今も変わらないかもしれない

けど…」と何故か遠い目をして
真面目に答えてくれない。おゝい、帰ってこい。

さて、そんな遠い目をする金髪の美しい女性――母の名はリーナ。
上でも述べたように、母はメイジである。苗字は父の伴侶になると
決めた時、捨てたらしい。

趣味は運動。体を動かすのが好きなようで、健康にも良いからと言
って毎朝俺を連れ出して
村をランニングする。五歳児に無茶させんなよと思ったが、以外と
悪くないので付き合っている。

御陰で、近所の子供達との鬼ごっこでは何時も生存させてもらって
いる。

俺暇人だな、おい。

というわけで、俺は二人の息子としてこの世に生を受けたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0840x/>

No.0 !

2011年12月16日22時45分発行